

秋田県文化財調査報告書第222集

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI

—— 上野遺跡 ——

1992・3

秋田県教育委員会

国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI

うわの  
—— 上野遺跡 ——

1 9 9 2 • 3

秋田県教育委員会

## 序

秋田県には、私達の祖先が嘗々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。

このたび、大館市を通る国道103号道路改良事業に係わり上野遺跡が発掘調査の対象となりました。

調査の結果、縄文時代前期～後期の竪穴住居跡、袋状・フ拉斯コ状土坑からなる集落跡、及び該期の土器、石器が検出・出土したほか、本県では例の少ない擦文土器が平安時代の竪穴住居跡から出土しました。擦文土器は、その分布の中心を北海道におくものであり、当時の文化交流を考えるうえでも一級の資料と思われます。

本書は、これらの成果をまとめたものであり、地域の歴史や文化を学習・研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、御協力いただきました秋田県土木部、北秋田土木事務所、大館市教育委員会、はじめ関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成4年3月10日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顯信

## 例　　言

- 1 本報告書は、国道103号道路改良事業に係る上野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 自然科学的分析は、炭化材の同定を、パリノ・サーウェイ株式会社に業務委託し、その報告を掲載した。また鉄製品の分析を新日本製鐵TACセンターに委託し、その顯微鏡写真等を卷末に掲載している。
- 3 調査ならびに本報告書の刊行にあたって、次のの方々から指導・助言を賜った。(順不同)  
板橋範芳(大館市教育委員会)、秋元信夫・藤井安正(鹿角市教育委員会)、越田賢一郎(財團法人北海道埋蔵文化財センター)、久保泰(松前町教育委員会)、宮宏明(余市町教育委員会)、大島秀俊(小樽市教育委員会)、三浦圭介・岡田康博・羽柴直人・木村高(青森県埋蔵文化財調査センター)、大澤正己(たたら研究会・新日本製鐵株式会社)
- 4 本報告書の執筆は、高橋学が行い、石川真一、小山内透、藤岡光男の協力を得た。
- 5 調査に係わる全ての資料は秋田県埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　　例

- 1 本報告書に収録した遺構実測図に付した方位は国家座標第X系による座標北を示す。
- 2 本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1/40を原則とし、適宜1/20、1/60縮尺も加え、それぞれスケールを付している。
- 3 本報告書に収録した遺物実測図の縮尺は、縄文土器・磨製石器・砾石器は1/4、平安時代の遺物及び土器拓影は1/3、剝片石器は1/2であり、それぞれにスケールを付している。
- 4 本報告書掲図中に使用した土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に掲載した。
- 5 掘図中の遺物実測図には器種を問わず通し番号を付した。それらは図版中の遺物写真的番号とも対応する。
- 6 土層記号は基本層位にローマ数字を用い、遺構埋土にはアラビア数字を用いた。
- 7 遺構番号は検出順に連番としたが、精査過程において欠番となつたものもある。
- 8 遺構の種別を表す略号は以下の通りである。

S D	溝状遺構	S I	竪穴住居跡
S K	土坑、フ拉斯コ状土坑	S N	屋外炉、焼土遺構
- 9 掘図中に使用したマーク、スクリーン・トーンは以下の通りである。その他については、個々に凡例を示してある。

[ ] 地山

[ ] 烧土

[ ] 炭化物

○ 土器 ● 石器

## 目 次

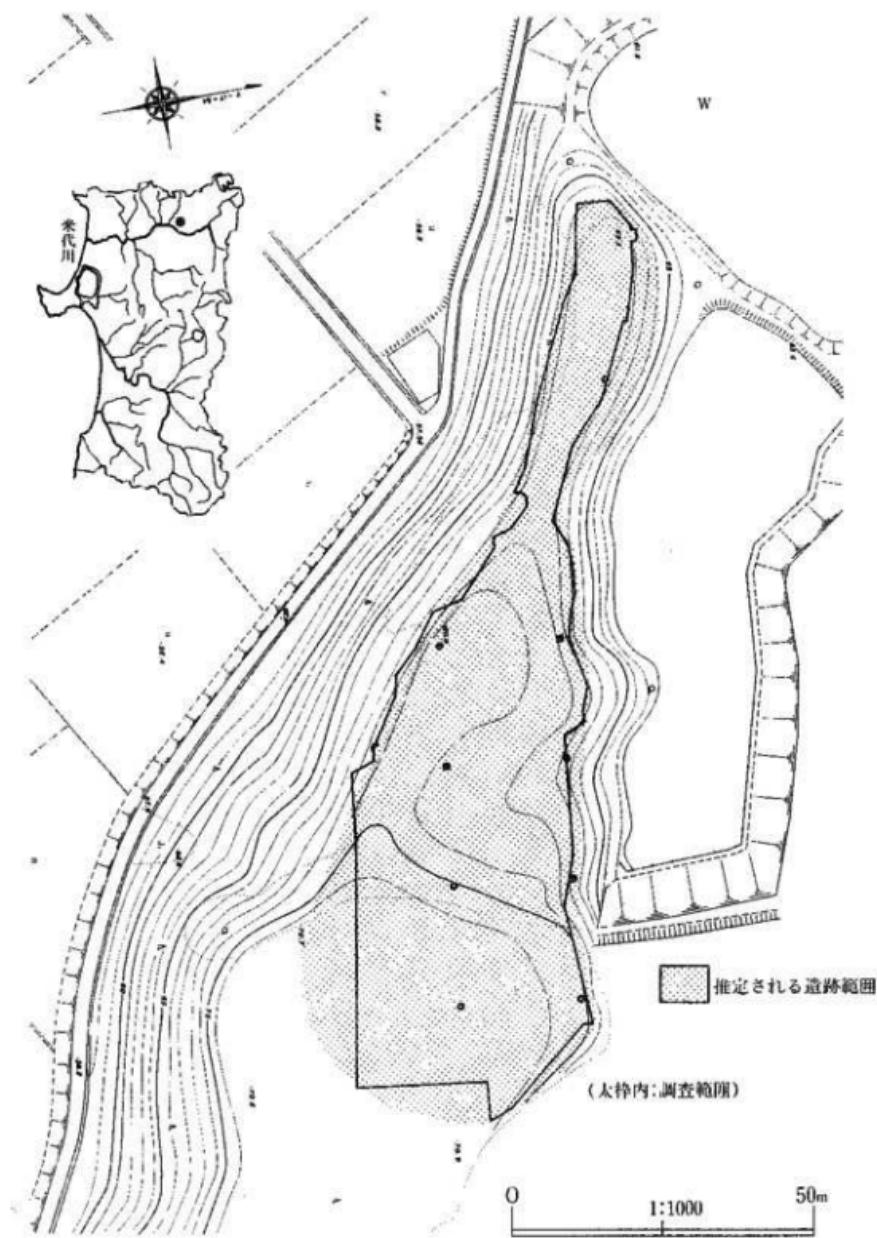
序

例言

凡例

目次

第1章 はじめに .....	1
第1節 発掘調査に至るまで .....	1
第2節 調査の組織と構成 .....	1
第2章 遺跡の立地と環境 .....	2
第1節 遺跡の位置と立地 .....	2
第2節 周辺の遺跡 .....	2
第3章 発掘調査の概要 .....	6
第1節 遺跡の概観 .....	6
第2節 調査の方法 .....	8
第3節 調査経過 .....	8
第4章 調査の記録 .....	12
第1節 検出遺構と出土遺物 .....	12
第2節 遺構外出土遺物 .....	70
第5章 自然科学的分析 .....	84
第1節 炭化材同定 .....	84
第6章まとめ .....	87
図版 1~30	



第1図 遺跡周辺地形図

## 第1章 はじめに

### 第1節 発掘調査に至るまで

国道103号道路改良建設事業（通称大館南バイパス）は、大館市山館～十二所間が既に終わり供用されているが、大館市片山～山館間の全長7,677mについては未開通である。この予定線は、山館から萩野台までは奥羽山脈から大館市東部に延びる山地から連なる台地上を通り、萩野台より北西部では市街地を避けて冲積地を通って片山の台地上に通ずるものである。路線のうち山館から萩野台に至る間は、標高70～90mの段丘縁辺部にあたり、昭和60年度の分布調査で8遺跡の存在が判明している。このうち昭和61年度は、上ノ山I・上ノ山II・鯉釣・山王岱遺跡の4ヶ所について範囲確認調査が行なわれた。これを受け、昭和62年度に上ノ山I遺跡、上ノ山II遺跡、及び山王岱遺跡の一部（東側部分、第1次調査）の発掘調査が実施され、翌年に調査報告書・概報を刊行している。昭和63年度に入り、同改良事業の計画変更が、拡幅という形で示され、昭和62年度に発掘調査を終了した3遺跡（調査区）の周辺部調査の必要が生じることとなった。このため、平成元年5月から上ノ山II遺跡を、同年7月より山王岱遺跡の第2次調査を実施した。同年山王岱遺跡と池内遺跡間の詳細分布調査が実施され、池内遺跡よりの台地縁辺部に绳文時代の遺跡が所在することを確認した。小字名から上野遺跡と命名された。調査対象範囲が不明確であったため、平成2年に再度範囲確認調査を実施、路線内では2,830m<sup>2</sup>がその対象となることが明らかとなったものである。

### 第2節 調査の組織と構成

所 在 地 秋田県大館市池内字上野270外

調査期間 平成3年8月19日～11月22日

調査目的 国道103号道路改良事業に係る事前調査

調査面積 2,830 m<sup>2</sup>

調査担当者 高橋 学（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）

石川 真一（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）

総務担当者 佐田 茂（秋田県埋蔵文化財センター主査）

佐々木 真（秋田県埋蔵文化財センター主任）

調査協力機関 秋田県土木部北秋田土木事務所、大館市教育委員会社会教育課

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置と立地

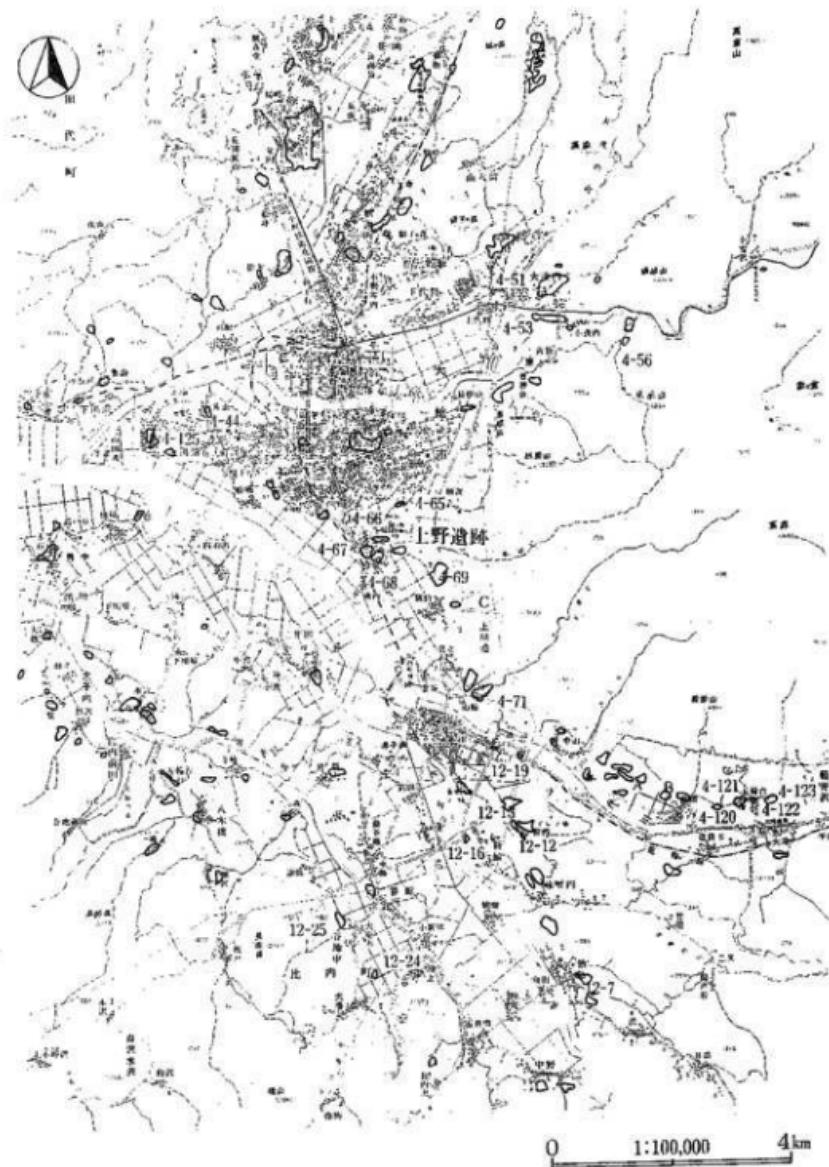
上野遺跡は、秋田県北東部の大館市池内に所在する。位置は、北緯 $40^{\circ}15'15''$ 、東経 $140^{\circ}34'30''$ 。JR奥羽本線大館駅の南南東約3.8kmである。遺跡の占地する上野地区は、大館市東部に位置する高森（海拔593m）を中心とする山地の西縁にあたる。この山地には大小の沢が形成されており、本遺跡に係わる沢として西から東に切れ込む鰐釣沢が南限を画し、鰐釣沢ほど発達は示していないものの、北限には柄沢が位置する。2つの沢に画された台地は必然的に東西に長く延びる。遺跡はこの台地の西南端にあたり、標高は70m前後である。台地の前面（南面）には沖積地が広がり、その比高差約15mである。

遺跡は、地質的には第四系火山噴出物からなる開上段丘面に立地する。土壤図から読み取ると、本遺跡の段丘面は、黒ボク土壤（鰐測統）からなる。

### 第2節 周辺の遺跡

第2図に示した本遺跡を中心とする東西約13.5km、南北約18.5kmの図幅中には、縄文時代～中世・近世の遺跡が124ヶ所周知されている。この内、本節では過去に発掘調査された遺跡、上野遺跡周辺の遺跡に限って一覧表として掲載する。なお地図の番号は、1991年刊行の『秋田県遺跡地図（県北版）』に載せられている登録番号であり、頭の4は大館市を、12は比内町であることを示す。A～Cは、遺跡地図刊行後に周知された遺跡であり、A、Bは1991年に曲田地区農免農道整備事業に伴う発掘調査が実施された上聖遺跡、家ノ後遺跡であり、Cは1990年に上野遺跡同様国道103号道路改良事業に伴い発掘された鰐釣遺跡である。

なお『遺跡地図』によると、周知の遺跡「鰐釣館」(4-69)には、大館市で調査を行った山王台遺跡、秋田県が調査を行った山王岱遺跡が含まれている。



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 上野遺跡周辺の主な遺跡一覧

大館市

番号	遺跡名	所在地	時代・時期	備考
A	上聖	曲田字上聖	縄文(前~晩)	
B	家ノ後	曲田字家ノ後	縄文(中~晩)	
C	鉤釣	鉤釣字館	縄文、平安、中世	文献1
4-13	福館橋折野	福館橋折野	縄文(前・中・晩)、平安	文献2
4-44	片山館コ	片山3丁目	統縄文、中世	文献3
4-51	諏訪台C	大茂内字諏訪台	縄文、弥生、平安	文献4
4-53	塚ノ下	茂内字塚下	縄文(前・中)、平安	文献5
4-56	玉林寺跡	茂内字鬼ヶ台	縄文(中)、中世	文献6
4-65	扇田道下	字扇田道下	縄文(中・後)	
4-66	萩ノ台I	小館花字萩ノ台	縄文(中・後)	
4-67	萩ノ台II	小館花字萩ノ台	縄文(前・中)	
4-68	池内	池内字上野	平安	文献7
4-69	鉤釣館 (山王岱・山王台)	鉤釣字山王岱、 柄沢字山王台	縄文、平安、 中世	文献8
4-71	山館上ノ山	山館上ノ山	縄文(早~晩)、平安	文献9
4-120	沢口	曲田字沢口	縄文(後)	文献10
4-121	鳶ヶ長根II	軽井沢字鳶ヶ長根	縄文(晩)	文献10
4-122	鳶ヶ長根III	軽井沢字鳶ヶ長根	縄文(晩)	文献10
4-123	鳶ヶ長根IV	軽井沢字鳶ヶ長根	縄文(早・前・後・晩)、弥生	文献10
4-125	芋堀沢	餅田字根下戸道下	縄文(前・中)	文献11

北内町

12-7	大日堂前	字大日堂前	縄文、平安	文献12
12-12	袖ノ沢	字宿内袖ノ沢	平安	文献13
12-13	横沢	字扇田字横沢	縄文(早・中)、平安	文献13
12-16	真館	真館字真館	平安	文献14
12-19	本道端	扇田字本道端	縄文(早~中・晩)	文献15
12-24	谷地中館	谷地中字谷地中	縄文(前・後・晩)、平安	文献16
12-25	細越	筆館字細越	平安	文献17

## 文 献

- 1 「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書山一館跡遺跡」秋田県教育委員会 1991 (平成3年)
- 2 「福館遺物包含地、橋桁野堅穴住居址発掘調査概報」大館市 1973 (昭和47年)
- 3 「大館市片山「館コ」発掘調査報告書 第1次」大館市編さん委員会 1973 (昭和47年)  
「大館市片山「館コ」発掘調査報告書 第2次」大館市編さん委員会 1974 (昭和48年)  
「片山館コ遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 1990 (平成2年)
- 4 「源訪台C遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 1990 (平成2年)
- 5 「摩ノ下遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 1979 (昭和54年)
- 6 「玉林寺跡発掘調査報告書」大館市教育委員会 1986 (昭和61年)
- 7 「池内遺跡」大船桂高校社会部 1973 (昭和48年)
- 8 「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報—山王岱遺跡—」秋田県教育委員会 1988 (昭和63年)  
「大館市山王岱遺跡発掘調査報告書」大館市教育委員会 1990 (平成2年)
- 9 「国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I—上ノ山I・上ノ山II遺跡—」秋田県教育委員会 1988 (昭和63年)  
「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II—上ノ山II遺跡第2次調査—」秋田県教育委員会 1990年 (平成2年)
- 10 「国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会 1981 (昭和56年)
- 11 「茅場沢遺跡発掘調査報告書」大館市教育委員会 1972 (昭和47年)
- 12 「大日堂前遺跡発掘調査報告書」比内町教育委員会 1982 (昭和57年)
- 13 「味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—袖ノ沢・横沢遺跡—」秋田県教育委員会 1989 (平成元年)
- 14 「真館緊急発掘調査報告書」比内町教育委員会 1973 (昭和48年)
- 15 「本道端遺跡発掘調査報告書」比内町教育委員会 1973 (昭和48年)
- 16 「谷地中館遺跡発掘調査報告書」比内町教育委員会 1978 (昭和53年)
- 17 「細越遺跡緊急発掘調査報告書」比内町教育委員会 1976 (昭和51年)

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

上野遺跡は、東から西に延びる台地の舌状部先端に位置する。調査前の観察及び範囲確認調査において、調査対象区のはば中央に北から南に向かって開析されている小さな沢（沢1と仮称）の存在を確認していた。調査の結果、この沢は二叉に分かれていることが明らかとなった（沢頭が南に向く部分を沢1A、東に向く部分を沢1Bとする）。調査前の観察では見いだせなかつたが、沢1の西約50mにも堀切り様の小規模の沢が形成されていることが判明した（沢2と仮称）。ちょうど台地端部が馬背状に細くなる根本の部分にあたる。2つの沢により調査区は三分された形となる。調査後の沢の位置は、第4回遺構配置図を参照いただきたい。沢1を含む東側を調査区東部、沢1と沢2の間を調査区中央部、沢2以西を調査区西部とする。沢部以外はほぼ平坦であり、西端部で標高68~68.5m、中央部で68.5~69.5m、東部で69.5~70.3mを計測する。沢の現地表面から底部までの深さは、沢1Aで1.85m、沢1Bで2m、沢2は約1.5mである。

ところで、上野遺跡の調査範囲（第1図太枠内）は、そのまま遺跡の範囲としてはほぼ認定できると考えている。それは範囲確認調査等によって調査範囲の東側には遺構・遺物の分布が認められず、北・西・南西端は地形的に画されていること、南東端は、遺構・遺物の分布が極めて粗いことから第1図網点部分を遺跡推定範囲として把えることができる。

遺跡の現況は、その全城が杉林、雜木林となっている。

遺跡基本層位は、東西を51ライン、南北をM Jラインに土層観察用ベルトを設定し、ここで観察を行った。第3図には、沢1に係る部分を図示した。これに従うと以下のようになる。

I-a層：黒褐色土（10YR2/2）表土。締まりあり。

I-b層：黒色土（10YR2/1）締まり上位ほどあり、下位で平安時代の遺構・遺物確認できる。  
II-a層：褐色土（10YR4/4）浮石を多量に含む層。

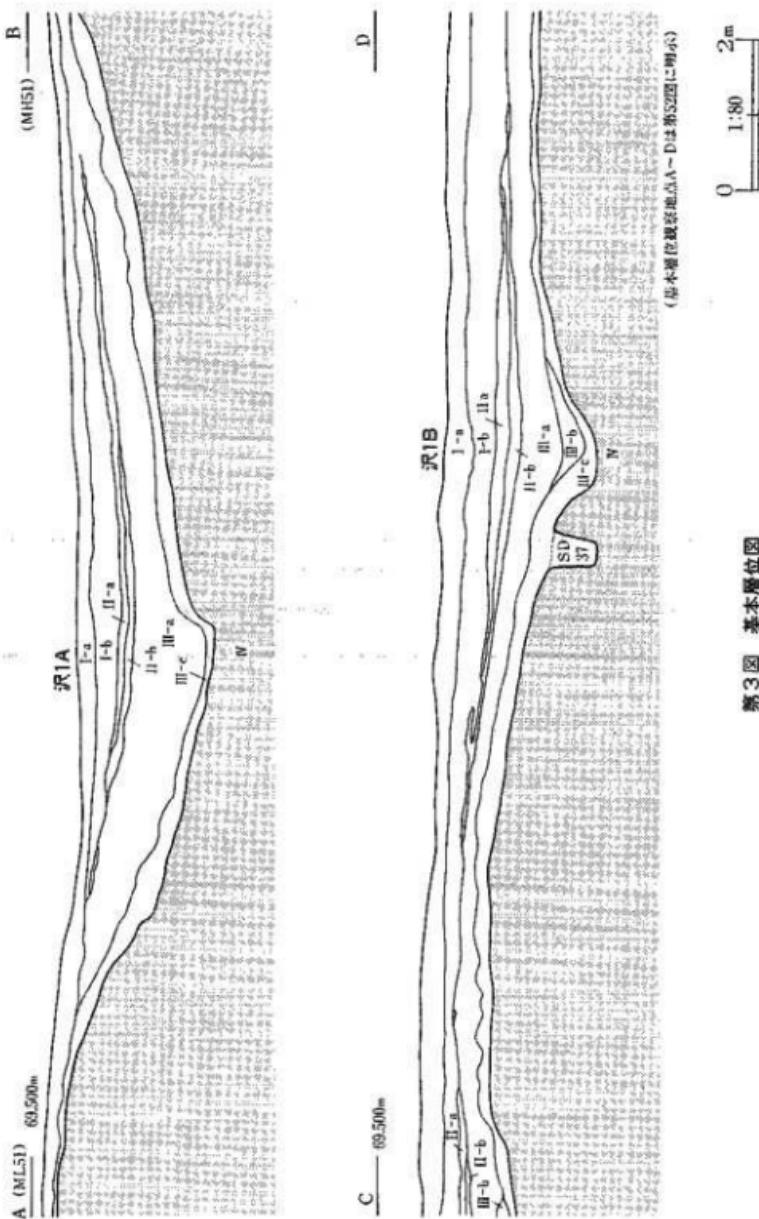
II-b層：明黄褐色土（10YR6/6）浮石を主とする層。純層に近い。層厚は沢1Bで18cm。

III-a層：黒色土（10YR1.7/1）粘性あり、混入物ほとんどなし、縄文土～後期の土器出土。  
層厚最深80cm（沢1A）。

III-b層：黒褐色土（10YR3/2）締まりはa層よりややあり、地山粒子を斑状に少量含む。

III-c層：暗褐色土（10YR3/3）地山漸移層。地山粒子・小ブロックをb層より多く含む。

IV層：にぶい黄橙色土（10YR6/4）～明黄褐色土（10YR6/6）地山土、砂質粘土。



また台地平坦面では、全体的に表土（I層）から地山面（IV層）までの層厚がなく20~40cm程度である。間層は沢部のIII-c層に相当する地山漸移層1枚である。

## 第2節 調査の方法

発掘調査は、道路計画路線の中心杭No.143を基点とし、これと中心杭No.145を結んだ線を仮の東西基線とし、これに直交する線を南北基線とし、4m×4mの方眼杭を打設してのグリッド法に換った。方眼杭には、東西方向に東からMA・MB・MC---MS・MT・NAとアルファベットの組み合わせをあて、南北方向には、南から北に向かって外順となる連続した2桁の数字をあて、その両を組み合わせて各グリッドを呼ぶこととした。方眼杭に附されたグリッドの名称は、その南東隅に位置する杭のアルファベット・数字の組み合わせをあてている。基点であるNo.143中心杭をMA50とした。なお南北基線は、座標北から東に7°17'54"偏している。

検出した遺構は、その種別を問わず一連の番号を付している。番号登録の後、遺構と断する事のできなくなったものについては、これを欠番としている。

遺構の実測は、4m毎のグリッド杭を利用しての簡易造方測量を用いている。その他、写真などの調査の記録方法については、秋田県埋蔵文化財センターで実施している方法に準拠している。

遺物の取り上げについては、現場で遺物1点あるいは1個体の平面位置（X・Y座標）、垂直位置（標高）を台帳に記入しておき、整理作業時にパソコンコンピュータを利用して「遺物出土地点図」を作成した。作成に使用したプログラムは、吉田真氏作製の「遺物管理プログラムver1.0」である。

## 第3節 調査経過

8月19日、調査開始。以下は調査日誌からの抜粋である。現場で発掘作業に従事してくださる方々へ作業の手順などの説明を行う。午後より調査区内の下草刈り、雑木等の撤去を実施。20日、委託事業であるグリッド杭打設が始まる。22日、調査区北東部より粗掘り開始する。基本層位観察用ベルトを設定する。グリッド杭打設完了。29日、調査区中央部南側でも粗掘りに入る。MH46グリッドI層下面で弥生土器と思われる破片出土。30日、MK48グリッドで竪穴住居跡と思われる円形プラン確認、S101とする。

9月2日、調査区中央部～東部（沢1を除く）全域で粗掘りの手が入る。調査区東部は剥片

の出土多い。3日、MM48グリッド周辺にて長さ10m以上の溝あり、SD02とする。5日、SD02は16m以上ありそうである。粗掘り続行。9日、沢1掘り下げ、沢底面より縄文土器出土する。10日、大館神明社のお祭り。粗掘りと並行して遺構確認のための精査を実施。沢底面より石匙2点出土。11日、51ライン以南の粗掘り終了。

17日、MH54グリッドII層上面で白色粘土と焼土を検出。MA54グリッドI層下面で石組炉と思われる遺構確認する。19日、雨のため沢部以外の粗掘りを行う。24日、稻刈りのため欠勤多い。17日に確認していた石組炉は2組あることが明らかとなり、住居が少なくとも2軒は重複しているようである(SI18・19)。25日、沢1B底面で焼土の分布(SN24)あり、周辺より内外面に縄文が施されている土器片出土。

28日土曜日、本日明け方5時頃、台風19号通過に伴う強風のため、プレハブ造りの事務所兼器材収納庫及び作業員休憩所の2棟が土台ごと吹き飛ばされる。強い南風を受け、北側の沢内(高低差約10m)にもプレハブの部材、器・機材など一面に散乱する。台風の去った午後より出勤簿、図面などの重要書類のみ引き上げる。ロッカーに入っているカメラ、レベルなどの器材は鍵が行方不明であることと、二次災害の恐れがあるためそのままの状態で放置する。翌週30日、プレハブは原形を留めない状態であり、危険で近づくこともできない。周辺に散乱している各自の雨具などを回収する。事務所にあった机は脚が折れ、ロッカーに入っていたカメラ、交換レンズ、レベルなどは全滅、ガステーブルは折れ曲がり、未使用のフィルムも水没し使用不可である。

10月1日、昨日に続き台風災害の後かたづけ。電話線も切断され使用できない。3日、未だに調査に入れず、調査区内に倒れ込んできた杉木、枝葉の除去を実施。4日、本日より調査再開。有り合わせの材料で機材収納の小屋を建てる。プレハブ再建の目処はつかない。

10月14~16日は、鹿角市天戸森遺跡の範囲確認調査のため、本遺跡の調査は一時中断する。この間に同じ場所にプレハブが再建される。22日、再び電話が使えるようになる。23日、沢1大湯浮石層直上で把手付土器、刀子片出土する。この周辺ほぼ同一レベルで焼石、炭化材などもあり、何らかの遺構がありそうである。24日、焼土、焼石、炭化材のまとまりは3箇所あり、SX38・39・40とする。SX38ではヘラ書き文様のある土師器出土(後日、擦文土器であることが判明)。25日、SX39・40は沢の窪地を利用して竪穴状の掘り込みを伴うようである。

28日、調査区中央部東端(沢1寄り)で竪穴状の遺構確認、SK143とする。SI110掘り下げ、石圓炉あり、廃棄時に石の半分は抜き取られたようである。29日、沢1内のSN39は竪穴(SI40と改称)の石組のカマドであることが判明。30日、SK143は、石圓炉確認を受け、小規模な竪穴住居跡となり、記号をSI1とする。31日、鹿角市教育委員会秋元・藤井氏ら来跡、縄文時代の竪穴住居跡についての教授を得た。

11月1日、本日までの遺構数は61。S I 40カマド脇で變形土器出土、擦文土器のようである。5日、S I 10・43炉の写真撮影を行う。S I 10はプラン不明確ながら壁溝巡る。この北側に別の溝あり、別の竪穴住居跡か。本日より立木伐採などの関係で調査に入れないでいた西端部の粗掘りによく取り掛かる。6日、初霜降りる。S I 40出土の鉄製品など1/10平面図作成の後、取り上げる。7日、S I 10の主柱穴は4本であることが判明。

11日、一時雪模様。調査区西端部粗掘り完了、ジョレンかけして遺構を確認する。対象面積の割りには遺構数多い。12日、本日までの遺構数88。西端部確認面の写真撮り次第掘り下げに入る。SK70から番号を付す。13日、雨の中、ラスコ状土坑掘り下げを続行する。14日、S I 40完掘写真後、大湯浮石層を除去する。浮石下の黒色土から石窯炉(S N65)と焼土遺構(S N66)検出。本日までの遺構数92。15日、曇り一時雪。調査区中央～東部の遺構精査は終了し、全力を西端部精査に傾ける。18日、全景写真撮影を行う。地元新聞社2社取材のため来跡。19日、調査区西端部遺構掘り下げ、新聞社4社取材で来跡。20日、遺構数112となる。21日、地形図作成に入る。22日、調査区西端部SK123の精査終了を以て上野遺跡の現地での調査を完了した。

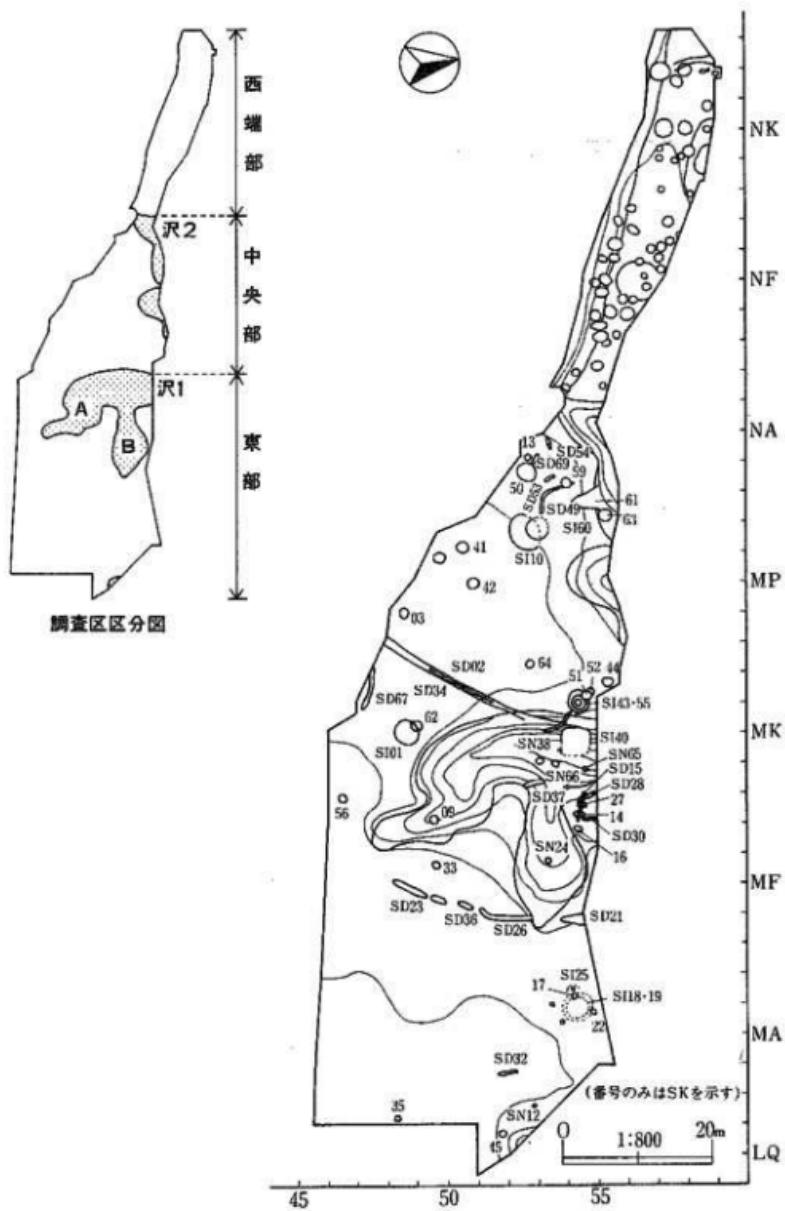


写真右上に人々が立っている場所に  
プレハブは倒っていた



写真左が事務所  
右が作業員用の  
プレハブだった

台風19号に伴う強風で倒壊したプレハブ



第4図 遺構配置図

## 第4章 調査の記録

### 第1節 検出遺構と出土遺物

上野遺跡で検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡13軒、屋外炉2基、焼土遺構3基、土坑・プラスコ状土坑73基、溝状遺構1条、平安時代の竪穴住居跡1軒、焼土遺構1基、及び所属時期不明の焼土遺構1基、溝状遺構17条の計112遺構である。

遺構の分布は、調査区南東側を除くほぼ全域に認められるが、縄文時代のプラスコ状土坑は、沢2以西の舌状台地先端部に集中して構築されている。また平安時代の遺構は、沢1内に構築されるという特異な立地を示している。

以下、遺構の記述における検出位置は、沢1を含む東側を調査区東部、沢1と沢2の間を調査区中央部、沢2以西を調査区西端部とする（第4図左上参照）。

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

該期の遺構は、全体として見れば調査区西端部に集中しているが、地形図と重ねてみれば、台地の縁辺部に集中し、中央よりには粗い分布を示す。竪穴住居跡だけに目を向けると、ほぼ同一箇所で重複している例が多いものの、それぞれの竪穴住居跡は20~40m程の間隔を保って位置している点を特徴として挙げることができる。

##### (1) 竪穴住居跡（第6~14図、図版5~11）

竪穴住居跡は、調査区東部で3軒、中央部で6軒、西端部で4軒の計13軒を検出した。

##### S I 0 1 竪穴住居跡（第6図、図版5）

調査区中央部、M J 48・49グリッド1層下面で確認した。北側でS K 62と重複しており、新旧関係は（旧）S K 62→S I 01（新）となる。

規模は、径2.8mの円形を呈する。北側で一部プランが不明確なのは根による擾乱を受けているためである。確認面から床面までの深さは10cm前後である。床面は平坦で堅く締まっている。推定床面積は、5.78m<sup>2</sup>である。柱穴状のピットは、住居内外から4本確認しているが上屋を想定し得る配列にはならない。

がは、住居東側の壁に接する位置で確認した。いわゆる石函複式かの形態を示す。「U」字状の掘り込みは長さ1.05m、幅0.65m、床面からの深さは3~8cmと浅い。東端部に2本のピット（P 2・3）を取り付く。石函部は西端部で現位置を保っているが、北・東側は不明瞭で、石函が「ロ」の字形となるのか「コ」の字形となるのか明らかではない。石函部と掘り込み部

の底面のレベルは同一で段差は認められない。石は河原石を用い、火熱のため赤変しているが、床・壁面は肉眼上ではその痕跡は確認できなかった。

遺物は、床面直上より縄文土器（第16図2）、石器（第19図29）が出土している。

S 11.9 穩穴住居跡（第7・8図、図版6・7）

### 調査区中央部、MQ52・53、MR52

グリッドI層下面で確認した。北側ではS I 60と重複し、確認状況から判断すると、(III) S I 60→S I 10(新)となるようである。

規模は、径あるいは一辺が4m前後の円ないしは隅丸方形を呈すると思われる。確認面から床面までの深さは20~28cmとなる。周壁には部分的にではあるが溝が巡る。その幅8cm前後、深さは3~8cmである。床面は平坦で堅く締まっているが、がの位置する南東側は長さ2m、幅1.7mの範囲で一段下がっている。その差は5~6cmである。この部分は特に堅く締まる。



第5図 調査区西端部遺構配置図

床面上には柱穴が4本（P 1～4）並ぶ。1本あたりの径あるいは一辺は25cm前後の円・楕円形を示し、床面からの深さはP 4の34cmからP 1の52cmまで、しっかりした掘り込みである。柱穴間の距離は、P 1～2とP 3～4間で2.5m、P 2～3とP 4～1間が2.3mと規則的である。

炉は、床面中央東側で確認した。一辺65cmの略方形の石圓炉である。西・北側の石は抜き取られていたが、残存する石は砂岩系の石を長方体状に加工していた。火熱のため赤変し、ボロボロの状態であった。炉と東側の壁の間には立石を伴うピット（P 8）と壁を切り込む形で楕円状のピットが2本（P 5・6）配されている。立石は床面からの高さ22cm（石の長さ29cm）で石頭部は赤変していた。これら立石とピットの位置関係から炉に伴う施設であった可能性を考えられ、そうすると、立石を伴う石圓複式炉と言えるかもしれない。

遺物は炉の南側、P 2と炉の間に比較的多く出土している。第16図3は、かの南側から一括で出土した深鉢形土器である。

#### S I 60 A・B 穫穴住居跡（第7図、図版6・7）

調査区中央部西側、MQ52・53、MR52・53グリッド地山面（IV層）で確認した。S I 10と重複し、これより旧い。また本住居跡も2時期あり、（旧）S I 60B→S I 60A（新）となる。規模は、残存する壁溝よりA住居跡が東西長2.4m、B住居跡が東西長約2.8m、南北長2.4m以上の円ないしは楕円形を呈すると見られる。溝は幅5～8cm、確認面からの深さ4～7cmであるが、A住居跡の西端部のみ18cmと深くなっている。

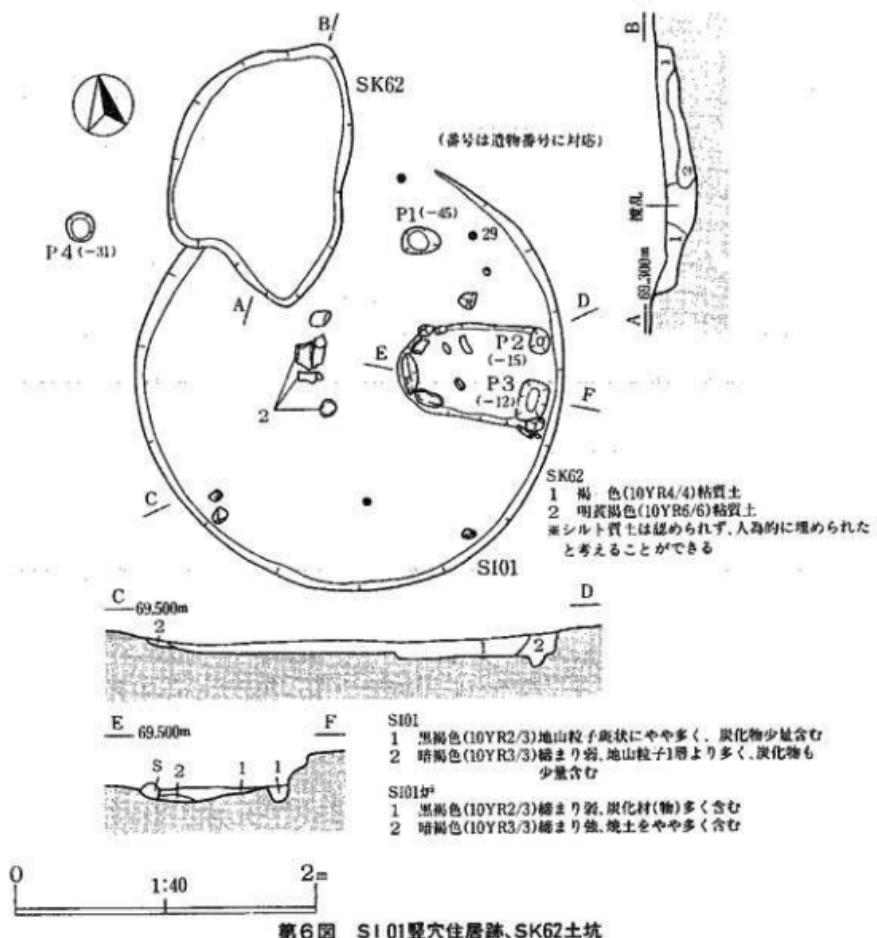
これらの住居跡については、柱穴、炉などは一切検出されず、S I 10構築に際して削平されたと想定できる。溝内から遺物は出土しなかった。

#### S I 18 穫穴住居跡（第9・10図、図版7・8）

調査区東部、MA53・54、MB53・54グリッドI層下面で確認した。S I 19とSK17、SK22と重複しており、確認状況から、（旧）S I 18→S I 19→SK17・SK22（新）となる。また本住居跡の西側にS I 25が重複する位置関係で存在するが、その新旧は不明である。

規模は、柱穴と一部残存する壁溝から判断して、南北長4.1m、東西長4.6mの略円形を呈すると見られる。推定される床面積は約14m<sup>2</sup>である。本住居に伴うと考えられる柱穴はP 5～P 16の12本である。P 11～15は近接しているが、他は1～1.9mの間隔をおいて離っている。基本的に、P 5と6、P 7と14、P 8とP 11～15の内の1本、P 9と10の4対8本が主柱を構成していたと考える。各柱穴はその径あるいは一辺が15～32cmの円・楕円形であり、床面からの深さの平均は29.6cmである。壁溝は、その幅5～8cm、深さ3～5cmにすぎない。

炉は、住居中央やや南側に位置する。「ロ」の字形を呈する石圓炉である。北・西側の石は抜き取られていた。大きさは東西にやや長く、長さ73cm、幅63cmの長方形となる。石は棒状の河



第6図 SI01竪穴住居跡、SK62土坑

原石を用い、南側の石は2段に積まれていた。炉内に向く石面は火熱で赤変しているが、底面は肉眼では顕著な赤変は認められない。

炉を構成する石には本来の機能を果たした後に転用されているものも含まれている。第21図34の台石は、炉東面の石として再利用されていたものである。

#### S I 18 竪穴住居跡（第9・10図、図版7・8）

調査区東部、MA53・54、MB53・54グリッドI層下面で確認した。S I 18、SK17・22との新旧関係は前述の通りである。

規模は、柱穴と一部残る周壁と壁溝から、南北長約3.5m、東西長約3.2mの略円形を呈すると思定できる。推定床面積は、8.95m<sup>2</sup>である。柱穴はP1～4が該当しそうであり、径15～20cmの円形を示す。床面からの深さはP1が6cm、他は22～36cmであることと柱穴配置から主柱は、P2～4の3本であった可能性もある。なおP17は本住居に伴うのか、S118に伴うのか明らかにできなかった。壁溝は幅6cm前後、深さ3～5cmである。

炉は推定される南東側の壁よりに位置する。現状で「ニ」字形を示す石圓炉である。原形状は不明であるが、抜き取られた石の存在と炉下の掘り込みの形状から北側に開口部をもつ「コ」字形の石圓炉であった可能性がある。

遺物は、S118・19いずれに属するか明らかではないが、住居北東側、SK22と重複する周辺でやまとまって出土した。接合の結果、ほぼ1個体に復元できた。第16図5は、推定口径20cmの深鉢形土器である。文様の施用順序は、粘土紐貼付→円形刺突→L R 製文→沈線→磨消となる。内面は丁寧なミガキである。色調は明褐～褐色を呈す。また第21図33は西面南側の炉石として利用されていた凹石である。

#### S125 竪穴住居跡（第9図、図版7）

調査区東部、MB53・54グリッド地山面で確認した。S118・19、SK17と重複する位置関係にあるが、その新旧は明らかではない。ただこれらと重複する箇所で壁溝などを一切検出できなかったことから、S118・19構築に際して削平された結果と判断することもできよう。

本住居は、西側の壁溝の一部と地床炉を検出したに留まり、規模は不明である。炉が住居の西端に取り付く形態と見られる。溝は、幅6cm前後、深さ5cm前後、炉は、長さ70cm、幅58cmを計測する。遺物の出土はない。

#### S143・55 竪穴住居跡（第11図、図版8・9）

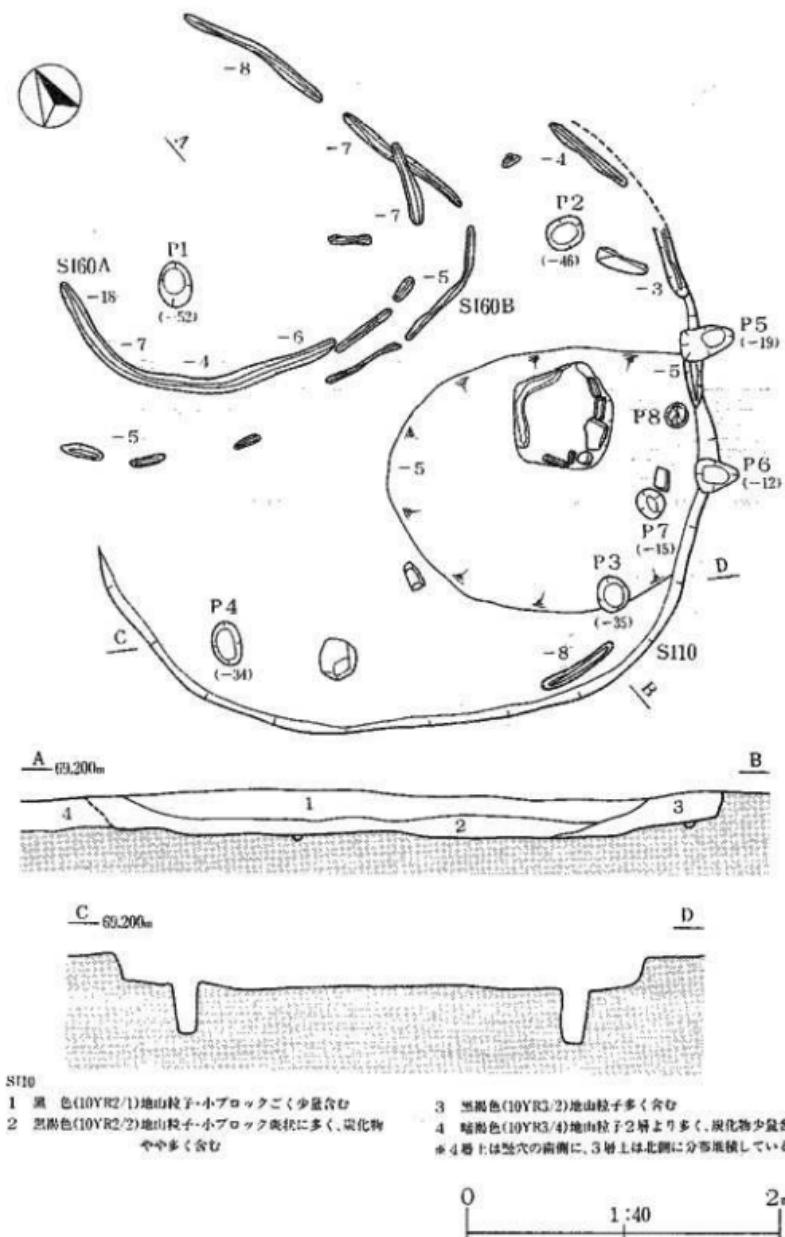
調査区中央区北東部、MK・ML54グリッドI層下面で確認した。S143・55と重複しているSK51・52の新旧関係は、(旧) S155→S143・SK52→SK51(新)である。

S143は、径1.85～1.95mの円形を呈している。床面積は2.57m<sup>2</sup>となる。確認面からの深さは36cmである。床面ほぼ中央部に長さ1.3m、幅1.15mの略円形の七坑様の掘り込みを行う。その深さは14cmである。これはS143と別の遺構（竪穴）ではなく両者一連の施設—2段構造の床面—と理解している。一段下がった床面の東よりに石圓炉を構築している。

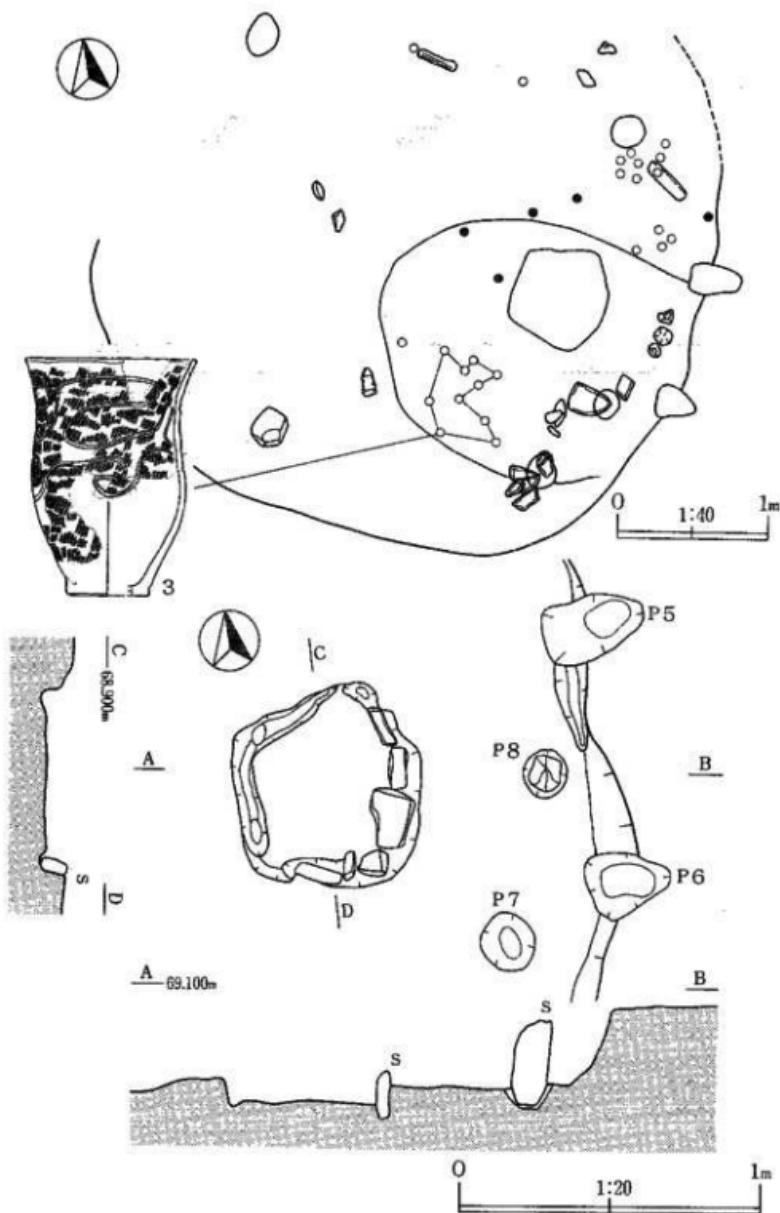
石圓炉は一辺が60cm前後の方形を呈する。他の炉に比べて抜かれている石の割合は低い。石は河原石を用い、西側のみ30cm近くの棒状の石を、他は拳大の石を使用している。それぞれの石は火熱を受け赤変している。

遺物は、埋土中より磨石が2点（第21図35、36）出土したのみである。

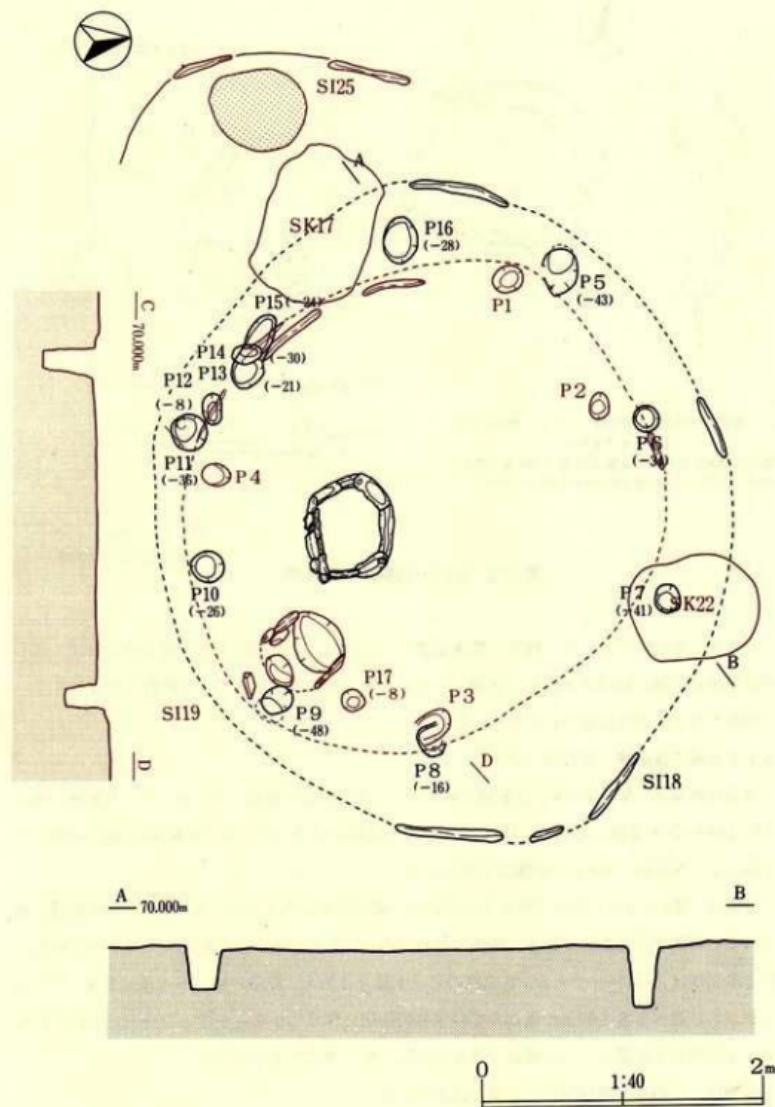
S155は、北壁を根の擾乱により失われているが、南北長約2.9m、東西長2.4mの隅丸方形



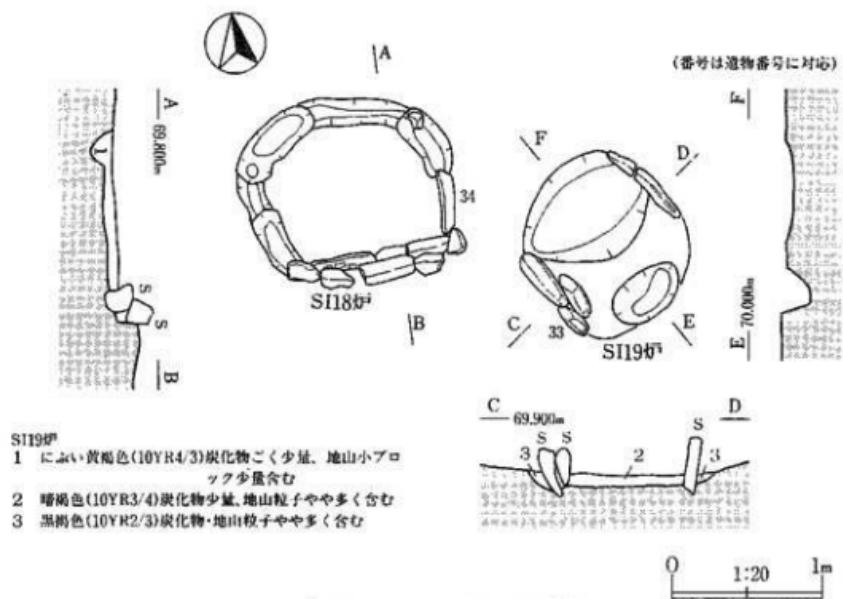
第7図 SI10, SI60A+B竪穴住居跡



第8図 SII 10堅穴住居跡遺物出土地点図及び炉



第9図 SI 18-19堅穴住居跡



第10図 SI 18-19 穫穴住居跡

を呈すると考えられる。炉、柱穴、壁溝は認められない。なお住居西側の焼土の分布は、SI 43廃棄後最上層に投げ込まれた（9層）ものであり、直接的にこれらの構造群とは係わりないと判断できる。遺物は認められなかった。

#### SI 18-19 穫穴住居跡 (第12図、図版9・10)

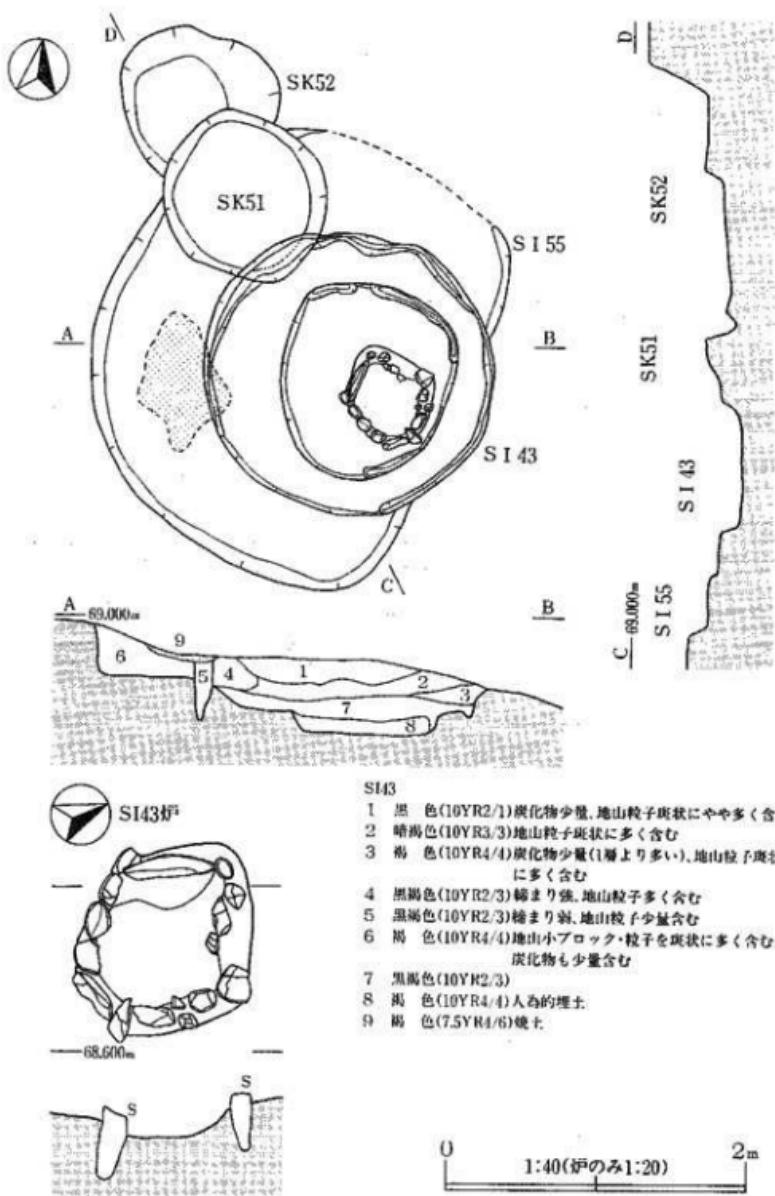
調査区西端部、N E 55・56、N F 55・56グリッドI層下面で確認した。SI 87、SK 98・104・105・109・119と重複しており、(旧) SI 87、SK 105・119→SI 80→SK 104(新)は明らかであるが、SK 98・109との関係は不明である。

規模は、径が4.8~5mの円形を呈している。確認面からの深さは、南・東側で10cm前後、残りのよい西側で最深38cmである。床面はやや凹凸が認められるが、比較的堅く縮まっている。推定床面積は、18.36m<sup>2</sup>である。柱穴状のピットはP 1~8、貯蔵穴様の小土坑はP 9・10であるが、次に述べるSI 87との係わりでいずれの住居に伴うのか明らかではない。ただ柱穴については規則的な配置としては確認できなかった。炉も確認できなかった。

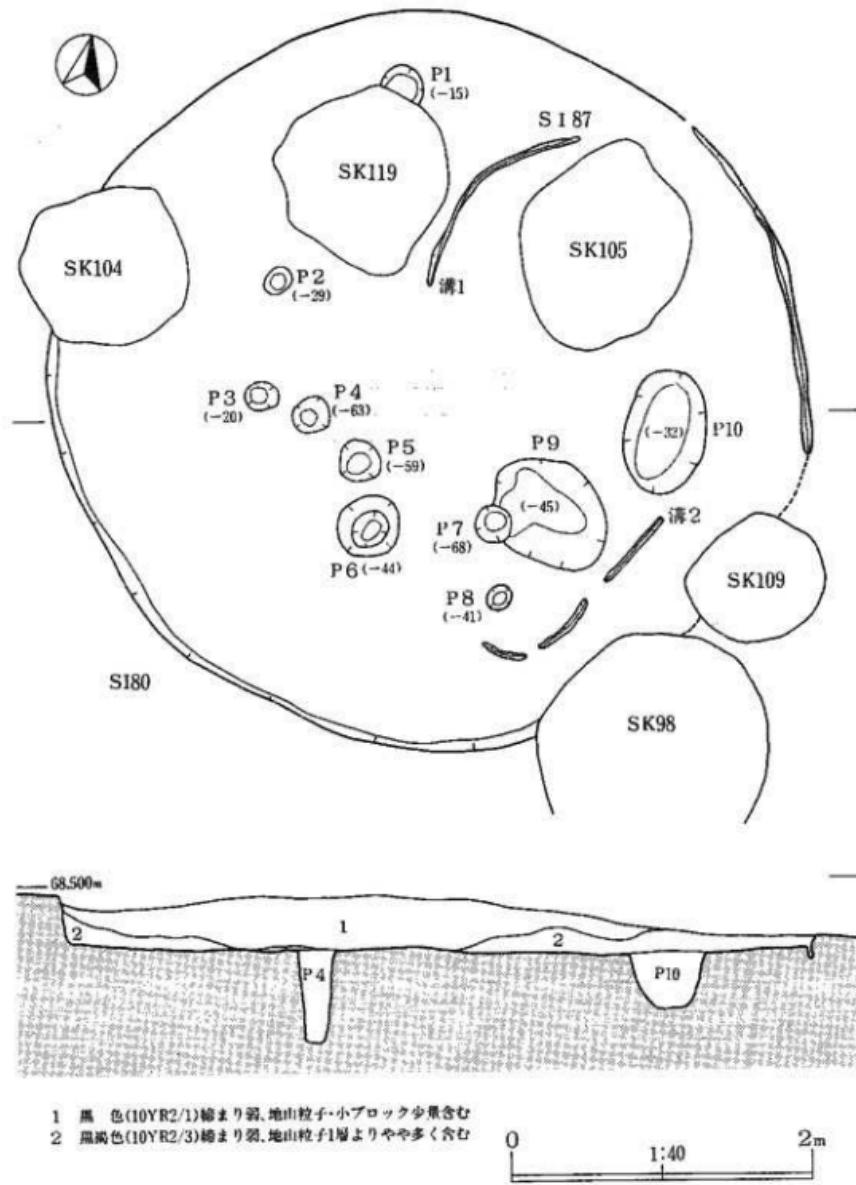
遺物は、土器片(第16図11)が僅かに出土した。

#### SI 18-7 穫穴住居跡 (第12図、図版9)

調査区西端部、N E・N F 56グリッドSI 80床面で確認した。確認状況からSI 80構築に際



第11図 S143-55竪穴住居跡、SK51-52土坑



第12図 S180-87竪穴住居跡

して上部を削平されたと思われる。

溝1と溝2が一連の壁溝を構成していたとすれば、その規模は南北長が約3.4m、東西長が約2mの楕円形を呈していたと推定できる。溝は幅4cm前後と細く、深さは3~5cmである。柱穴、炉については不明である。溝内より遺物は出土しなかった。

#### S I 110・122 竪穴住居跡（第13・14図、図版11）

調査区西端部、N I~NK58グリッド地山面で確認した。竪穴の北半分は調査区外に延びる。重複する遺構との新旧関係は、(旧) S I 122→S I 110→S K 113・114（新）となり、住居の南西隅に位置するS K 111は、S I 110と同時期かこれより新しいと見られるが、不明確である。

S I 122は、S I 110床面精査中に検出した。規模は、東西長3.6m、南北長1.85m以上の（長）方形基調のプランを呈すると見られる。S I 110床面からの深さは、7~15cmである。ほぼ平坦な床面上には9本の柱穴状ピット（P 1~9）が掘り込まれているが、その配置は明らかではない。焼土、炉、遺物は一切確認できなかった。

S I 110は、東西長11.2m、南北長2.8m以上の隅丸長方形あるいは楕円形を示すいわゆる大型住居跡である。壁は緩く立ち上がり、確認面からの深さは最深で29cmである。床面上には一段下がる掘り込みが認められ、埋土の状態から判断して別の遺構（竪穴）ではなく、S I 110に伴う施設と考えている。これはS I 122を埋めて、この南壁を東に延長させるようにして掘り込んでいるものであり、その規模、東西6m、南北1.85m以上の隅丸長方形を示すようである。この掘り込みの深さは7~11cmである。二段構造あるいはベンチ状施設を伴う住居と言えよう。本住居には西側を中心に柱穴状のピットが数多く存在するが、その配置は明確ではなく、後述のS K 111に伴うであろうピットも混在しているようである。

遺物（第17図19~21）は、平面的にはS I 122上で比較的多く分布しているが、これはS I 122を埋めた後の一戸下がったS I 110埋土出土である。床面あるいは直上出土の遺物はなく竪穴の構築時期推定を困難にしている。

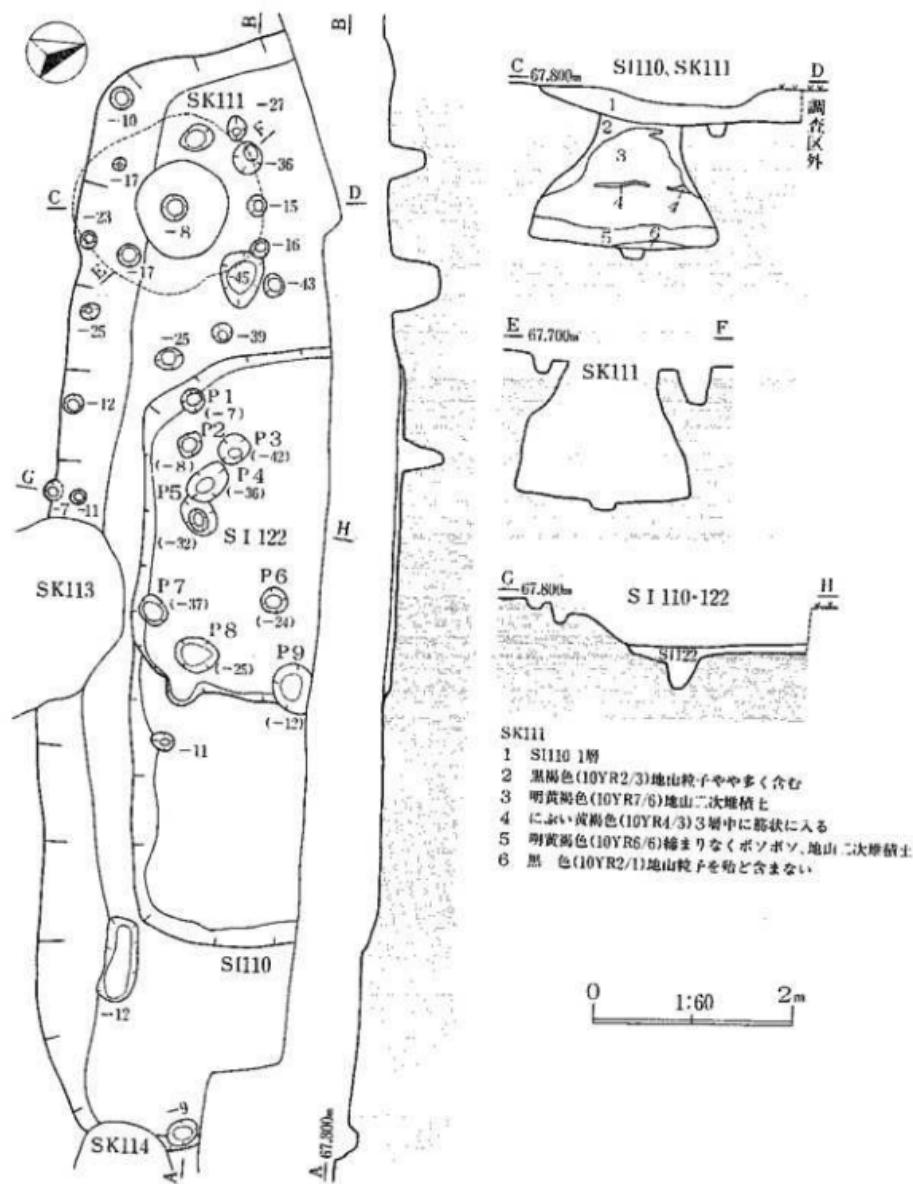
#### （2）屋外炉（焼土遺構）（第15図、図版12）

調査区内には、竪穴住居跡に伴う炉以外に、単独で存在する石囲炉や焼土遺構が5基ある。各遺構の周辺を精査した結果、これを取り囲む明確な上屋施設—柱穴、壁溝などを確認できなかったことによるもので、屋外炉として報告する。

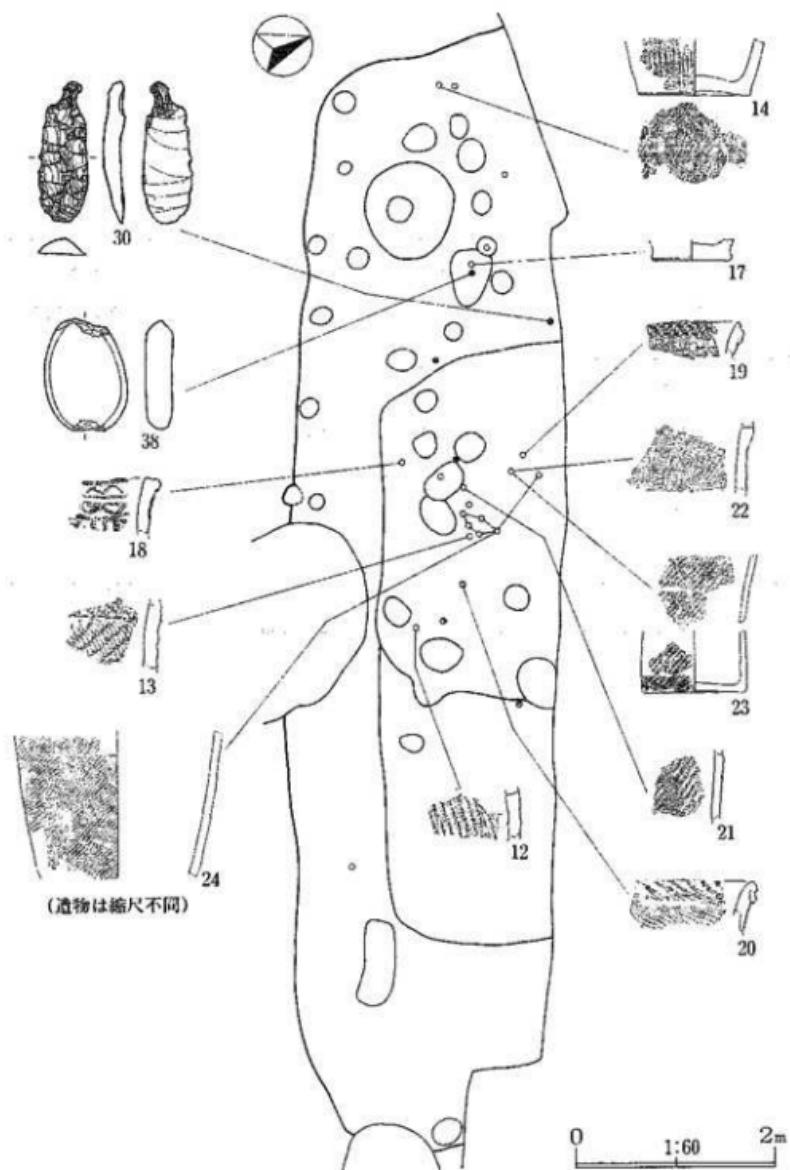
#### S N 6 5 屋外炉（第15図、図版12）

調査区東部沢1内、M I 54グリッドIII層中で石囲炉を確認した。

炉は、拳大から長さ27cmまでの板状の河原石を14個用い、これを長さ63cm、幅50cmの長方形に組んでいる。最も大きい石は西面に使用されている。炉内には、口縁~胴上半部を欠く縄文土器が正立状態で埋められていた。組石と土器は火熱を受け赤変しているが、炉底面は、III層



第13図 SI 110-122堅穴住居跡、SK111土坑



第14図 SII 110遺物出土地点図

黒褐色土（シルト質土）であるためか焼面は認められない。

埋設土器(1)は、底径6.8cm、現存高11.9cmで、内面には帶状に煤状炭化物が付着している。器面にはL R 繩文回転施文されている。その他の遺物は出土しなかった。

#### S N 1 1 2 屋外炉（第15図、図版12）

調査区西端部、N L 58・59グリッドIII層中で石團炉を確認した。

炉は、魔大から長さ38cmまでの棒状、板状の河原石を8個用い、これを長さ50cm、幅46cmの方形に組んでいる。最も大きい石はS N 65同様西面に使用されている。石の赤変度合はS N 65に比較すると低い。石組炉に隣接して3個の河原石も認められる。これが現位置を保っているのか否か不明であるが、南側のS 9は棒状の磨石（第21図40）、真ん中のS 10は明らかに古石（同41）としての機能を有している。

#### S N 1 2 屋外炉（第15図）

調査区東部、L R 52グリッドI層下面で焼土の分布を確認した。

焼土は、長さ42cm、幅38cmの範囲に分布している。焼土の厚さは4cm、遺構底面はIII層中に収まり、やや凹凸している。

#### S N 2 4 屋外炉（第15図）

調査区東部沢1内、M F 53グリッド地山面で焼土の分布を確認した。検出位置は、沢1B底面であり、沢が形成されて腐食土等があまり堆積していない段階で營まれたと見られる。

焼土は、長さ50cm、幅42cmの範囲に分布し、その厚さ8cmである。火熱の影響で地山が赤変している。

#### S N 6 6 屋外炉（第15図、図版12）

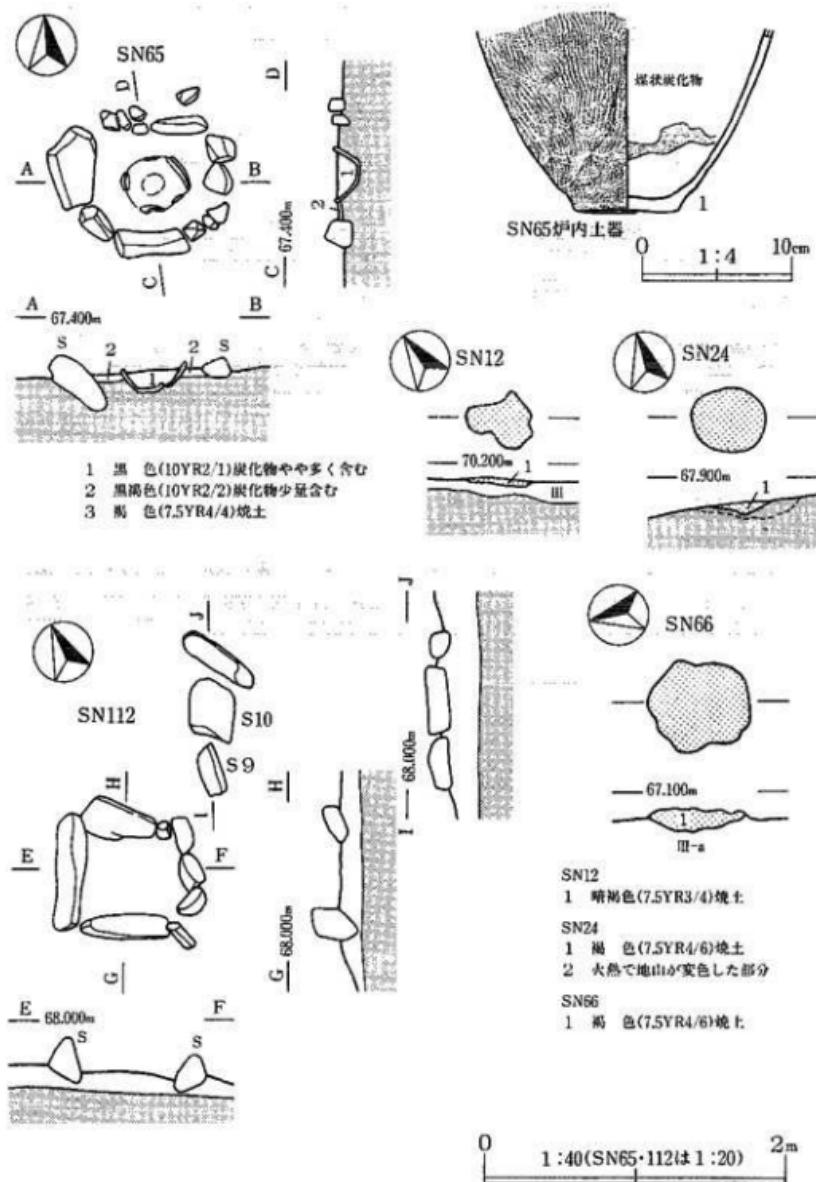
調査区東部沢1内、M I・M J 53グリッドIII a層で焼土の分布を確認した。S N 66は、S N 65（石圓炉）の南約4mに位置しており、検出レベルも近似することから、時期的な開きは大きくないと思われる。

焼土は、長さ70cm、幅60cmの範囲に分布している。焼土の厚さは15cmある。

### （3）土坑（第23～43図、図版12～18）

本項に該当する土坑は、調査区東部で11基、中央部で14基、西端部で48基の計73基を数える。土坑内出土の遺物は、遺構検出基数と比較して極端に少ない。僅か10遺構から数える程しか出土していない。この点で土坑の構築時期を推定する材料は乏しいと言わざるを得ない。

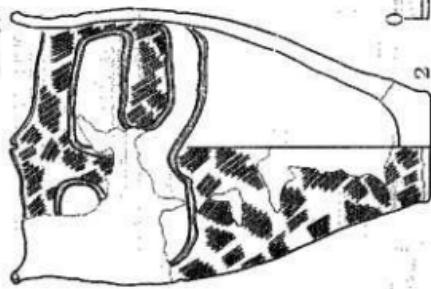
これら土坑を、その規模、形状、出土遺物の有無等について以下の表で示すこととする。



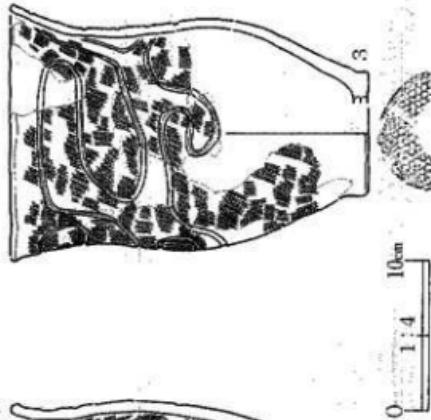
第15図 屋外炉(石窯炉、焼土造構)



(1:8)

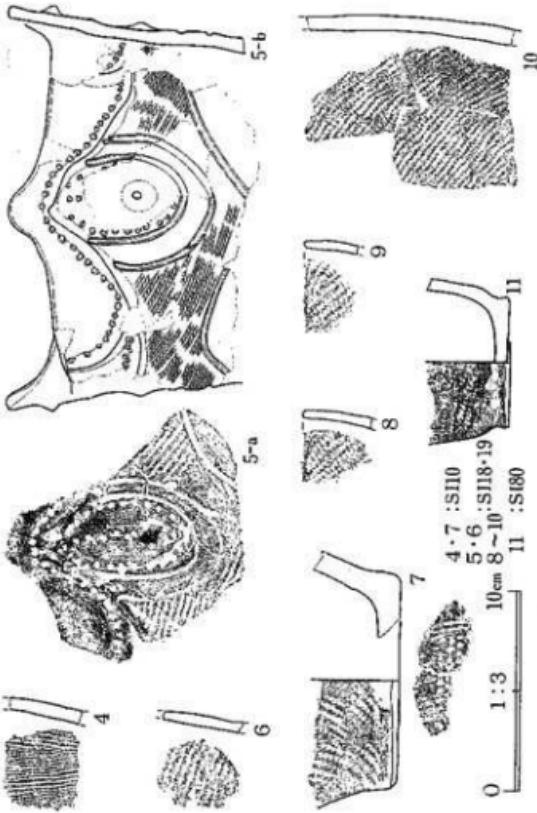


(1:8)

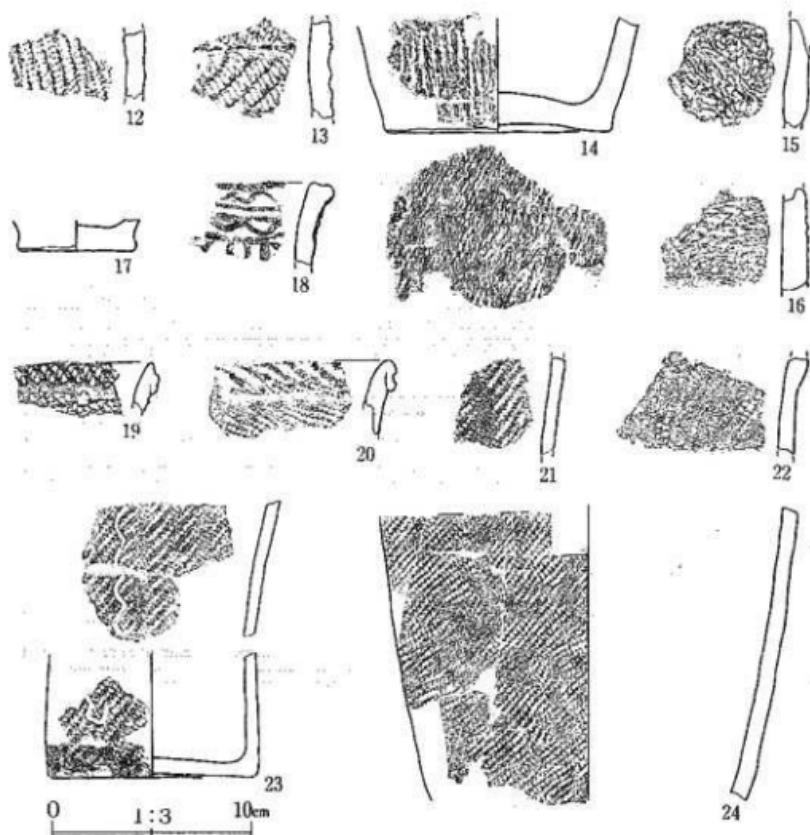


0 1:4 10cm

番号	出土位置	種類・質地	口径	底径	高さ	X・縦・横		備考
						横	縦	
1	S100a-1-10	繩文・泥質	17.3	7.2	27.8	横2.5	縦2.5	厚みから2つ底(1次底)と3つ底(2次底)と判明。(1)ミダラ(底)、(2)ミタケ(底)、(3)ナガ(底)、(4)スル(底)、(5)ヒメ(底)、(6)ヒメ(底)、(7)ヒメ(底)、(8)ヒメ(底)、(9)ヒメ(底)、(10)ヒメ(底)、(11)ヒメ(底)
2	S100a-1-1	繩文・泥質	16.6	8.0	23.8	横2.5	縦2.5	(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)、(底)ヒメ(底)



第16図 窪穴住居跡出土土器(1)(S101-10・18・19・80)



①調査区東部

第17図 整穴住居跡出土土器(2) SI110

遺構番号	検出位置	重複	規 模 (cm)			平面	断面 (塗抹状況)	出土遺物
			開口部	坑底部	深さ			
SK 09	MH49	なし	80×75	70×60	25	略方	筒状(a)	なし
SK 16	MG54	なし	130×102	120×90	10	横円	皿状(a)	なし
SK 17	MB54	> S I 18-19	110×80	96×68	10	隅長	皿状(a)	炭化材
SK 20	MA53	なし	84×76	78×68	20	円形	筒状(a)	なし
SK 22	MA54	> S I 18-19	92×73	78×80	25	横円	袋状(a)	なし
SK 27	MII54	< S D 15	120×82	96×65	24	横円	鍋底(a)	なし
SK 29	MA・MB53	なし	78×70	60×50	14	略円	皿状(a)	なし
SK 33	MF49	なし	114×100	90×78	25	略円	鍋底(a)	なし
SK 35	LR48	なし	86×78	—	22	略円	鍋底(a)	なし
SK 45	LQ51	なし	78×63	62×48	22	横円	筒状(a)	縄文土器
SK 56	MH-MI46	なし	88×88	90×85	28	円形	袋状(a)	なし

## ②調査区中央部

遺構番号	検出位置	重複	規模(cm)			平面	断面 (底面状況)	出土遺物
			開口部	坑底部	深さ			
SK 0 3	MN-MQ48	なし	110×108	100×100	18	円形	皿状(a)	なし
SK 0 7	MP-MQ49	なし	140×115	120×108	28	隅長	筒状(a)	なし
SK 1 3	MT52	なし	100×100	90×86	16	円形	皿状(a)	なし
SK 4 1	MQ50	なし	168×154	196×168	100	円形	フランク(e)	なし
SK 4 2	MO-P50-51	なし	122×120	196×196	146	円形	フランク(a)	なし
SK 4 4	ML55	なし	110×102	98×88	22	略円	鍋底(a)	なし
SK 5 0	MS-MT52	< SD69	160×158	202×192	152	円形	フランク(c)	なし
SK 5 1	ML54	> SD69, SK52	110×104	92×90	55	円形	筒状(a)	なし
SK 5 2	ML54	< SK51	102×90~	50~×62	40	円形	筒状(a)	なし
SK 5 9	MS53-54	< SD49	92×78	190×180	122	円形	フランク(f)	なし
SK 6 1	MR-S54-55	なし	長さ4m以上、幅1.6m		170	溝状	—	なし
SK 6 2	MK48-49	< S I 01	175×118	162×112	20	不規	鍋底(a)	なし
SK 6 3	MR55	なし	198×178	220×214	132	円形	フランク(a)	なし
SK 6 4	MM52-53	なし	112×90	155×152	86	楕円	フランク(a)	円石、磨石

## ③調査区西端部

遺構番号	検出位置	重複	規模(cm)			平面	断面 (底面状況)	出土遺物
			開口部	坑底部	深さ			
SK 7 0	NL-M56-57	なし	260×210	234×220	140	円形	フランク(c)	剝片
SK 7 1	N L57	なし	202×152	162×124	90	不整	鍋底(a)	なし
SK 7 2	NJ-NK57	なし	242×218	228×220	176	円形	フランク(a)	なし
SK 7 3	NH-NI57	なし	120×96	104×92	82	円形	筒状(a)	なし
SK 7 4	NI-NJ57	< SK85	72×64	142×138	176	円形	フランク(e)	なし
SK 7 5	NC-ND55	> SK83, SK76	204×170	238×192	116	楕円	フランク(a)	なし
SK 7 6	ND54-55	S K77	140×136	190×190	110	円形	フランク(c)	なし
SK 7 7	ND-E54-55	S K76	200×178	192×190	88	円形	フランク(a)	なし
SK 7 8	NE55	S K92-94	230×220	208×208	136	円形	筒状(c)	縄文土器
SK 7 9	NG-NH57	なし	140×120	208×208	166	楕円	フランク(a)	なし
SK 8 1	NH56	なし	155×124	160×160	104	楕円	フランク(a)	縄文土器
SK 8 2	NE57	なし	214×198	222×202	134	円形	フランク(u)	土器、磨石
SK 8 3	NC-ND55	< SK75	160×120~	158×100~	64	円形	筒状(a)	なし
SK 8 4	ND55	なし	113×110	206×180	112	円形	フランク(a)	なし
SK 8 5	NI-J57-58	S K74, 113	100×88	180×168	178	楕円	フランク(u)	なし
SK 8 6	NL-M57-58	< SD88	170×140~	140×128~	70	円形	筒状(a)	なし
SK 9 0	N L58	なし	58×52	65×56	35	円形	袋状(a)	なし
SK 9 2	NE-F54-55	S K78-94	240×?	234×180~	52	円形	フランク(c)	なし
SK 9 3	N F55	なし	152×138	143×132	90	円形	筒状(a)	なし

SK94	NE-NF55	S K78-92	186×180~	190×180	118	円形	フ(ア)(a)	なし
SK95	NG55	なし	174×170	220×208	140	円形	フ(ア)(d4)	台石
SK96	NK58	なし	140×112	160×124	48	楕円	袋状(a)	磨製石斧2
SK97	NL58	なし	122×62	112×52	26	楕円	筒状(a)	なし
SK98	NE55-56	なし	172×152	172×158	140	円形	斜形(a)	なし
SK99	NF-NC57	107-108-116	95×90	210×195	154	円形	フ(ア)(a)	土器、石器
SK100	NG-NH55	なし	132×120	140×124	32	円形	袋状(a)	なし
SK101	NC54-55	なし	160×134	164×150	40	円形	袋状(a)	なし
SK102	NB-NC54	なし	180×76~	110~168	68	円形?	フ(ア)(a)	なし
SK103	NB55	なし	124×108	84×72	48	不方	鍋底(a)	なし
SK104	NF56	> S I 80	108×104	88×86	56	隅方	筒状(a)	なし
SK105	NE56	なし	144×115	200×182	92	楕円	フ(ア)(a)	なし
SK106	NG56	なし	162×124	205×190	138	楕円	斜形(f)	なし
SK107	NF-G56-57	S K99-108	115×86	192×180~	124	楕円	フ(ア)(f)	なし
SK108	NF56-57	S K99-107	162×142	216×200~	150	円形	フ(ア)(cf)	なし
SK109	NE56	S I 80	90×86	154×140	122	円形	フ(ア)(a)	なし
SK111	NJ-NK58	S I 110	98×90	190×180	140	円形	フ(ア)(c)	なし
SK113	NJ58	SK85, S I 110	162×155	202×195	98	円形	フ(ア)(a)	なし
SK114	NH58	> S I 110	98×94	110×108	66	円形	袋状(a)	磨石
SK115	NB53-54	なし	180×130	195×124	78	不椭	斜形(a)	なし
SK116	NG57	S K99	105×102	164×142	136	円形	フ(ア)(c)	なし
SK117	NG58-59	なし	142×84~	94×70~	96	円形	逆台(b)	なし
SK118	NJ-NJ57	< S K121	110×106	150×150~	86	円形	フ(ア)(a)	なし
SK119	NF56	< S I 80	116×116	130×124	60	円形	袋状(a)	なし
SK120	NF57	なし	94×68	188×172	158	楕円	フ(ア)(d5)	なし
SK121	NJ57	> S K118	82×82	164×160	94	円形	フ(ア)(a)	なし
SK123	NJ-K57-58	なし	142×130	170×166	102	円形	フ(ア)(c)	なし
SK124	ND-NE54	なし	204×166	223×184	154	楕円	フ(ア)(c)	なし
SK125	NF55	なし	158×140	158×96	88	不円	不整(a)	なし

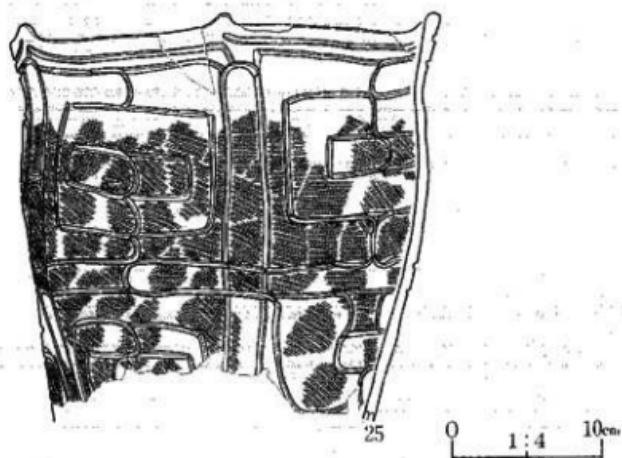
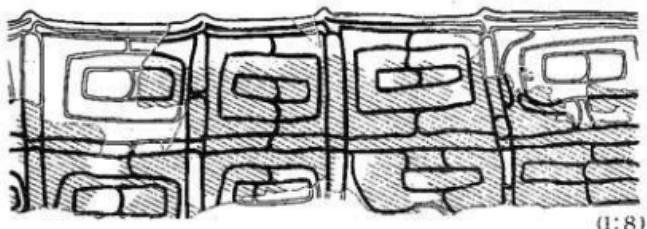
### 〈凡例〉

「重複」は、重複関係にある遺構を列記、遺構名だけは新旧不明、「>」は左に記した遺構が新しく、逆に「<」は、旧い。

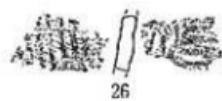
「平面」は、略方=略方形、略円=略円形、隅長=隅丸長方形、隅方=隅丸方形、不椭=不整椭円形、不整=不整形

「断面」は、フ(ア)=フラスコ状、斜形=半分フ拉斯コ状、半分筒状に掘り込まれる、逆台=逆台形、筒状、錐底=錐底状（底面から丸みをもって立ち上がる、深さ20cm以上）、皿状=深さ20cm未満、不整=不整形（底面が凹凸している）

「底面状況」は、坑底面からの掘り込みの有無、その形態について記載している。(a)~(f)までの分類基準は、第6章まとめと模式図（第20図）に示してある。



番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	高さ	文様・調整	圖考
25	SK78p1~9	椭文・深鉢	27.0		(27.0)	小造状口縁4単位、(外)LR模文→沈線、模状炭化物付着、(内)ミガキ、ナマ	色調(外)暗褐色→明褐色 (内)明褐色

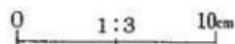
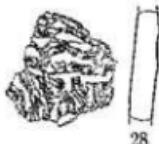


27

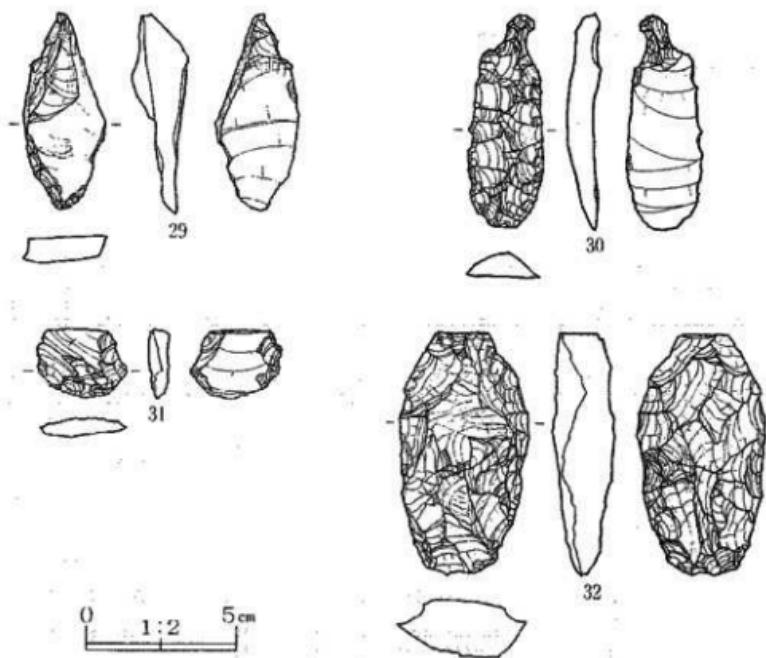
26:SK81

27:SK82

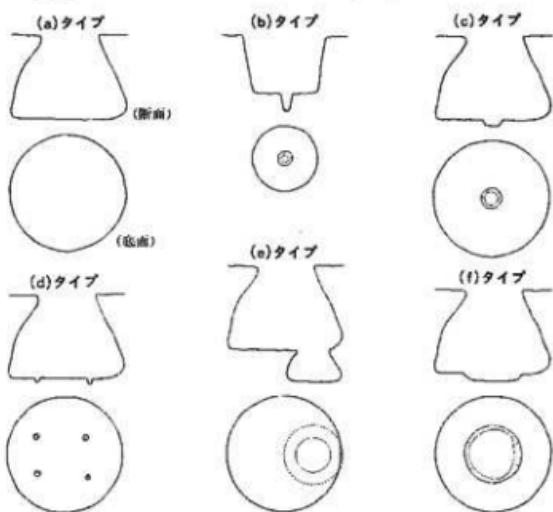
28:SK99



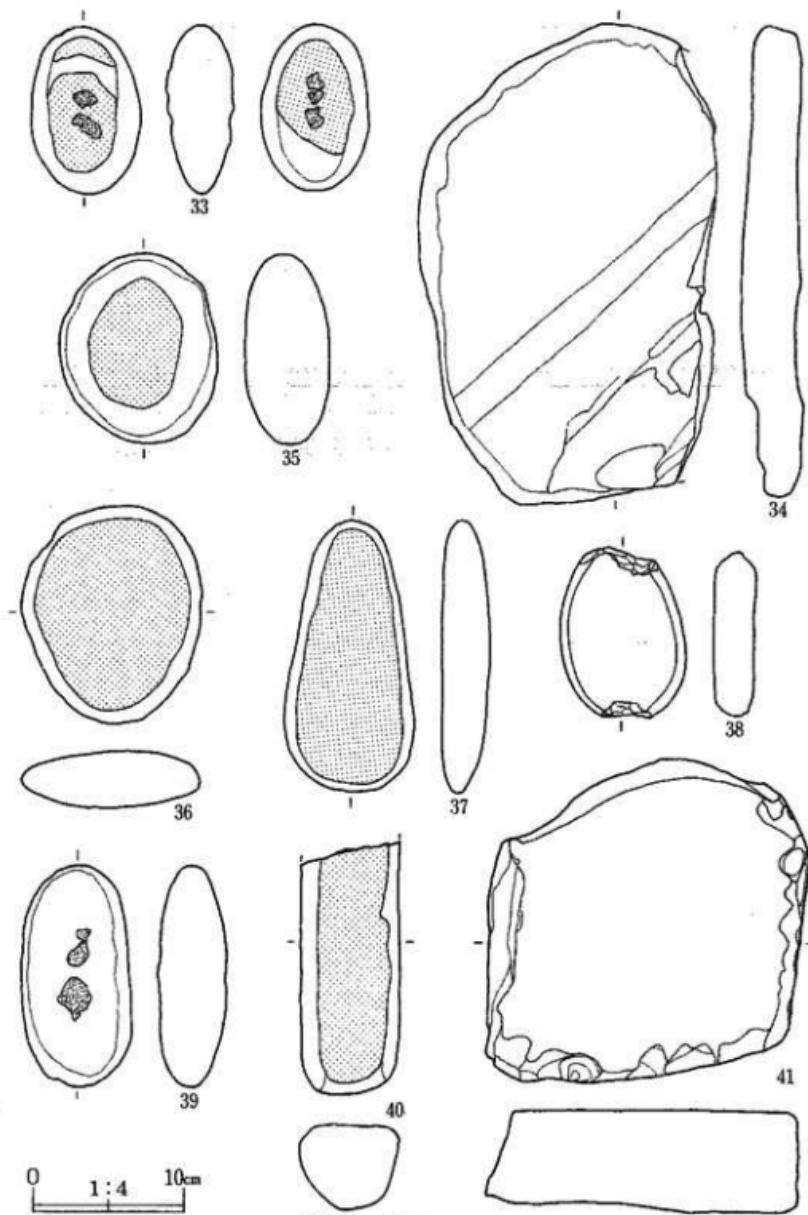
第18図 土坑内出土土器



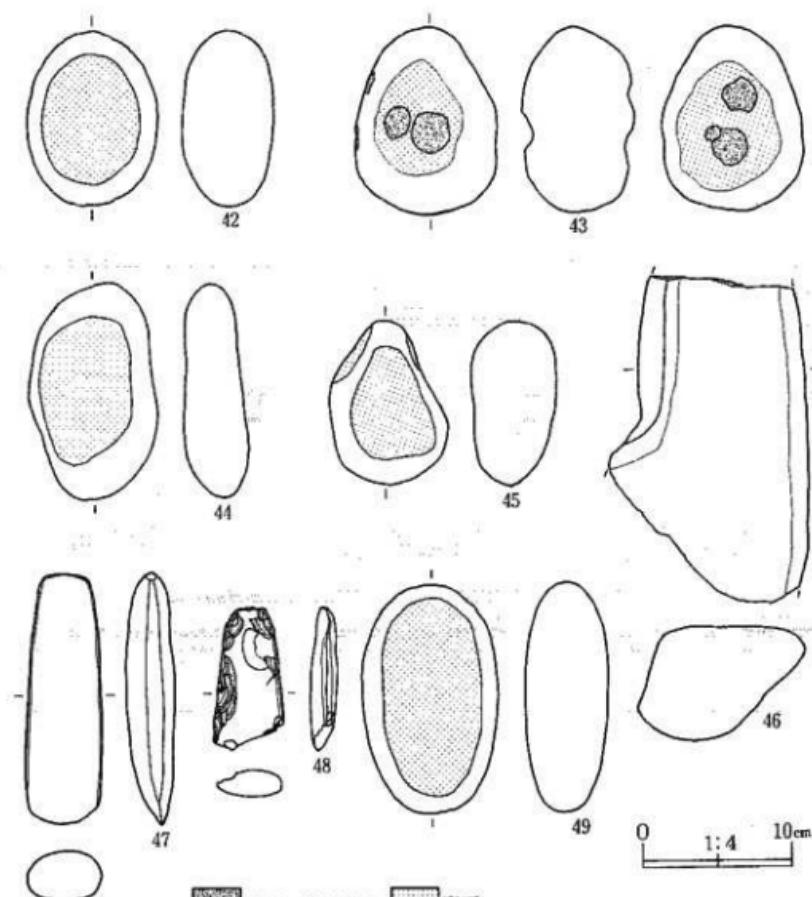
第19図 遺構内出土石器(1)



第20図 土坑底面形態分類図



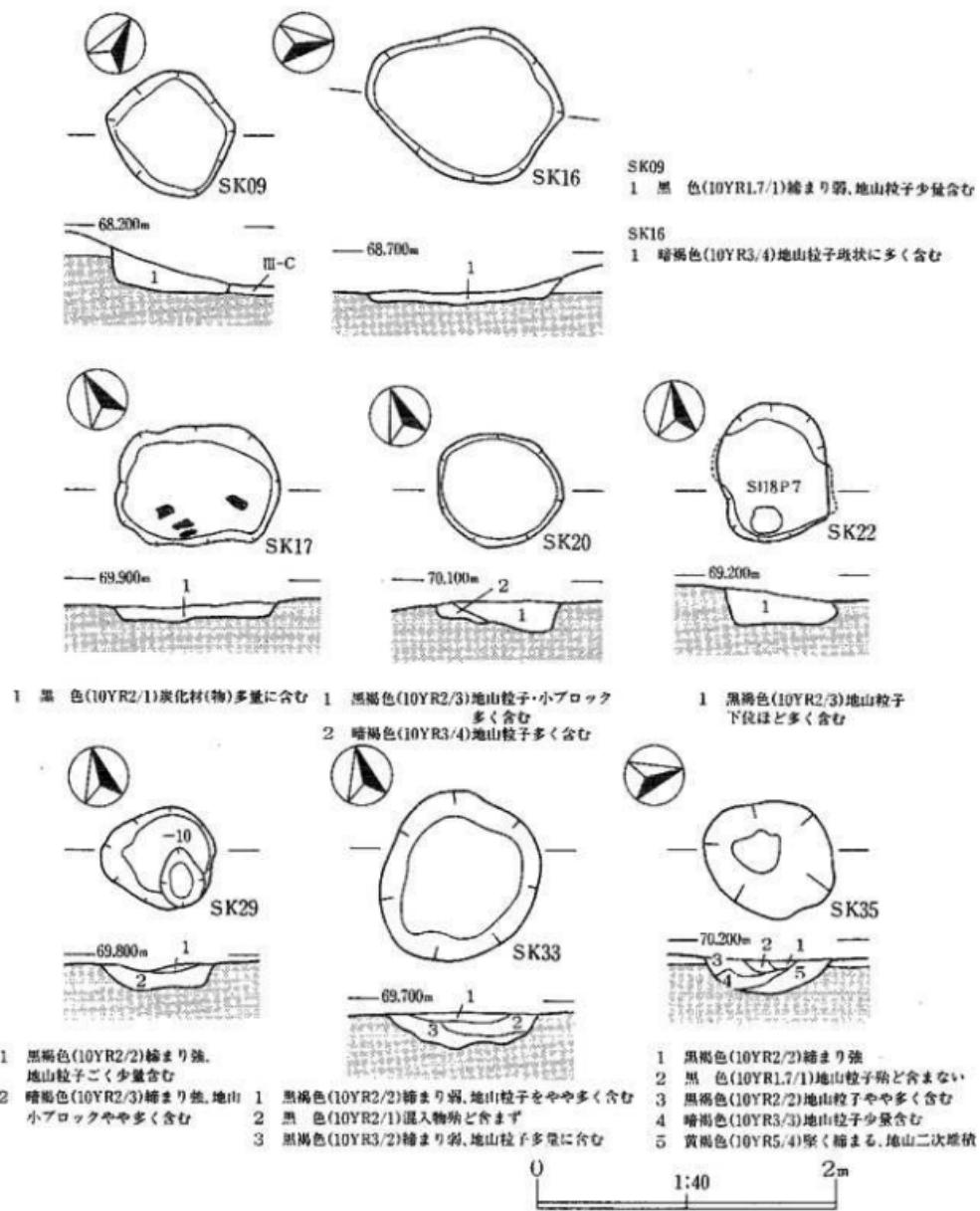
第21図 造構内出土石器(2)



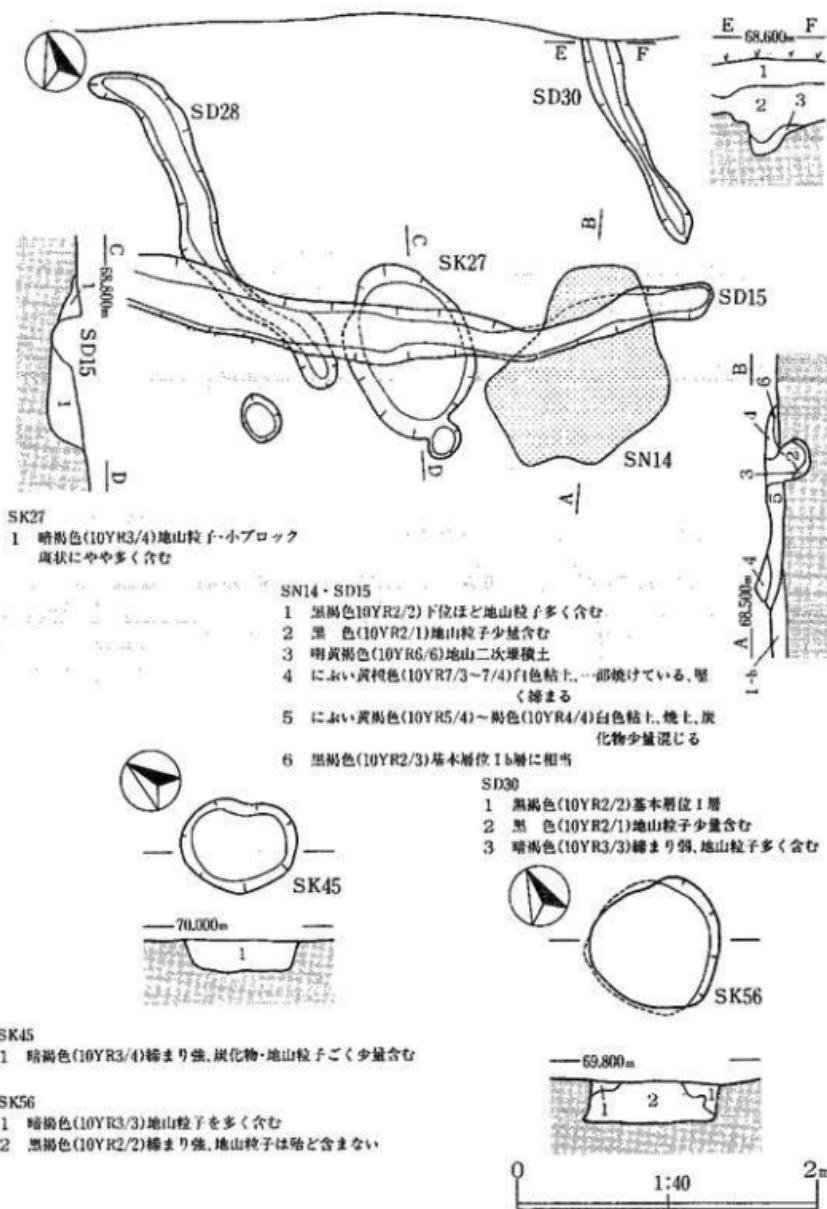
■ 敲打による凹み □ 磨面

番号	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	番号	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量
33	SI19046Q1	11.0	7.3	4.5	414.53	41	SN1125-10	21.7	21.3	6.9	5120
34	SI18046	31.9	19.7	4.1	3267	42	SK64Q1	11.5	8.6	6.1	780.85
35	SI43Q2	12.5	10.5	5.6	1001.44	43	SK64Q2	12.2	9.5	7.5	1220.40
36	SI43Q3	14.5	11.7	3.7	933.36	44	SK82Q1	14.3	8.6	4.3	620.28
37	SI80	17.9	8.7	3.1	631.62	45	SK82Q2	10.9	7.9	5.8	611.37
38	SI110Q4	11.2	8.5	3.9	407.65	46	SK95	(21.6)	13.3	7.6	(2474.8)
39	SI110	14.6	7.2	4.5	694.45	47	SK96Q2	16.5	5.0	3.2	429.77
40	SN112S-9	(16.7)	6.6	5.6	(1114.84)	48	SK96Q1	(9.4)	4.7	1.8	(101.60)
						49	SK114Q1	15.1	9.1	5.4	1160.8

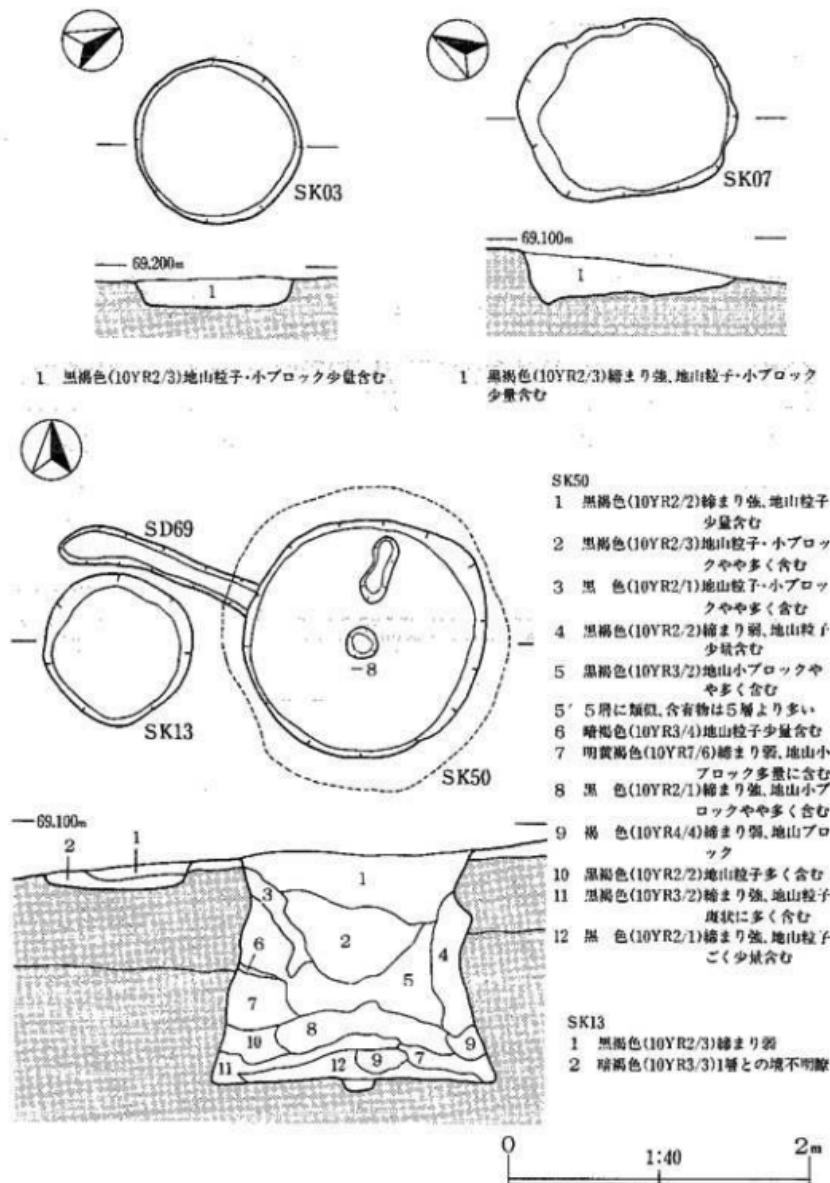
第22図 遺構内出土石器(3)



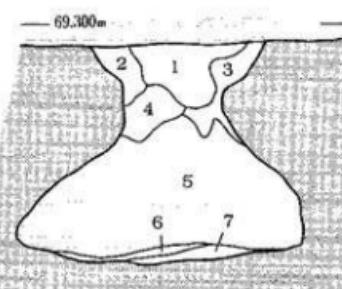
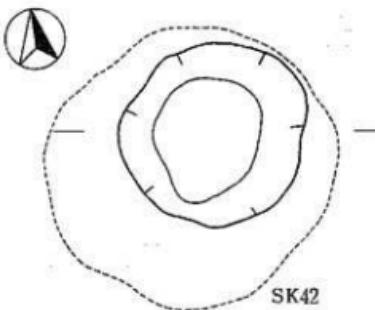
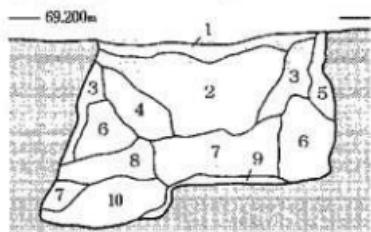
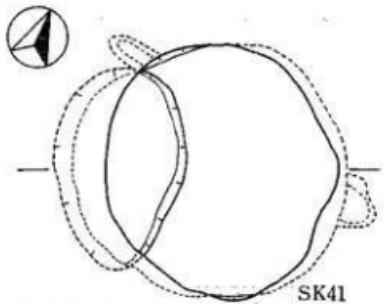
第23図 調査区東部 土坑(1)



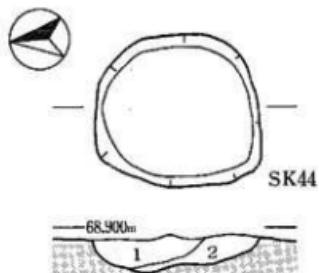
第24図 調査区東部 土坑(2)



第25図 調査区中央部 土坑(1)



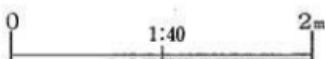
- 1 黒褐色(10YR2/2)植物根多い  
2 黑褐色(10YR3/2)縮まり強、地山粒子やや多く、炭化物ごく少量含む  
3 黑褐色(10YR2/3)下位ほど地山砂をやや多く含む  
4 黑褐色(10YR3/2)地山粒子少量含む  
5 橙色(7.5YR7/6)砂質粘土層  
6 黑褐色(10YR2/2)5層上が少量混じる  
7 明黄褐色(10YR6/8)非常に堅く縮まる、粘土質

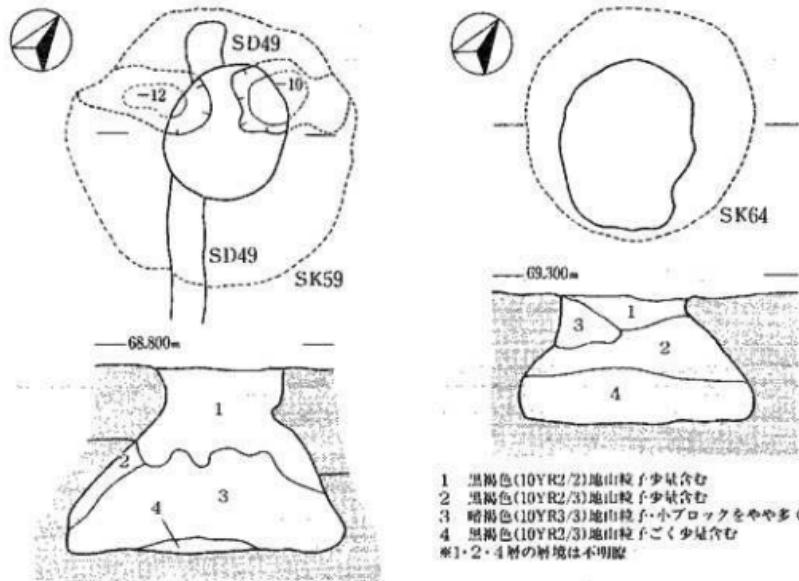


第26図 調査区中央部 土坑(2)

## SK44

- 1 黒褐色(10YR2/2)炭化物少量含む  
2 黑褐色(10YR2/3)～暗褐色(10YR3/3)地山粒子・小ブロックを斑状に多く含む





- 1 黒褐色(10YR2/3)地山粒子やや多く含む
  - 2 深色(10YR4/6)締まり弱、地山粒子多く含む
  - 3 明黄褐色(10YR7/6)締まり弱、地山二次堆積上
  - 4 黄色(10YR4/6)基本的に2層と同
- \*1・3層の境は不明瞭

- 1 黒褐色(10YR2/2)地山粒子少く含む
  - 2 黒褐色(10YR2/3)地山粒子少く含む
  - 3 喀褐色(10YR3/3)地山粒子・小ブロックをやや多く含む
  - 4 黒褐色(10YR2/3)地山粒子ごく少く含む
- \*1・2・4層の境は不明瞭

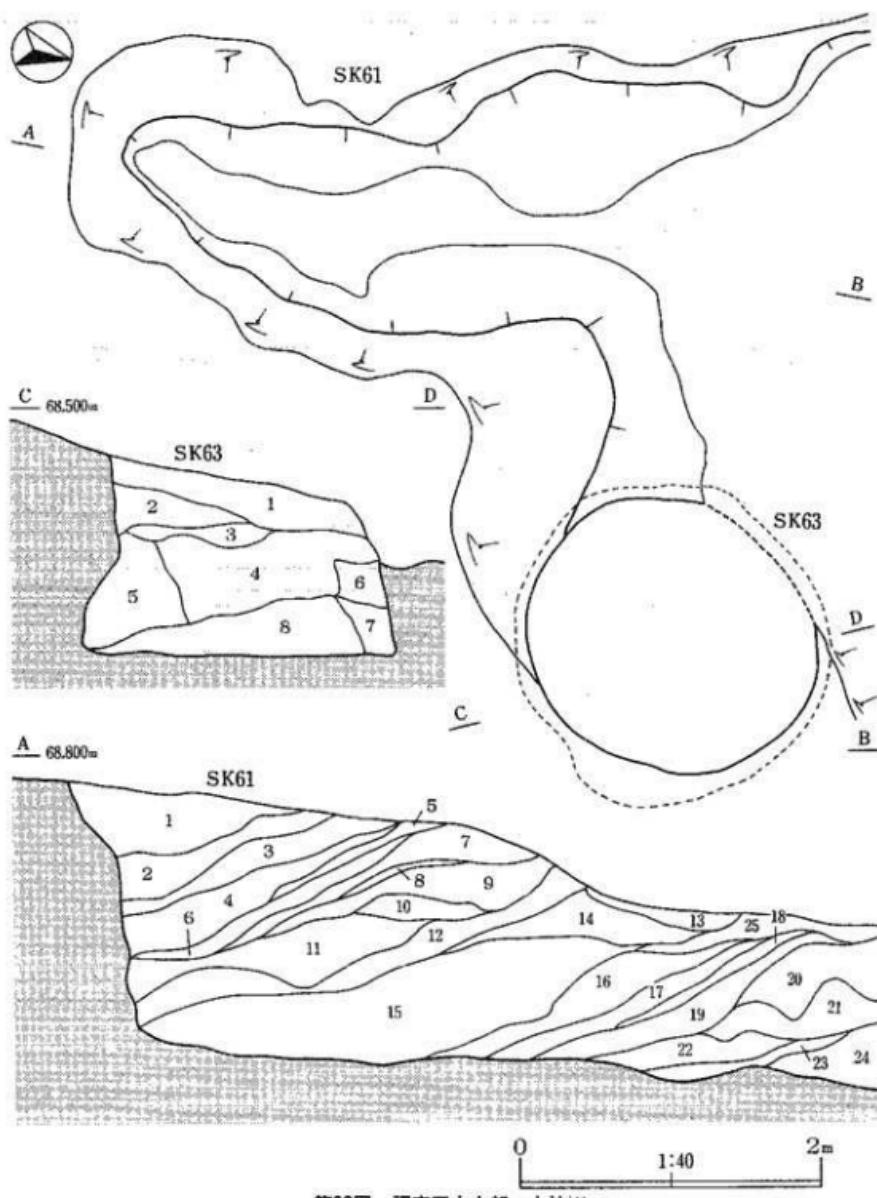
- SK61
- 1 黒褐色(10YR2/2)混入物殆どない
  - 2 黄色(10YR4/4)
  - 3 黑色(10YR2/1)
  - 4 に近い黄褐色(10YR5/4)粘質土
  - 5 に近い黄褐色(10YR5/3)灰色を呈する粘質土
  - 6 に近い黄褐色(10YR4/3)6層と同質
  - 7 黄褐色(10YR4/4)6層と4層の混合土
  - 8 に近い黄褐色(10YR5/4)4層に類似
  - 9 に近い黄褐色(10YR4/3)6層に類似
  - 10 に近い黄褐色(10YR6/3)白色を呈する砂質土
  - 11 に近い黄褐色(10YR5/4)締まり弱、ボソボソ
  - 12 喀褐色(10YR3/3)
  - 13 黄褐色(10YR5/6)地山を主とする
  - 14 黒褐色(10YR2/3)地山小ブロック少く含む
  - 15 黄色(10YR4/4)地山を主とする土
  - 16 黒褐色(10YR2/3)14層に類似、地山14層よりやや少ない
  - 17 黑褐色(10YR3/1)地山小ブロック少く含む
  - 18 黄褐色(10YR5/6)13層と同質

- 19 黄褐色(10YR5/6)地山二次堆積上
  - 20 明黄褐色(10YR5/8)締まり弱、砂質粘土の二次堆積
  - 21 に近い黄褐色(10YR5/4)砂質粘土の二次堆積
  - 22 黑褐色(10YR2/3)16層と同質
  - 23 に近い黄褐色(10YR5/6)砂質粘土の二次堆積
  - 24 に近い黄褐色(10YR6/3)砂質粘土の二次堆積
- \*4~11層地山7の二次堆積、4~7は水性堆積と見られる。全体に締まりなくボソボソしている。20層以下は人为的に埋められている

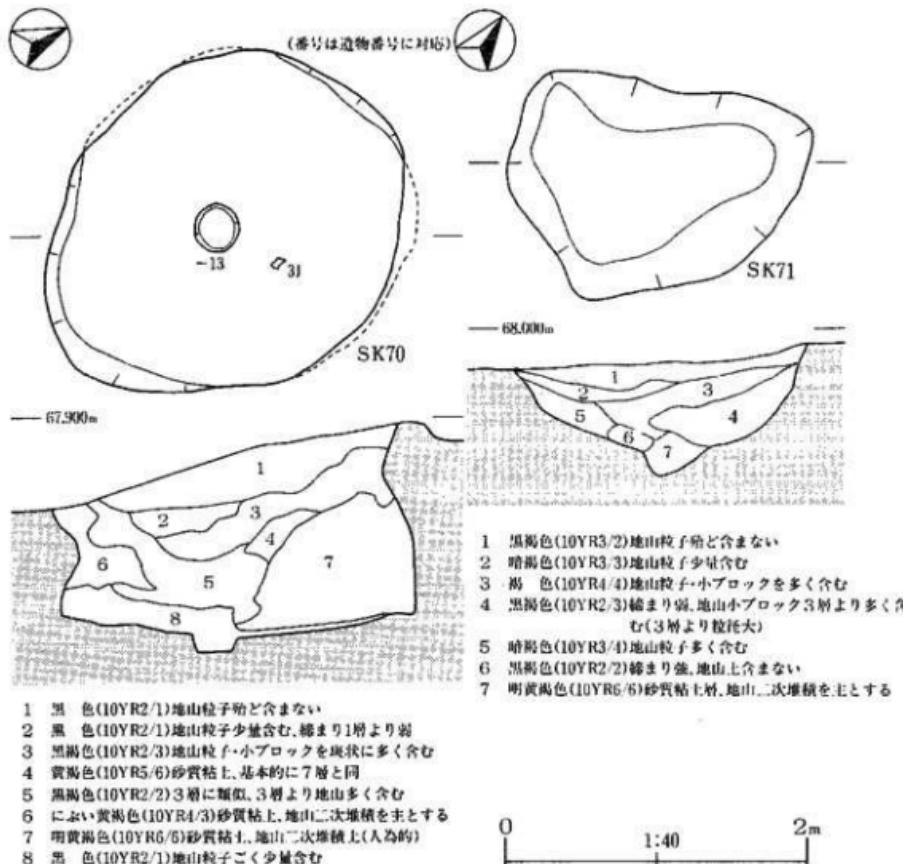
- SK63
- 1 黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックをやや多く含む
  - 2 に近い黄褐色(10YR4/3)締まり弱、地山小ブロック多く含む
  - 3 に近い黄褐色(10YR4/3)締まり2層より弱、地山小ブロックは2層よりやや少ない
- 4 明黄褐色(10YR6/8)地山、三次堆積土
  - 5 明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積上、粒径は4層より大
  - 6 喀褐色(10YR3/4)シルト質土と粘質土が互層に入る
  - 7 に近い黄褐色(10YR7/4)砂質粘土、締まり弱、地山二次堆積
  - 8 黄色(10YR4/4)土質は6層に類似

0 1:40 2m

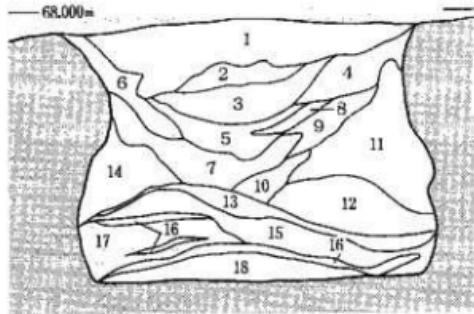
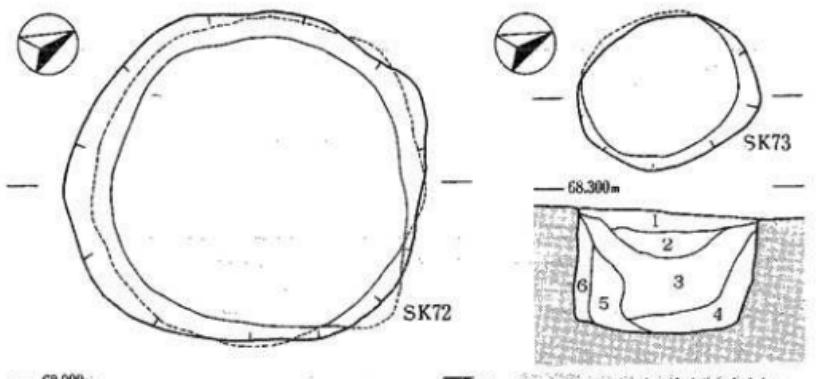
第27図 調査区中央部 土坑(3)



第28図 調査区中央部 土坑(4)



第29図 調査区西端部 土坑(1)



- 1 黒色(10YR1,7/1)縛まり弱、地山粒子ごく少量含む
  - 2 暗褐色(10YR3/3)地山粒子多く含む
  - 3 黄褐色(10YR5/8)地山二次堆積を主とする土
  - 4 暗褐色(10YR3/3)基本的に2層と同
  - 5 黒褐色(10YR2/3)地山小ブロックを夾状に多く含む
  - 6 黄色(10YR4/4)地山二次堆積を主とする土
  - 7 黄色(10YR4/6)地山小ブロックを多量に含む(5層より粒径大)
  - 8 明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積を主とする土
  - 9 黄色(10YR4/6)7層と同、地山上の含有は7層より少ない
  - 10 明黄褐色(10YR6/6)9層と同質
  - 11 明黄褐色(10YR6/8)地山二次堆積上、シルト質土は含まない
  - 12 明黄褐色(10YR6/8)11層と同、黒褐色シルト質土を筋状に含んでいる
  - 13 黄色(10YR4/6)7層に類似
  - 14 明黄褐色(10YR6/6)10層と同質
  - 15 暗褐色(10YR3/4)地山小ブロックを多く含む
  - 16 に近い黄褐色(10YR4/3)砂質粘土層、堅く結まる
  - 17 明黄褐色(10YR6/6)14層に類似、14層より白っぽく見える
  - 18 暗褐色(10YR3/4)15層に類似、地山土は15層よりやや少ない
- \*1~18層以外全体的に比較的堅く締まっている

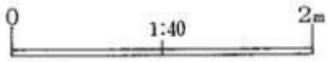
- 1 黒色(10YR2/1)地山粒子殆ど含まない  
 2 明黄褐色(10YR6/6)粘質土  
 3 暗褐色(10YR4/2)地山粒子夾状に少量含む  
 4 黄色(10YR4/6)赤みの強い地山土を多く含む  
 5 暗褐色(10YR5/6)縛まり強、質の強い地山土を主体とする。  
 6 暗褐色(10YR3/3)地山粒子を殆ど含まない  
 \*1~3・6層は締まり弱

## SK85

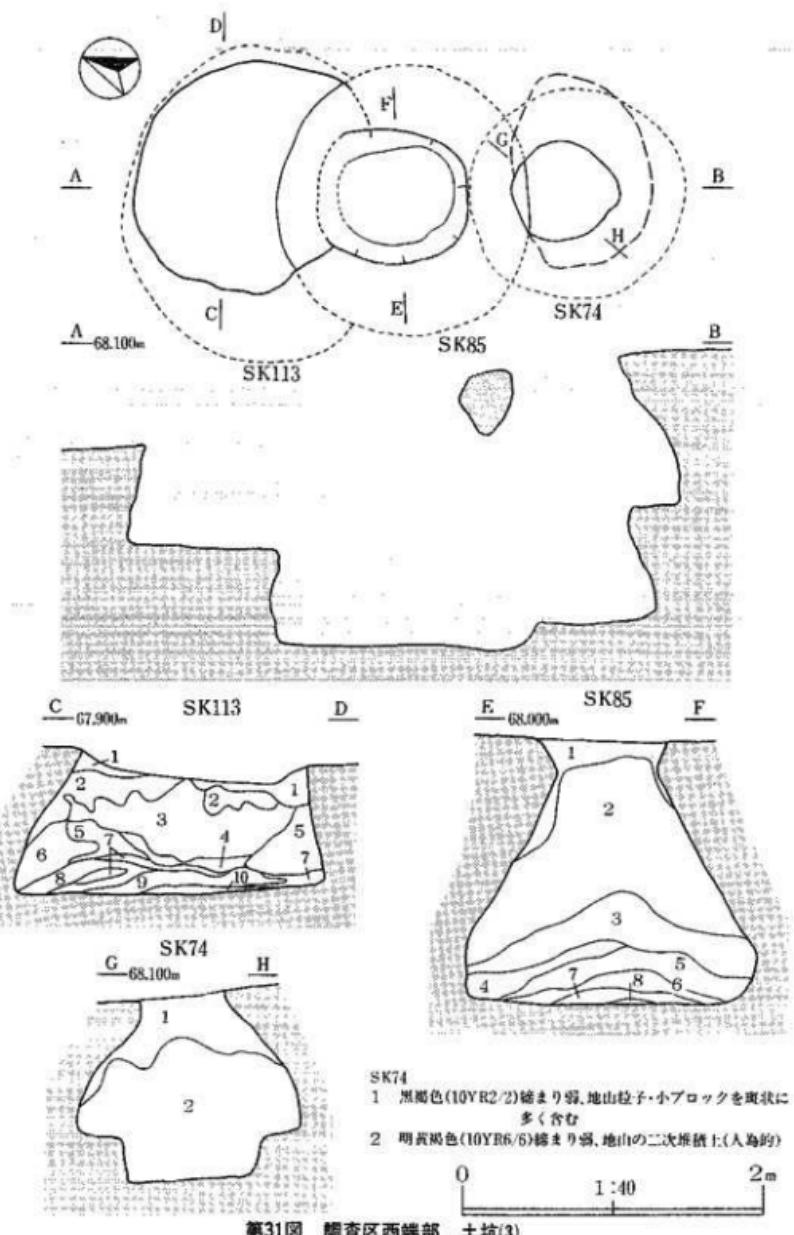
- 1 黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
- 2 黄橙色(10YR7/8)縛まり強、地山を主とする土
- 3 明黄褐色(10YR6/8)縛まり弱、地山二次堆積土
- 4 暗褐色(10YR3/2)縛まり強、地山粒子少量含む
- 5 黑褐色(10YR3/2)縛まり強、地山粒子少量含む
- 6 黑色(10YR2/1)縛まり強、地山粒子ごく少量含む
- 7 暗褐色(10YR3/4)縛まり強、4層に類似
- 8 黄褐色(10YR2/3)縛まり強、地山粒子ごく少量含む

## SK113

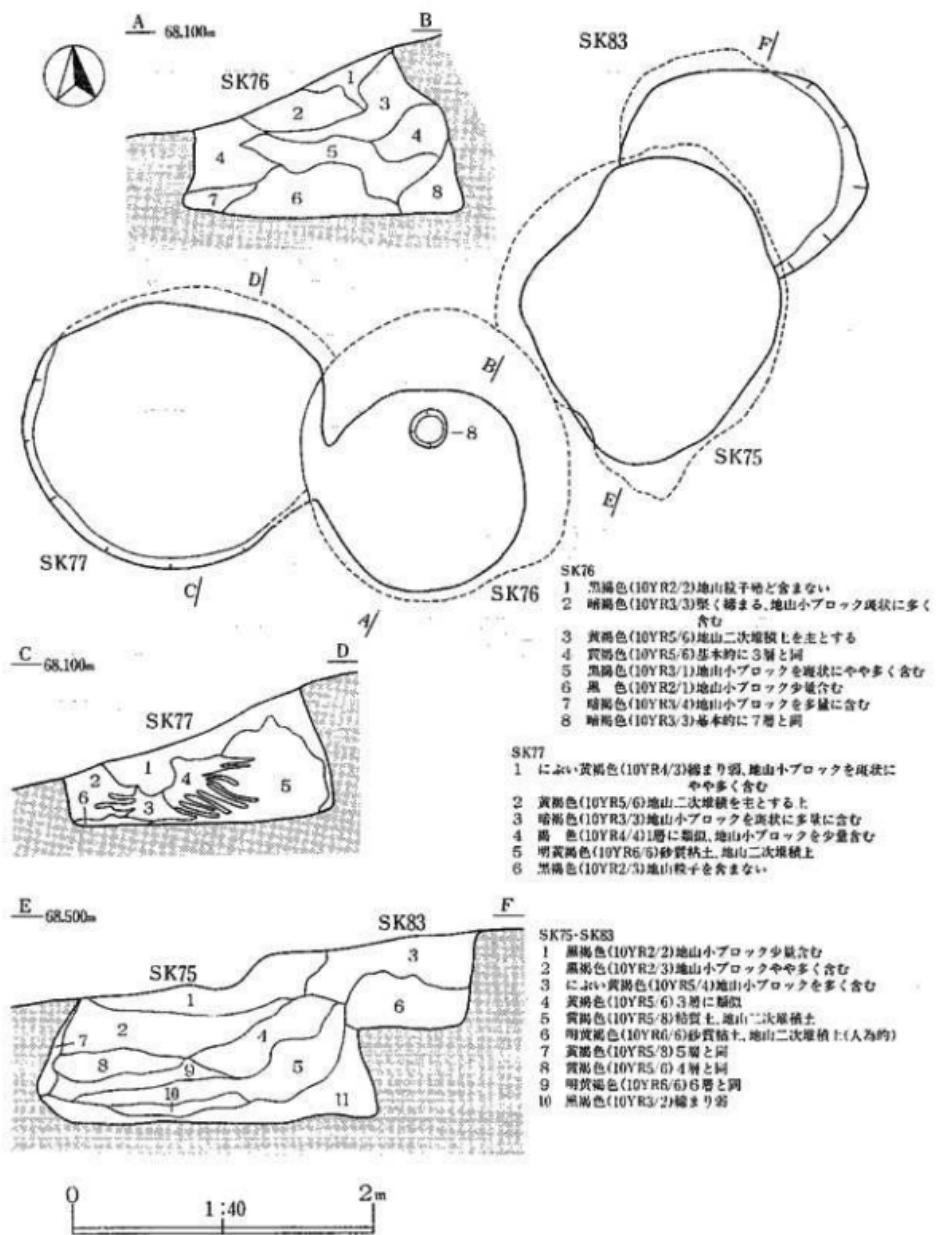
- 1 黒色(10YR2/1)縛まり強、地山小ブロック・粒子少量含む
- 2 黑褐色(10YR2/3)縛まり強、地山小ブロック少量含む
- 3 黄褐色(10YR5/8)地山土を主とする
- 4 黑褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
- 5 明黄褐色(10YR7/6)縛まり弱、地山土を主とする
- 6 明黄褐色(10YR6/6)地山土を主とする、シルト質土をごく少量含む
- 7 に近い黄褐色(10YR7/4)縛まり弱、砂質粘土上とシルト質土の混合
- 8 明黄褐色(10YR6/8)地山土を主とする
- 9 黑褐色(10YR2/3)地山粒子やや多く含む
- 10 黑色(10YR2/1)縛まり弱、地山粒子ごく少量含む



第30図 調査区西端部 土坑(2)

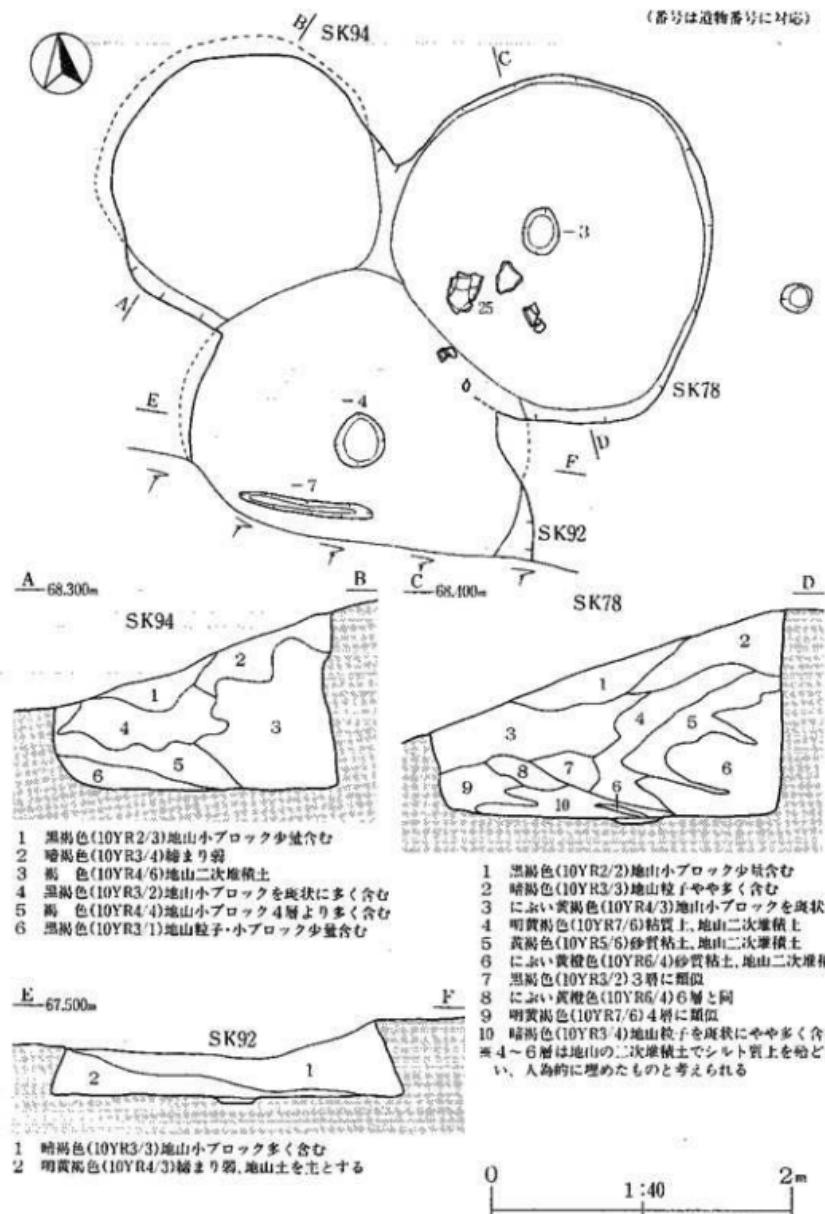


第31図 調査区西端部 土坑(3)

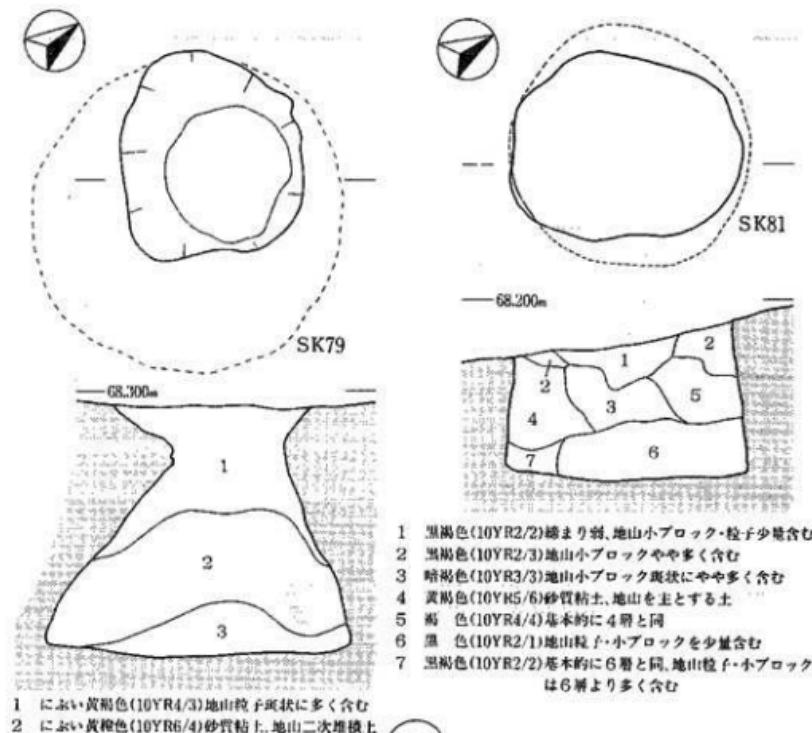


第32図 調査区西端部 土坑(4)

(番号は遺物番号に対応)

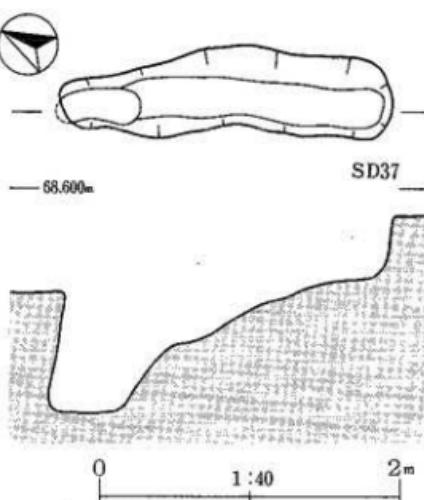


第33図 調査区西端部 土坑(5)

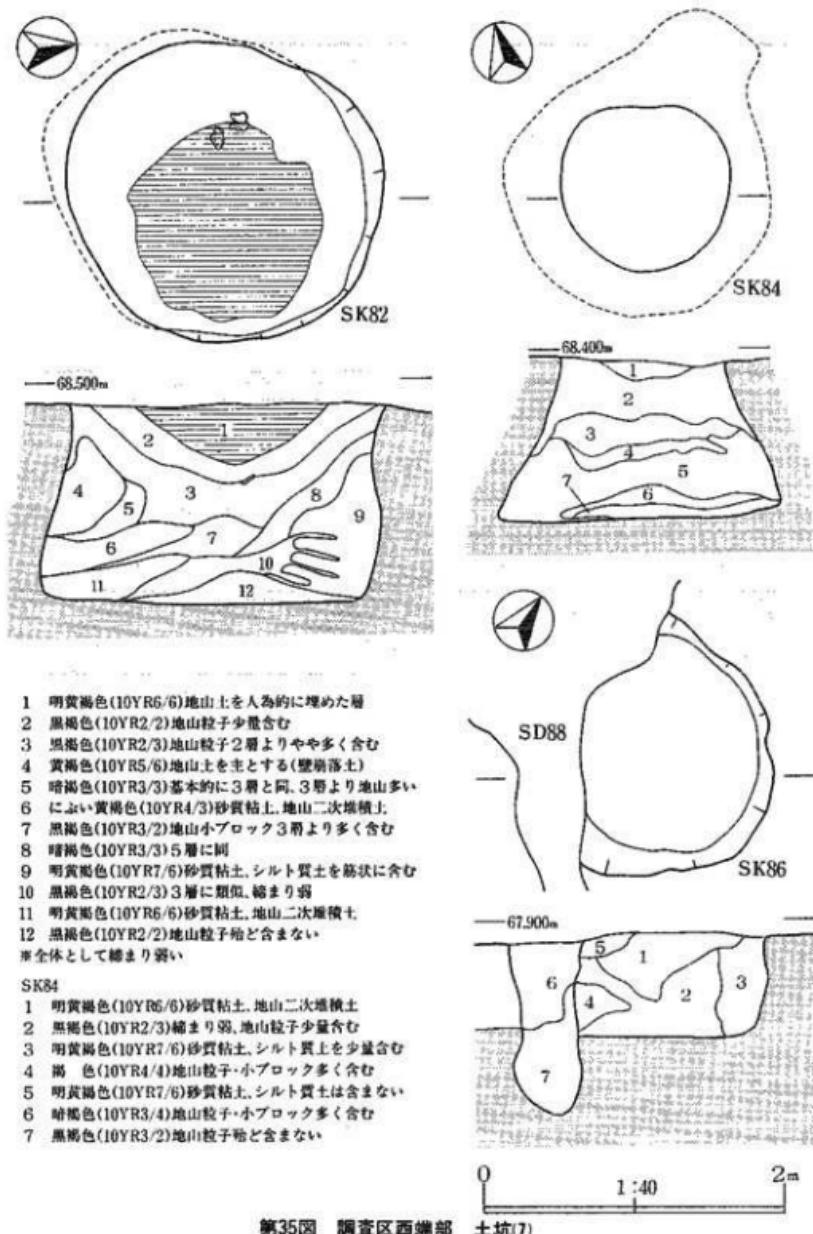


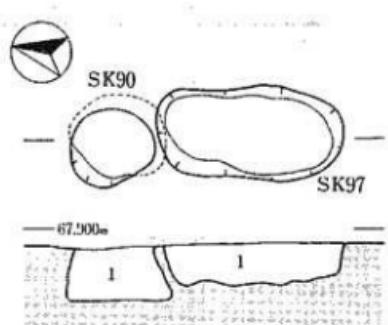
## (4) SD 37 溝状遺構 (第34図)

調査区東部沢1北西向きの緩斜面、M I 52・53グリッドIII層下面で検出した。長さ2.25m、幅0.35~0.55mの規模をもち、確認面からの最深は、0.8mである。溝内より遺物の出土は認められなかったが、溝が完全に埋没した後に大湯浮石層が形成されていることから、下限時期は平安期以前となり、周辺出土の遺物から、绳文期の構築と考えている。



第34図 調査区西端部 土坑(6)



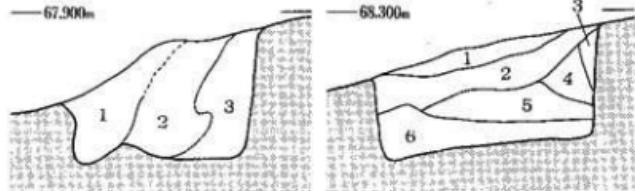
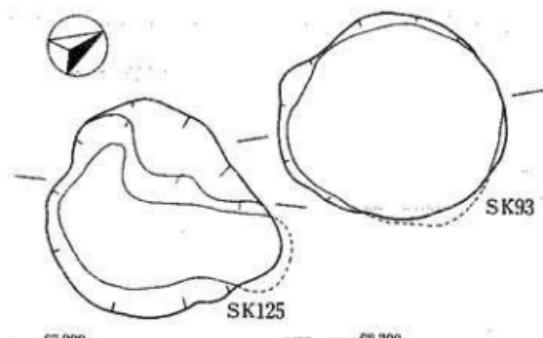


SK86

- 1 黒色(10YR2/1)結まり強、地山粒子少量含む
- 2 喀褐色(10YR3/3)地山小ブロックやや多く含む
- 3 黄褐色(10YR5/6)地山土の二次堆積
- 4 明黄褐色(10YR6/8)地山土(ブロック状)
- 5 黄褐色(10YR5/6)3層と同
- 6 に赤い黄褐色(10YR6/4)砂質粘土、地山二次堆積
- 7 明黄褐色(10YR6/6)地山二次堆積

SK90

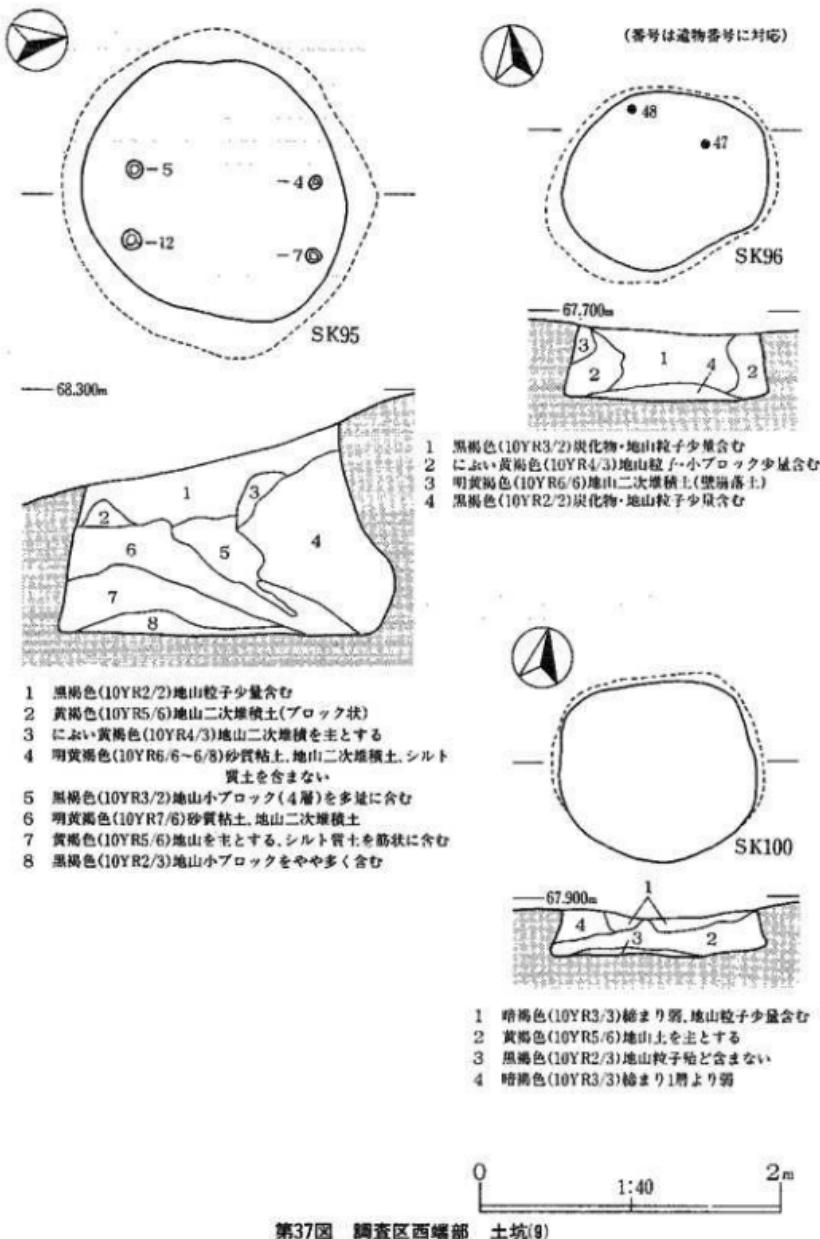
- 1 黒褐色(10YR3/1)結まり弱、地山粒子少量含む
- SK97  
1 黑褐色(10YR3/2)地山粒子多く含む

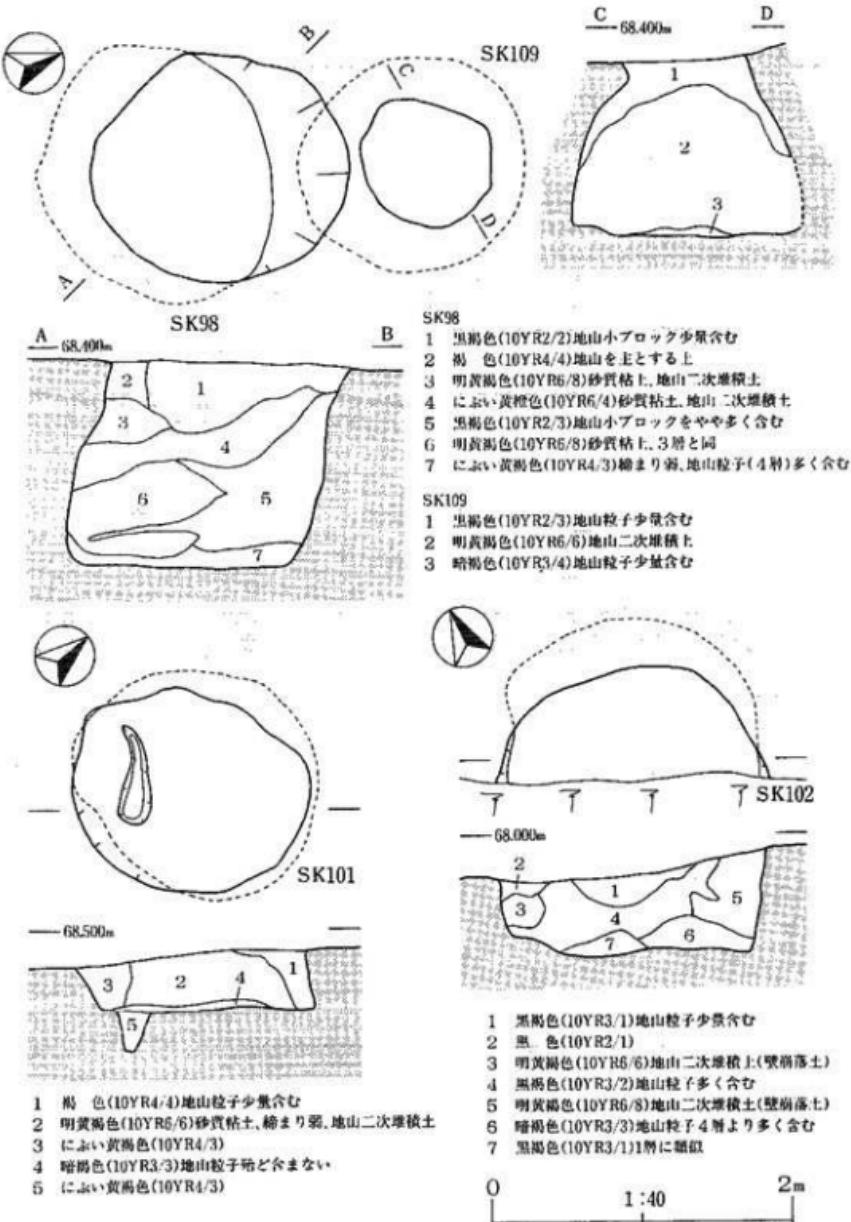


- 1 喀褐色(10YR3/3)結まり弱、地山粒子殆ど含まない
- 2 喀褐色(10YR3/4)地山粒子少量含む
- 3 黑色(10YR4/4)
- 4 黄褐色(YR5/6)地山土二次堆積土(堅密落石)
- 5 黑褐色(10YR3/2)地山小ブロック少量含む
- 6 明黄褐色(10YR7/6)砂質粘土、地山土二次堆積土

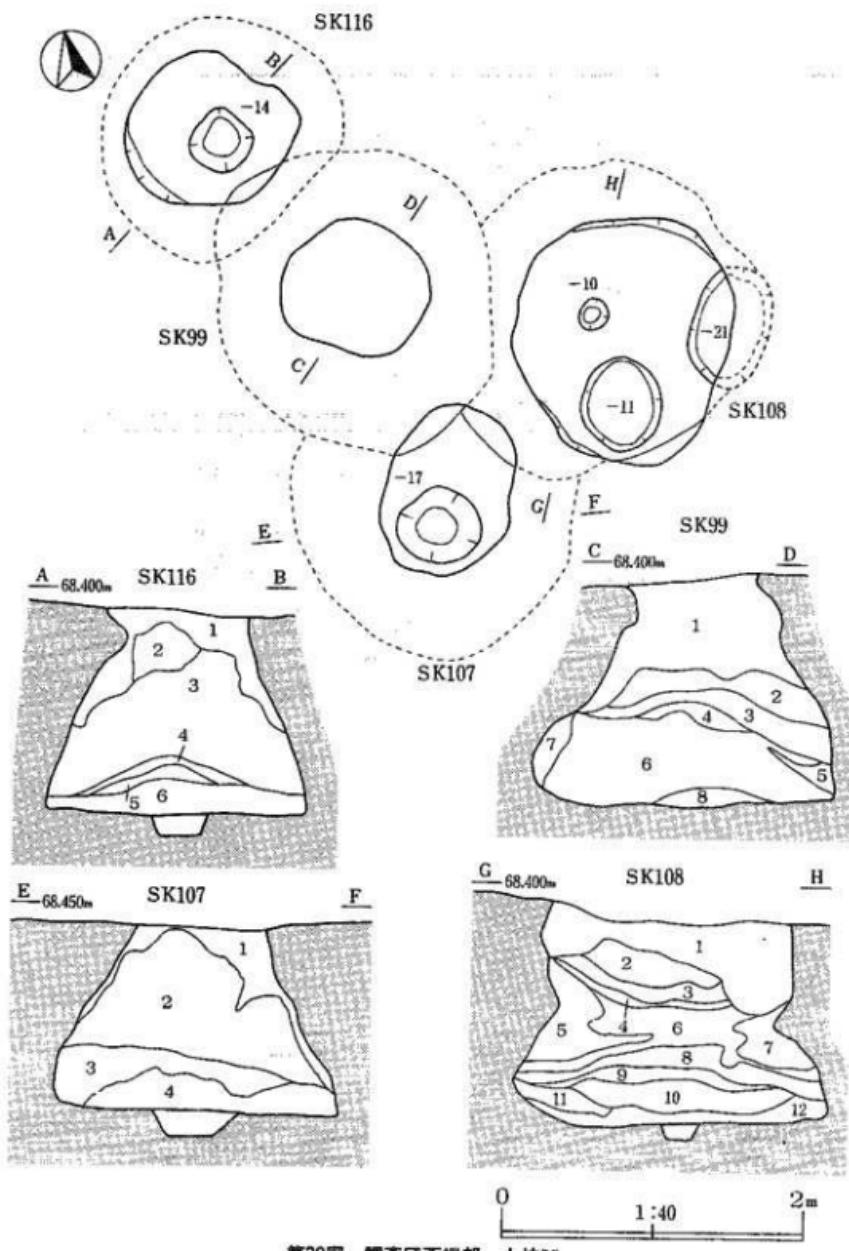


第36図 調査区西端部 土坑(8)





第38図 調査区西端部 土坑⑩



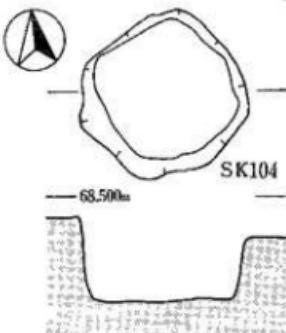
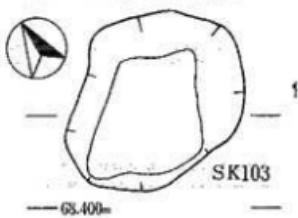
第39図 調査区西端部 土坑(II)

SK99

- 1 黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む
- 2 に付い黄褐色(10YR7/4)砂質粘土、地山二次堆積土、シルト質土は含まない
- 3 黒褐色(10YR2/3)地山粒子少量含む
- 4 明黃褐色(10YR6/6)地山を主とする上
- 5 黒褐色(10YR2/3)基本的に3層と同、地山粒子含まない
- 6 明黃褐色(10YR6/6)砂質粘土、2層と同質
- 7 に付い黄褐色(10YR6/4)6層と同質
- 8 黒褐色(10YR2/3)3・5層と同

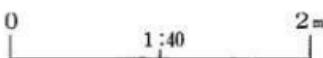
SK107

- 1 晴褐色(10YR3/3)地山粒子少量含む
- 2 明黃褐色(10YR7/6)砂質粘土、地山二次堆積
- 3 成褐色(10YR5/6)地山を主とする上
- 4 黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む



SK105

- 1 黄褐色(10YR5/8)地山の二次堆積土、上面はほど堅く繊まる、S180構築に際して埋められたと見られる
- 2 黑色(10YR4/6)地山小ブロック多量に含む
- 3 黑褐色(10YR2/3)地山小ブロックや多く含む
- 4 黑色(10YR4/6)地山小ブロックの含有は2番よりやや少、炭化物少量含む

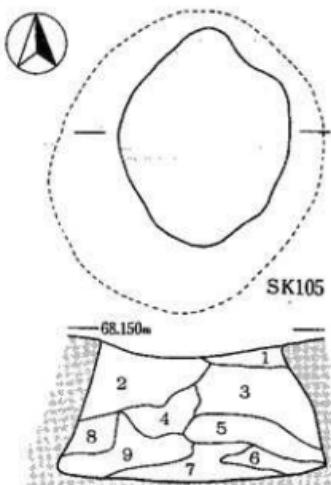


SK108

- 1 暗褐色(10YR3/3)地山土を底状にやや多く含む
- 2 明黃褐色(10YR6/6)地山二次堆積土
- 3 暗褐色(10YR3/3)基本的に1層と同
- 4 明黃褐色(10YR6/6)基本的に2層と同
- 5 明黃褐色(10YR6/8)地山二次堆積土を主とする
- 6 黑色(10YR2/1)縦まり弱、地山粒子少量含む
- 7 明黃褐色(10YR6/8)5層と同
- 8 明黃褐色(10YR6/8)5層と同
- 9 粘褐色(10YR3/3)1層に類似、地山粒子は1層より多い
- 10 黑褐色(10YR2/3)地山粒子多く含む
- 11 明黃褐色(10YR6/6)2層と同
- 12 暗褐色(10YR3/3)9層に類似、縦まり弱

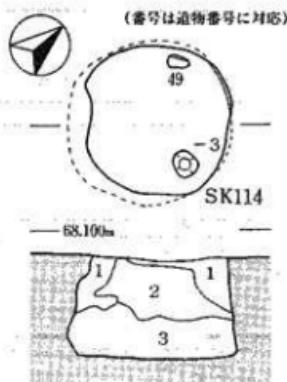
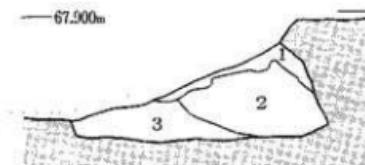
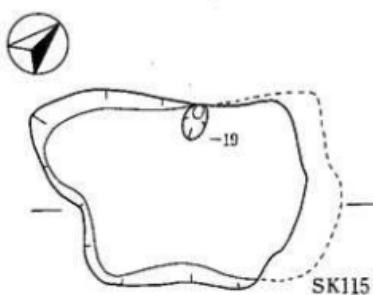
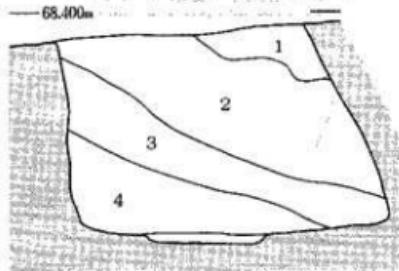
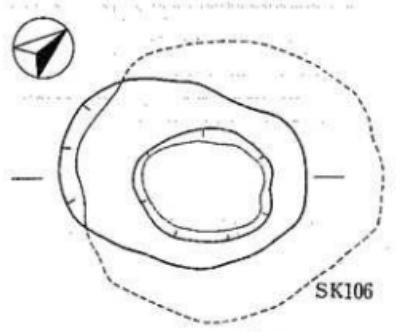
SK116

- 1 黒褐色(10YR2/3)地山小ブロック底状に多く含む
- 2 明黃褐色(10YR6/8)地山を主とする上、シルト質土含まない
- 3 明黃褐色(10YR5/8)地山二次堆積土、シルト質土含まない
- 4 黑色(10YR2/1)地山土を含まない
- 5 黄褐色(10YR5/6)縦まり弱、堆山をモとする上
- 6 黑色(10YR2/1)4層に類似



- 5 明黃褐色(10YR6/8)砂質粘土、地山二次堆積
- 6 明黃褐色(10YR6/8)砂質粘土、地山二次堆積、シルト質土を基状に含む
- 7 黑褐色(10YR2/3)縦まり弱、地山粒子少含まない
- 8 明黃褐色(10YR7/6)砂質粘土、地山二次堆積(壁崩落上か)
- 9 黑色(10YR4/6)地山小ブロックは4よりやや少ない

第40図 調査区西端部 土坑(1)



SK114

- 1 暗褐色(10YR3/4)縛まり弱、地山粒子やや多く含む
- 2 明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土
- 3 黒褐色(10YR2/2)地山粒子少量含む

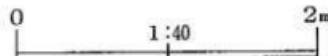
SK105

- 1 暗褐色(10YR3/3)縛まり弱、地山粒子やや多く含む
- 2 にほい黄褐色(10YR5/4)砂質粘土、地山二次堆積土
- 3 明黄褐色(10YR6/6)砂質粘土、地山二次堆積土、2層より赤み強い(2・3層はシルト質土を含まない)
- 4 黑褐色(10YR3/2)地山粒子少量含む

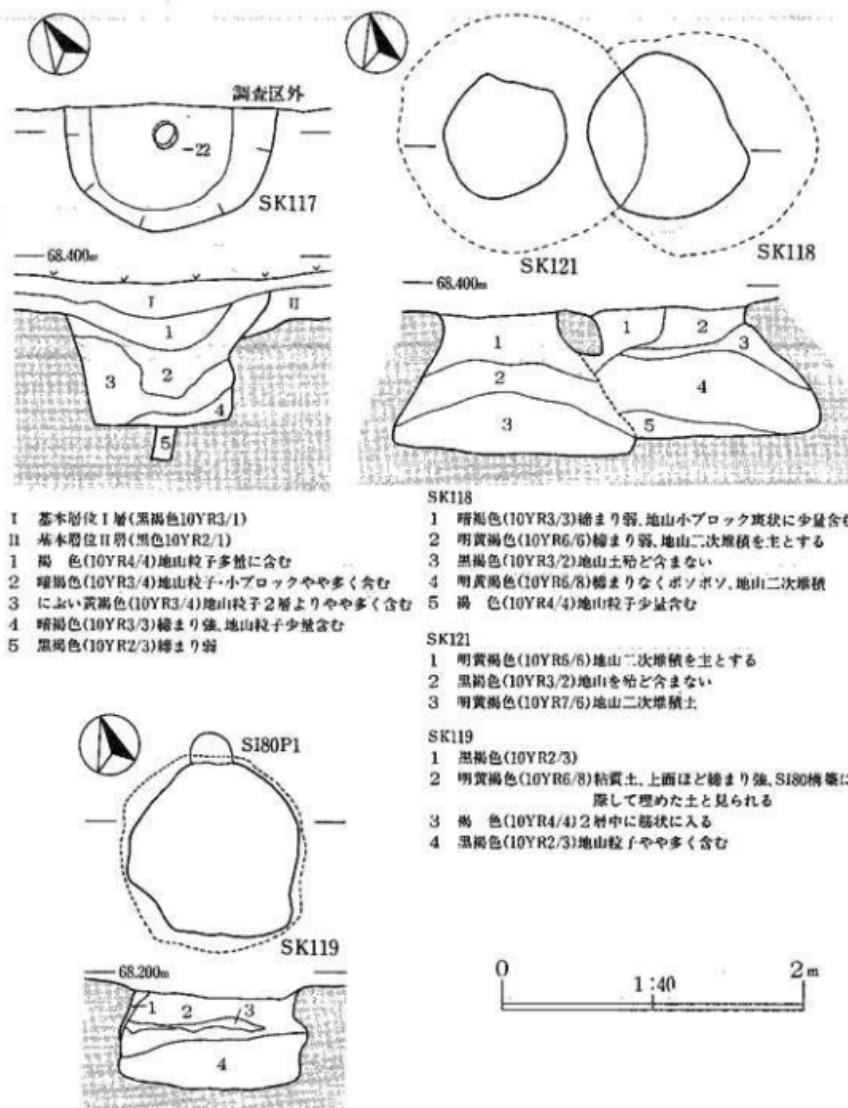
\*縛まりは全体に弱い。

SK115

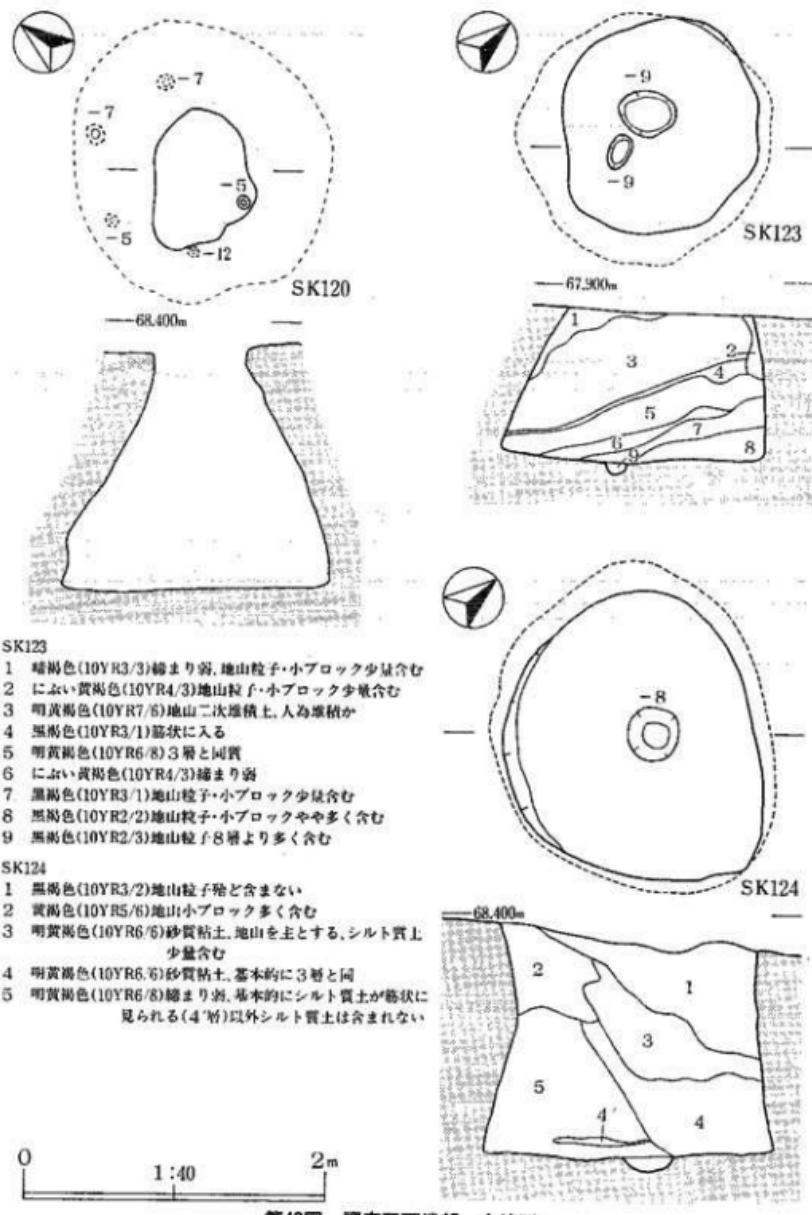
- 1 淡色(10YR4/4)地山粒子少量含む
- 2 明黄褐色(10YR6/5)地山を主とする土
- 3 黄色(10YR4/4)基本的に1層と同、地山粒子は1層より多く含む



第41図 調査区西端部 土坑13



第42図 調査区西端部 土坑14



第43図 調査区西端部 土坑19

## 2 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、調査区東部沢1内に限定される。また該期の遺物も遺構外を含めてもほぼこの沢内に収まる。従ってここでは、平安時代の遺構・遺物とともに周辺出土の遺物について併せて報告する。

### (1) 竪穴住居跡

#### S 140 竪穴住居跡 (第44~46図、図版19~21)

沢1内、M.J・MK54グリッドを中心とする位置で確認した。遺構確認面は大湯浮石層直上(I-b層、第44図では4層)である。同層を精査中に焼土、炭化物(材)、焼石等の検出を受け、当初焼土遺構との認識で調査を行っていた。その後、沢1西辺に並行するように壁面(西壁)が確認され、竪穴住居跡と再認識した経緯がある。

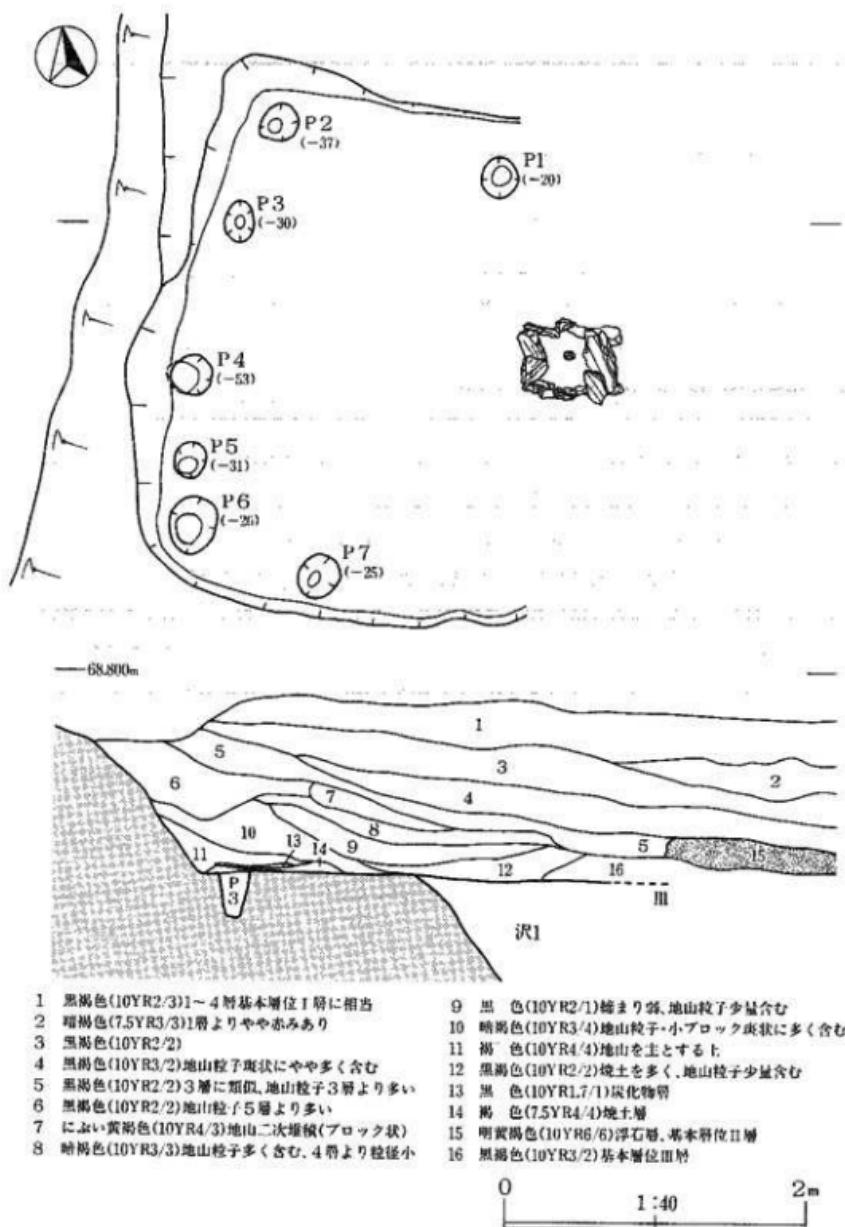
竪穴の規模は、南北長3.5m、東西長は床面東半分が黒色土(基本層位III-a層)上にあり、東壁を確認できなかったため明らかではないが、カマドの位置、大湯浮石層の堆積状況(第44図15層)からおよそ3.2mは越えないものと見ている。従って平面形態は、南北にやや長い隅丸方形と考えられる。確認面から床面までの深さは約20~40cmであるが、竪穴掘り込み面が明確ではないので本来の壁高は不明である。なお現地表面から床面までの深さは1.2mある。

床面は、西半分は地山面を利用し平坦で堅く締まっている。一方の東半分は黒色土中に形成され、堅く締まっているようには見えない。柱穴状ピットは、西壁沿いに5本(P2~6)、北壁沿いに1本(P1)、南壁沿いに1本(P7)の計7本検出した。柱穴配置を考えれば各隅に柱が配列しそうであるが、西壁の隅柱(P2、P6)に対応する東側の柱穴は不明である。この部分は黒色土中に柱穴が掘り込まれている可能性が高い箇所であり、その存在の有無を確認することは難しい。唯一P1を検出したが、他には確認できなかった。

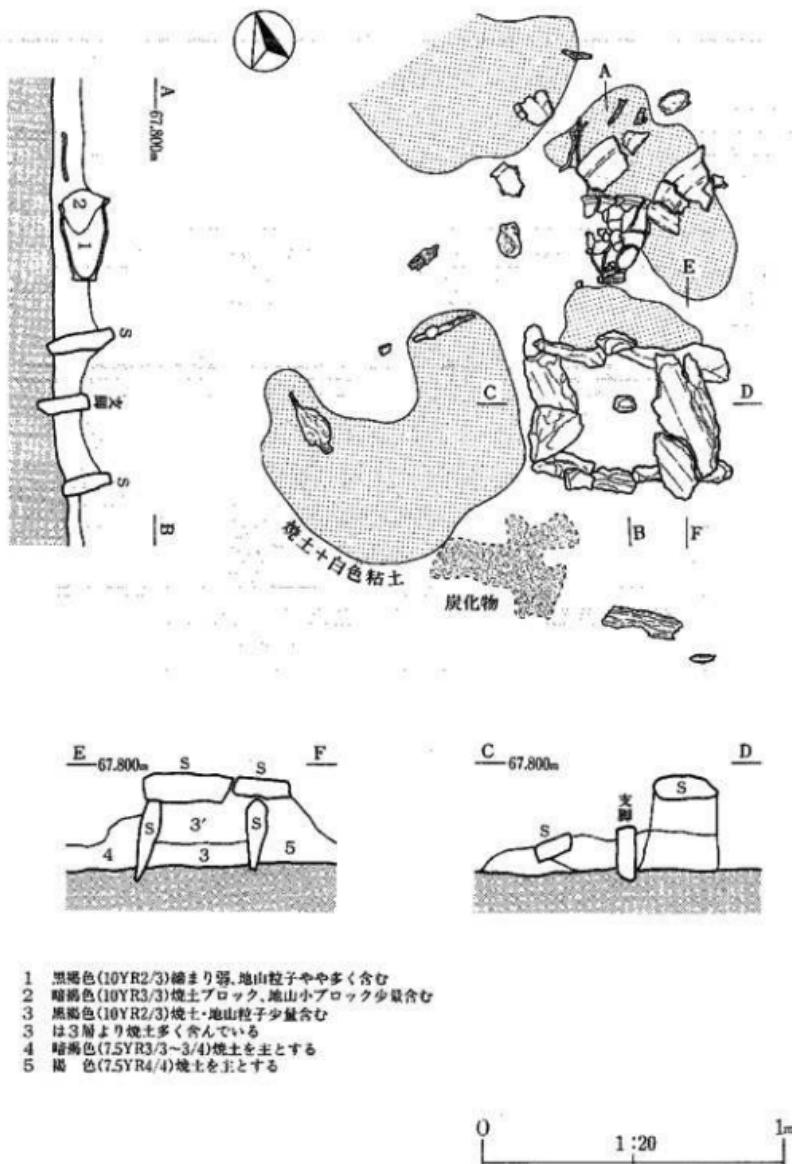
床面上、もしくは床面直上より多量の焼土、炭化物(材)が検出された。炭化材は床面北西部に集中的に認められ、またカマド南脇では茅状の炭化物が広がっており、焼失家屋であることを物語っているようである。炭化材の2点を材同定した結果、マメ科イヌエンジュ属の一種(No.1)、カツラ(No.2)との報告を受けた(第5章第1節参照)。

カマドは、推定東壁ほぼ中央に位置する。石組のカマドである。袖にあたる部分には、厚さ5cm前後の板状の石をそれぞれ3枚ずつ立て、長さ65cm前後にする。石下部は黒色土中に埋め込んでおり、押さえとしての粘土はあまり使用していないようである。袖を跨ぐように長さ45~55cm、幅15~20cmの板状の石を2枚乗せている。燃焼部中央には長さ18cmの棒状の石を埋め込み支脚としている。

遺物(第48~50図)はカマド周辺、特にカマド北側で集中的に確認できた。器種には、擦文土器(甕)、土師器(甕、把手付土器)、鉄製品(小刀、刀子、穂摘具様製品など)、石製品(感

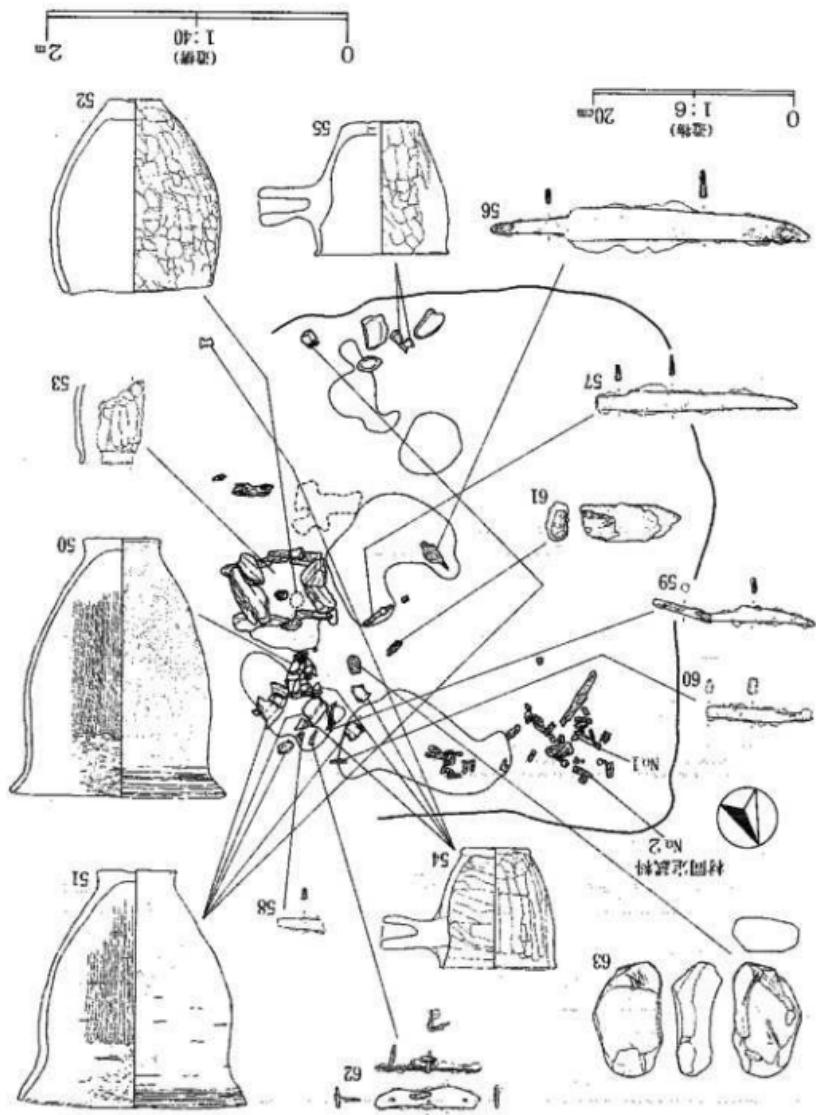


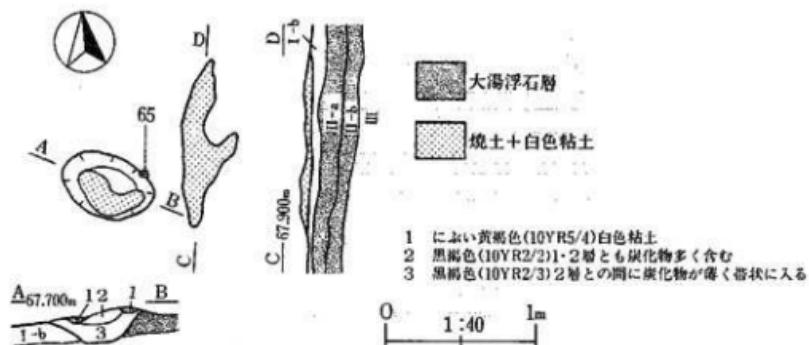
第44図 SI 40竪穴住居跡(1)



第45図 SI 40整穴住居跡(2) カマド

第46圖 S1 40號文化器物(3) 遺物出土地點圖





第47図 SN38焼土遺構

石）などがある。それぞれの出土状態については第46図を参照いただきたい。擦文土器は2個体がほぼ並んで口縁部を北に向け横倒しの状態で出土した。

また、カマド周辺の土を筋にかけたところ、少量ながら鐵冶作業に際して生じる鍛造剝片（スケル）を検出できた。なお、鐵滓は認められなかった。

### (2) 焼土遺構

#### S N 3 8 焼土遺構（第47図、図版21）

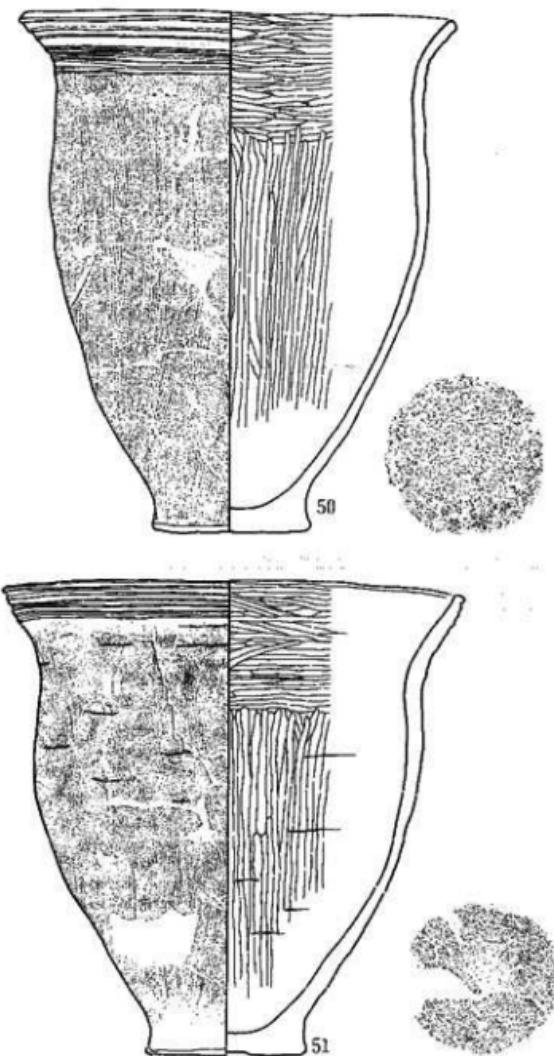
沢1内、M J 53グリッドで確認した。S I 40の南東約3.5mに位置する。遺構確認面は、S I 40同様、基本層位I-b層下である。焼土、白色粘土の分布と、浅い掘り込みからなる。掘り込みは長さ62cm、幅40cmの梢円形を示し、深さ22cm、壁は緩く立ち上がっている。底面はIII-a層上面である。この掘り込み部と東側の2箇所に白色粘土を主とする分布が認められる。東側の白色粘土の分布は、長さ1.1m、最大幅0.38mである。この粘土の下4~6cmの間層（I-b層）を挟んでII層大湯浮石層である。

遺物は、擦文土器、土師器甕（第51図66~68）がそれぞれ破片で出土した。擦文土器（65）は、掘り込み面上で確認した。甕の口縁部と見られ、擦文土器に特有の鋸歯状の刻文が施されている。周辺から、この破片に接合できる資料は認められなかった。

### (3) 遺構周辺出土遺物（第50図64、第51図69~75、図版24）

平安時代の遺物は、遺構内外を問わずほぼ沢1内に収まる。遺構外出土の遺物も、S I 40とS N 38周辺に集中し、沢1A方向に幾らか点在する。出土層位は全てII層大湯浮石層直上のI-b層下層である。

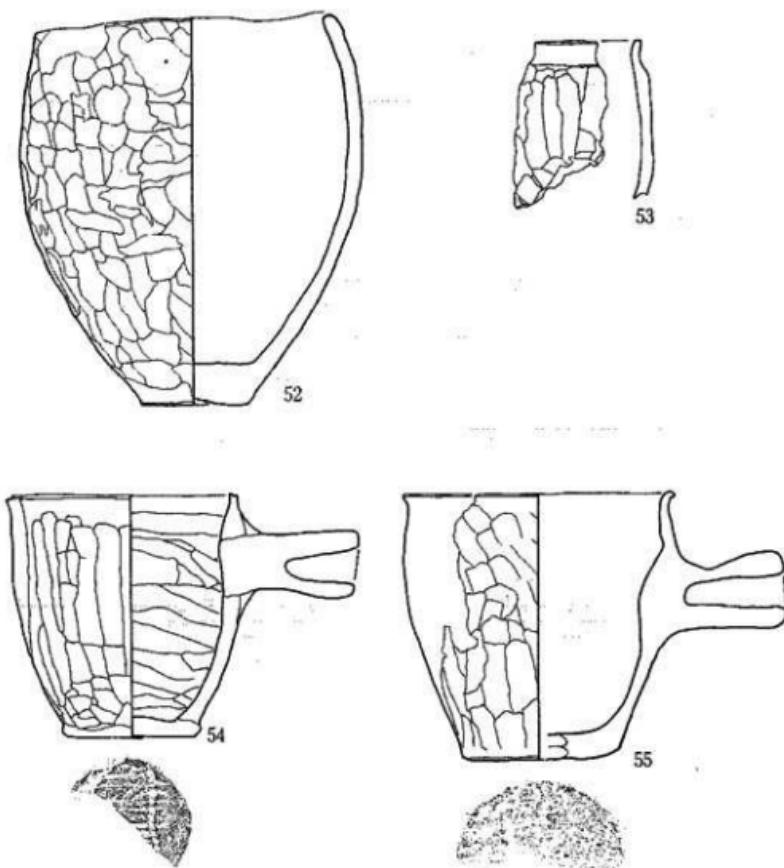
種別・器種は、土師器（壺、甕）、鐵製品（刀子か）、土製品（羽口）がある。75の須恵器壺は、表採資料である。壺（69、70）は、遺構内では確認できなかった。



番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	高さ	文様・調整	参考
						(外)縦位刷毛目→口縁部に4~5条の洗線 (内)口縁部調位・側部縦位ミガキ(底)砂底	色調(外)明滑→灰高(内) 灰高、二次火熱、塗付青
50	S140P10	擦文土器・壺	21.1	7.9	25.9		
51	S140P11- 12-26-28- 32-37-49	擦文土器・壺	22.3	8.0	23.5	(外)縦位・斜位ナデツケ状刷毛目→口縁 部に3条の洗い洗線、(内)横位・縱位ミガキ (底)印加、内外に積み上げ痕跡明瞭	色調(内外)灰滑→灰高 二次火熱、塗付青 1-2とも施成良好

第48図 S140竪穴住居出土遺物(1)

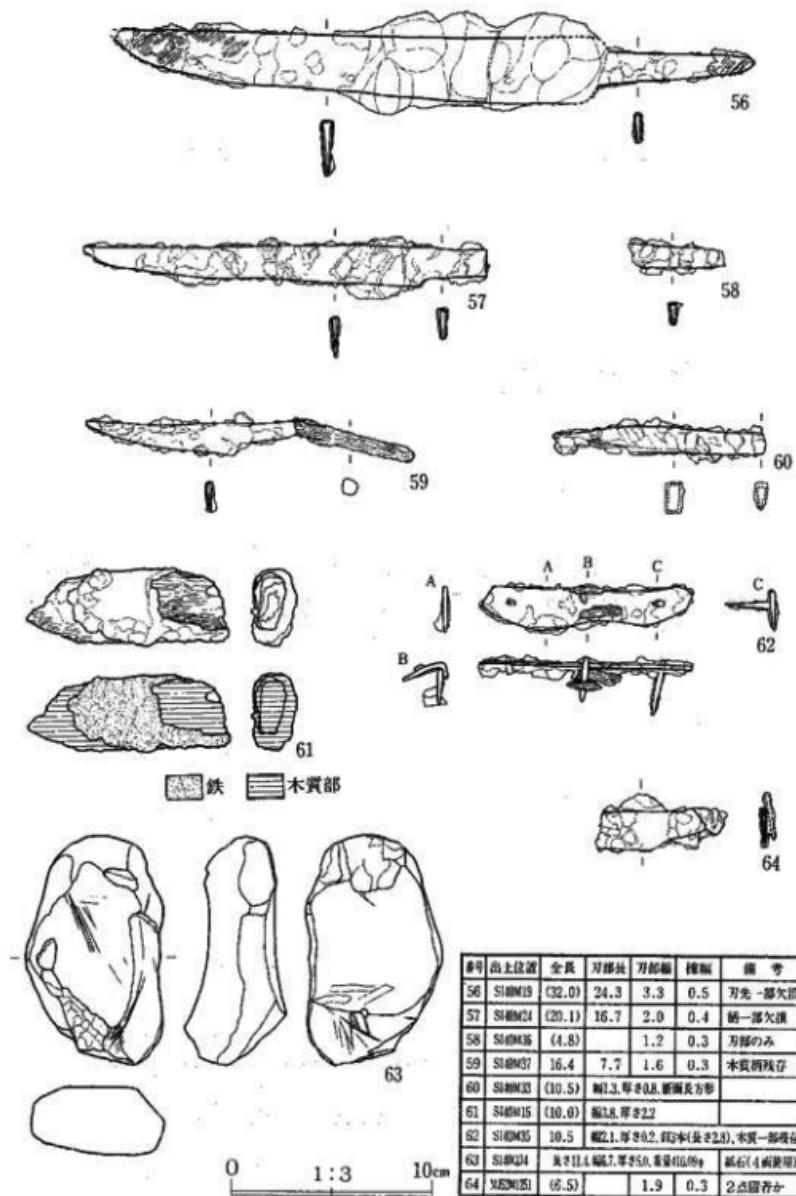
0 1:3 10cm



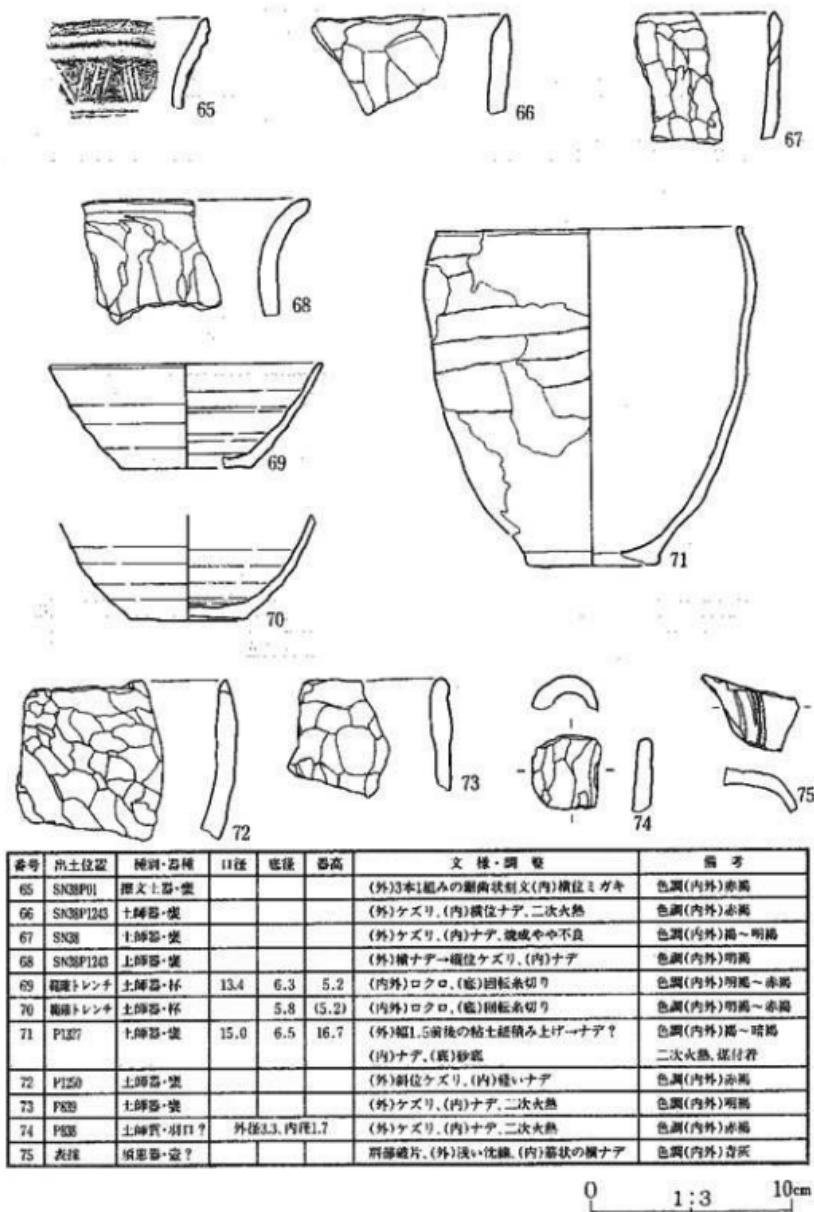
番号	出土位置	種別・器種	口径	底径	高さ	文様・調整	備考
52	SI40P51	土師器・甌	14.5	5.2	19.2	(外)縦枝ケズリ、(内)横枝ヘラナデ (底)ナデ、焼成良好、二次火熱	3~5mmの砂粒多く含む 色調(内外)暗赤褐色~暗褐色
53	SI10カマ7	土師器・甌				(外)縦枝ケズリ、(内)横枝ヘラナデ	色調(内外)暗褐色、砂粒多
54	SI40P29~ 29-25-29	土師器・把手 付土器	10.9 把手直(約6.3)	6.3 把手直(約6.3)	12.0	(外)縦枝ケズリ、(内)横枝・斜枝ヘラナデ (底)3瓣状底、把手中空・断面円形	色調(内)明褐色 二次火熱
55	SI40P1-2	土師器・把手 付土器	13.0	7.7	13.2	(外)縦枝ケズリ、(内)ナデ、(底)砂粒 把手中空・断面円形、5より作り砂粒 把手・タール付着	色調(内外)墨黒~暗褐色

0 1:3 10cm

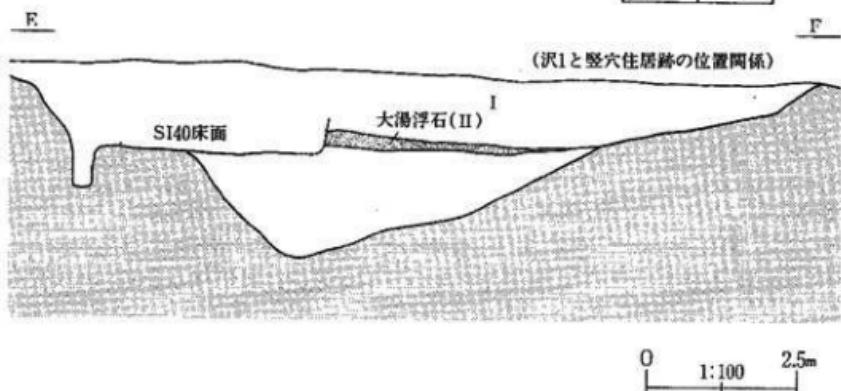
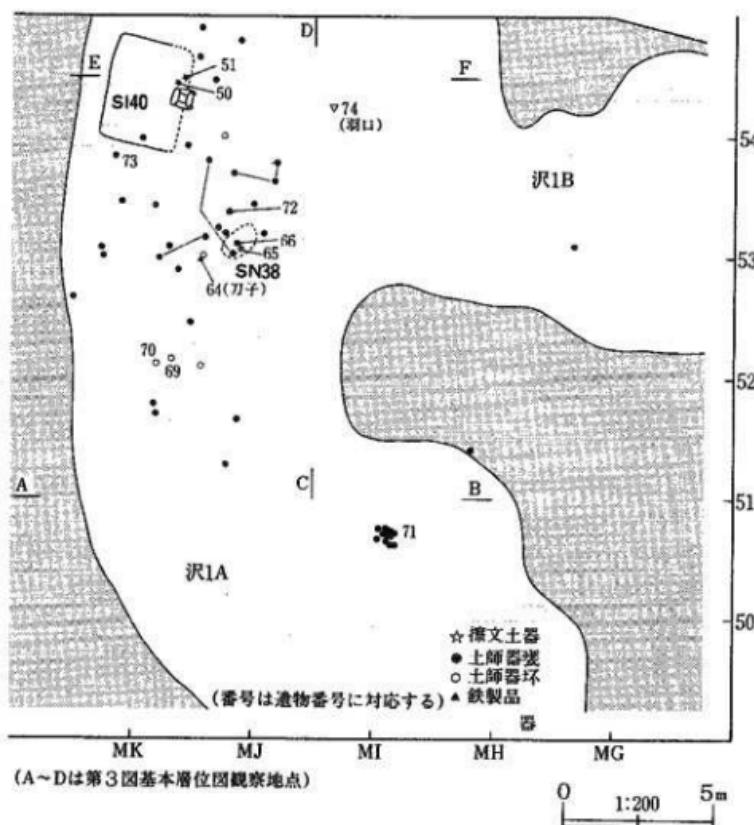
第49図 SI 40堅穴住居跡出土遺物(2)



第50図 SI 40堅穴住居跡出土遺物(3) (64を除く)



第51図 SN38焼土遺構及び周辺出土遺物



第52図 池1内における平安時代の遺物分布図

### 3 時期不明の遺構

所属時期の不明な遺構は、焼土遺構1基、溝状遺構17条である。遺構の確認面はI層中か下面であり、遺構底面はSD02・34、SD21・23・26・36を除き、地山漸移層面である。いずれの遺構とも遺物は出土しなかった。

#### (1) SN14 焼土遺構(第24図)

調査区東部北西側、MH54グリッドで焼土と白色粘土の分布を確認した。SD15と重複し、これに切られる。長さ1.3m、幅1.1m程の不整形を示す。焼土の厚さは12cmである。

#### (2) 溝状遺構(第4・53・54図、図版18)

##### SD02・34(第53図、図版18)

調査区中央部東端で確認した。北東—南西方向に延び、南端は段丘崖に、北端は沢1に落ち込む。全長27.8m、幅0.25~0.55mであり、一部で二重(SD34)となる。確認面からの深さは最深で30cmである。

##### SD21・23・26・36(第54図)

調査区東部で確認した。5本の溝がSD02・34と同様北東—南西方向に延びる。断続的では



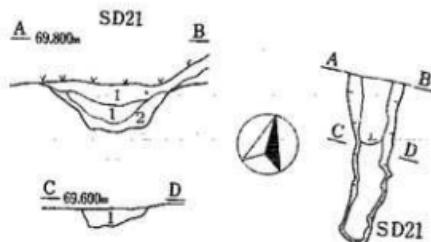
あるが一連の施設と考えられる。各溝の法量は、北から SD21で長さ3.3m、幅0.55~1.1m、深さ0.3m、SD26で長さ6.5m、幅0.35~0.73m、深さ20cm、SD36で長さ1.35m、幅0.4m、深さ0.18m、SD23-1で長さ1.85m、幅0.45m、深さ0.1m、SD23-2で長さ3.65m、幅0.4~0.55m、深さ0.13mである。

## SD15 (第24図)

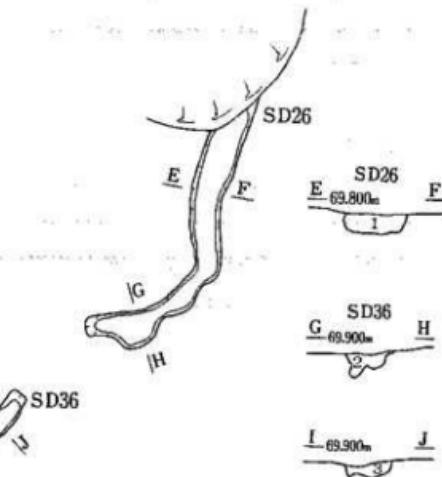
調査区東部北西隅、MH・MI54グリッドで確認した。SD28、SK27、SN14と重複し、それぞれを切っていいる。東西方向に伸び、長さ5.3m、幅0.25~0.5m、深さ0.25mである。

## SD28 (第24図)

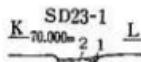
調査区東部北西隅、MH54グリッドで確認した。SD15と重複し、これよ



- 1 黒褐色(10YR2/2)縫まり弱、地山粒子やや多く含む
- 2 喀褐色(10YR3/3)地山粒子やや多く含む

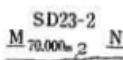


- SD26・36  
 1 黒褐色(10YR3/2)  
 2 喀褐色(10YR3/3)縫まり弱、地山粒子斑状に多く含む  
 3 喀褐色(10YR3/3)地山粒子斑状に多く含む



## SD23

- 1 黒褐色(10YR2/2)
- 2 喀褐色(10YR3/3)



0 1:80(断面は1:40) 4m



第54図 SD21・23・26・36溝状造構

り旧い。SD30同様南北方向に延び、長さ2.6m、幅0.2~0.25m、深さ0.3mである。

#### SD30 (第24図)

調査区東部北西隅、MH54グリッドで確認した。南北方向に延び、北端は調査区外に至る。確認できる長さ1.3m、幅0.1~0.25m、深さ0.17mである。

#### SD32 (第4図)

調査区東部東側、LS51・52グリッドで確認した。南北方向に延び、長さ2m、幅0.2~0.35m、幅0.15mである。

#### SD49 (第4・27図)

調査区中央部西側、MR53、MS53・54グリッドで確認した。端々を結んだ直線距離は6mとなるが、北端から南に約4.2m延び、ここから東に向きを変え2.9mで東端に至る。幅は0.2~0.3m、深さ0.18mである。北端部でSK59と重複しこれを切る。

#### SD53 (第4図)

調査区中央部西側、MS53グリッドで確認した。北西~南東方向に延び、東側に隣接するSD49と一部併行する。長さ1.6m、幅0.25~0.35m、深さ0.32mである。

#### SD54 (第4図)

調査区中央部西側、MT53グリッドで確認した。東西方向に延び、長さ1.6m、幅0.25~0.35m、深さ0.15mである。

#### SD67 (第4図)

調査区中央部南側、MK~MM47グリッドで確認した。東西方向に延び、長さ5.4m、幅0.35~0.55m、深さ0.2mである。

#### SD68 (第53図)

調査区北東部、MK53・54グリッドで確認した。SD02と交錯するが新旧は不明である。およそ東西方向に延び、緩い「S」字状を示す。長さ4.9m、幅0.2~0.33m、深さ0.3mである。南東端は沢1に落ち込む。

#### SD69 (第25図)

調査区中央部西側、MT52グリッドで確認した。SK50と重複し、これを切っている。東西方向に延び、確認できる長さ1.35m、幅0.15~0.28m、深さ0.05mである。

#### SD88 (第5・35図)

調査区西端部、NL・NM57、NM58グリッドで確認した。SK86と重複し、これを切る。およそ南北方向に延び、北端は調査区外に及ぶ。確認できる長さ約6m、幅0.25~0.7m、深さ1.15mである。

## 第2節 遺構外出土遺物

上野遺跡で出土した遺構外の遺物は、縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器などがある。この内、平安時代の遺物については、前節で検出遺構と共に紹介をしてあるので、本節では縄文～弥生時代の土器、石器について報告する。

### 1 土器（第56～59図、図版26・27）

本遺跡では、600点余りの縄文～弥生時代の土器片が得られている。これら土器を一覧して、胎土、文様等から大きく3つに大別できる。

第I群土器：縄文時代前期初頭～前葉の土器。

第II群土器：縄文時代中期後葉～後期前葉の土器。

第III群土器：弥生時代後期の土器。

いずれの資料も破片であり、全体の形状を復元できるものはない。各群の出土比率は、第I群と第II群で、約6:4、第III群は1個体（2片）のみである。

#### 第I群土器（第56図76～第57図106、図版26）

縄文時代前期の土器群である。基本的に胎土には纖維を含む。内面にはD類を除き、過半数の個体に煤状炭化物の付着が認められる。

A類（76～82）は、内外面に縄文が施されている土器である。口縁部資料76～78は、口唇部にも同一原体による圧痕が認められる。78、79は、口縁部に横走する縄文を、胴部には縱走する縄文を配している。76～79は器厚が比較的薄く、暗褐色系の色調を呈している（1種）。80～82は、1種に比較するとやや厚手で、赤褐色系の色調を呈する（2種）という相違がある。縄文原体は81がR L、他はL Rである。

B類（83～85）は、外面が縄文、内面が条痕をもつ土器である。原体はL R、胎土にはA類より多くの細砂粒を含み、A類1種に似る。色調は外面赤褐色、内面暗褐色を示す。

C類（86～95）は、外面にのみ縄文が施されている土器である。86は外面、口唇部の施文手法からA類1種に近似する。92、93は胎土に多量の金雲母と少量の纖維を含んでいる。95は、底部近くの破片であり、丸底を呈すると思われる。92、95の内面には煤状炭化物がびっしり付着している。本群土器の中では出土量が最も多い。

D類（96～106）は、外面に撚糸が施文されている土器である。A～C類より多く纖維を含んでいるように見える。縄文原体は105、106がR、他はLである。口唇部はほぼ平らに面取りされ、施文方向を変えることによる口縁部文様帯が形成されている。100～104と105、106はそれぞれ同一個体と思われる。色調は、灰褐～灰白系を示す。

以上第I群土器は、沢1B（Dブロック、第54図による、以下同）とこの東側Bブロックの2箇所でやや集中している。調査区中央部では全く分布せず、西端部N 158グリッドに数点認められるのみである。類別では、A類が沢1内のDブロックにその分布が限られる。C類はD・B-1ブロックで、D類はB-2ブロックに集中し、Dブロックと西端部N 158グリッドにも少例分布する。

#### 第II群土器（第57図107～第59図140、図版27）

縄文時代中期～後期の土器群である。

A類（107～114）は、隆線を多用する土器である。107は、大型の弁状突起に円孔を持つ。隆線上には籠状工具による細かい刻みが、隆線間には連続する刺突が加えられる。108は、隆線上に縄文圧痕（R L）が密になされている。109～111は、同一個体の可能性がある。112の内面には椿円形の首孔がある。地文（R L + L R羽状）に隆線を貼付しており、口唇部の隆線上にのみ半截竹管による「C」字状の刻目が入れられる。

B類（115～125）は、沈線を多用する土器である。115は、山形突起に小さなボタン状の貼付がなされ、口唇部にも細い隆線が付される。基本的に2本1組みの沈線で文様を構成している。119は、折り返しの口縁部上に縄文（L R）圧痕がなされている。123は、頂部がやや座む小さな突起をもつ土器である。無文の地に2本1組みの沈線が描出されている。124と125は地文（L R）上に平行する沈線が6段以上見られる。

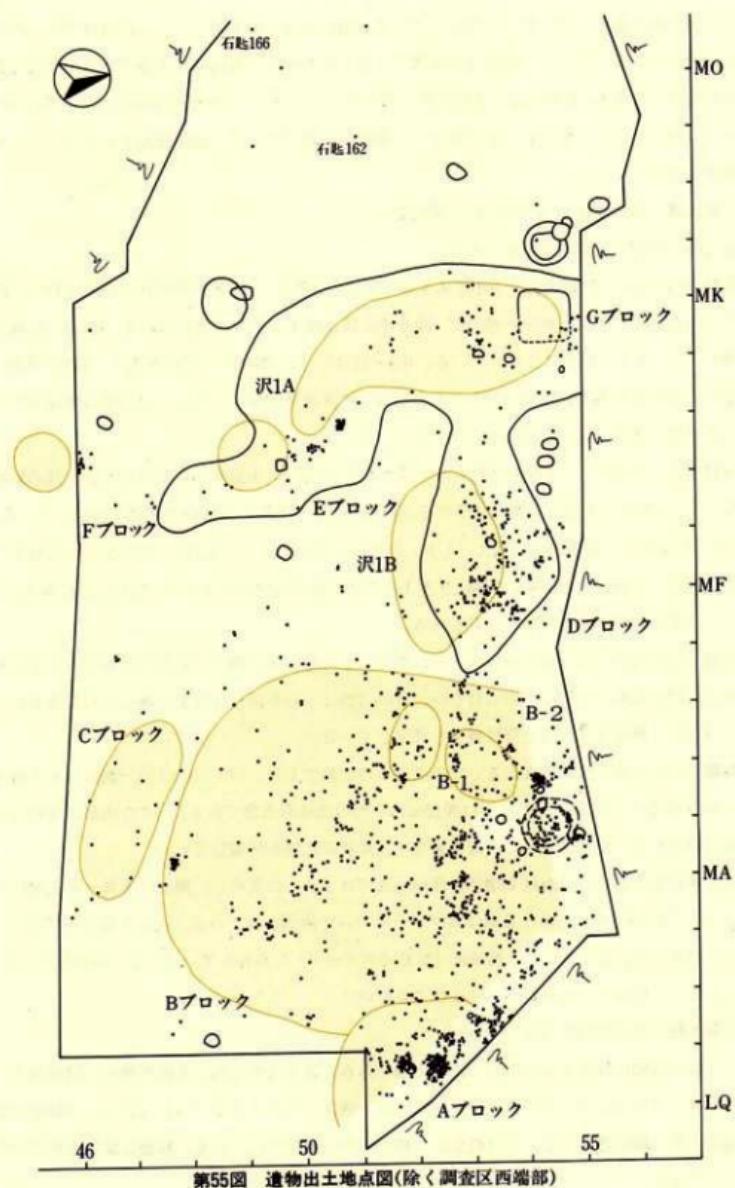
C類（126～130）は、折り返しあるいは肥厚する口縁上部に縄文（L R）が施文される土器である。縄文以外の手法は認められない。126～128は、折り返し口縁上に縄文を回転施文し、129、130は、肥厚する口縁上部に縄文を押圧している。

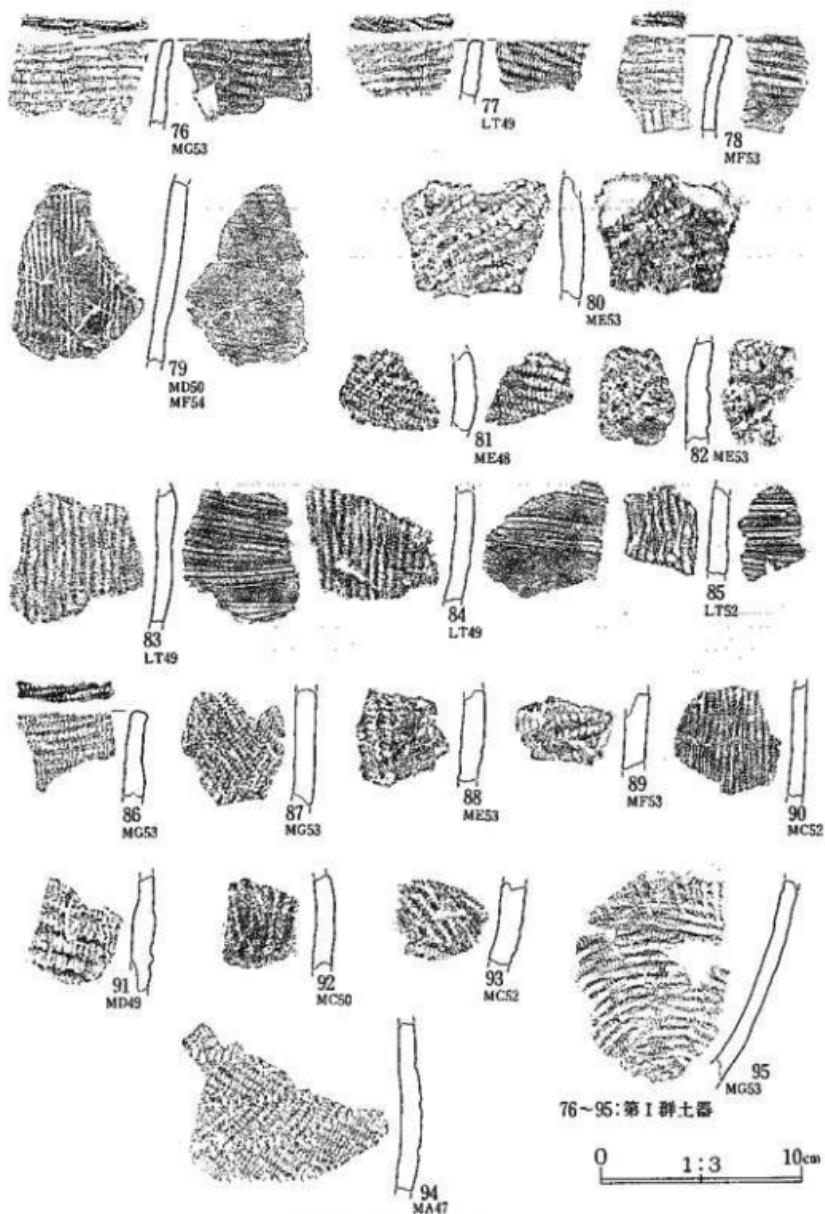
D類（133～140）は、縄文あるいは条痕のみの土器である。139、140は同一個体であり縄方向の条痕が認められる。133は推定口径12cmの小型の深鉢形土器である。小さな山形の突起は4単位と思われる。内外面とも二次火熱を受け、煤状炭化物が付着している。

以上第II群土器は、調査区東端部の窪地（Aブロック）に集中し、調査区東部～中央部にも点在する（B・Cブロック）。C類はAブロックのみで検出されている。逆にA類はAブロック内には分布せず、Bブロックと西端部（N E 56グリッド）に点在している。またB類はA・B・Dブロックに分布し、これ以西では確認できない。

#### 第III群土器（第59図141・142、図版27）

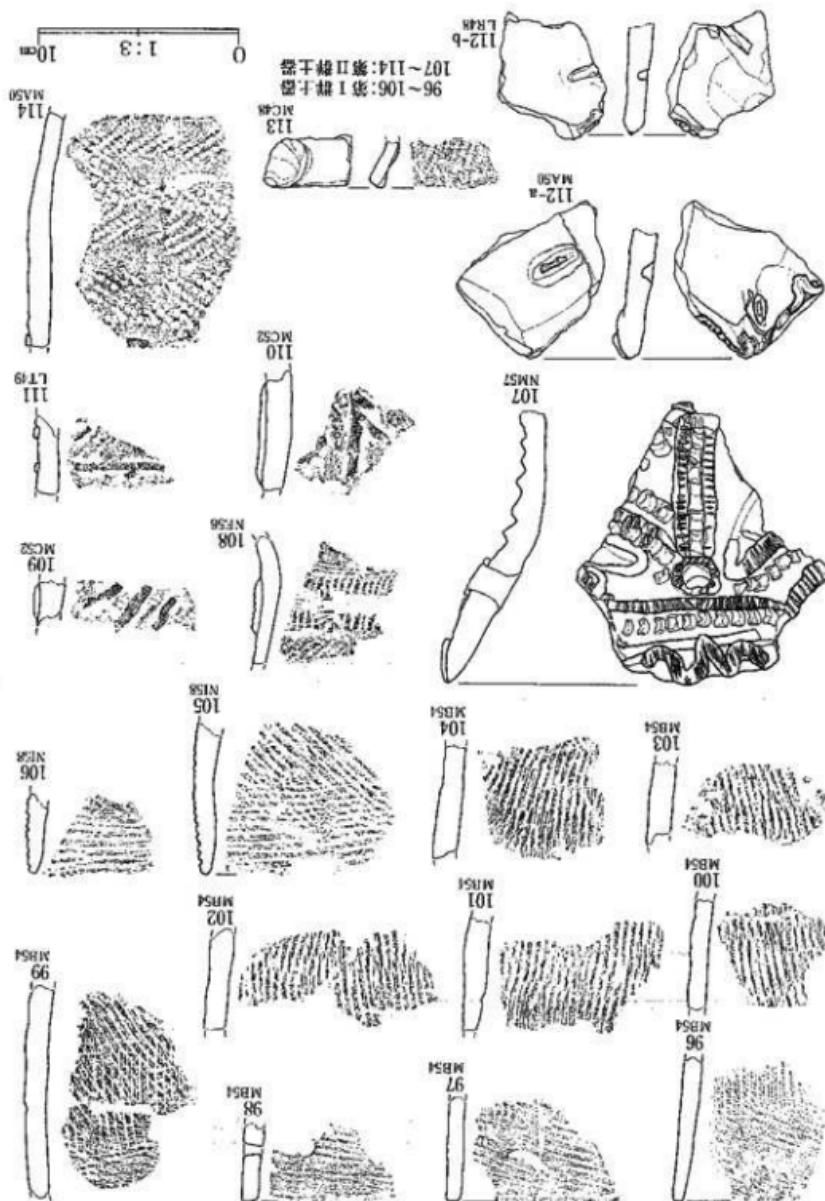
弥生時代後期に帰属すると考えられる土器である。調査区中央部と東部の接点、MH46グリッドⅠ層（Fブロック）から出土した2点（同一個体）のみである。141、142は、口縁部に縦位施文された細い撚糸（L）と口唇部には指頭様押圧が付されている。外面に煤状炭化物が付着している。

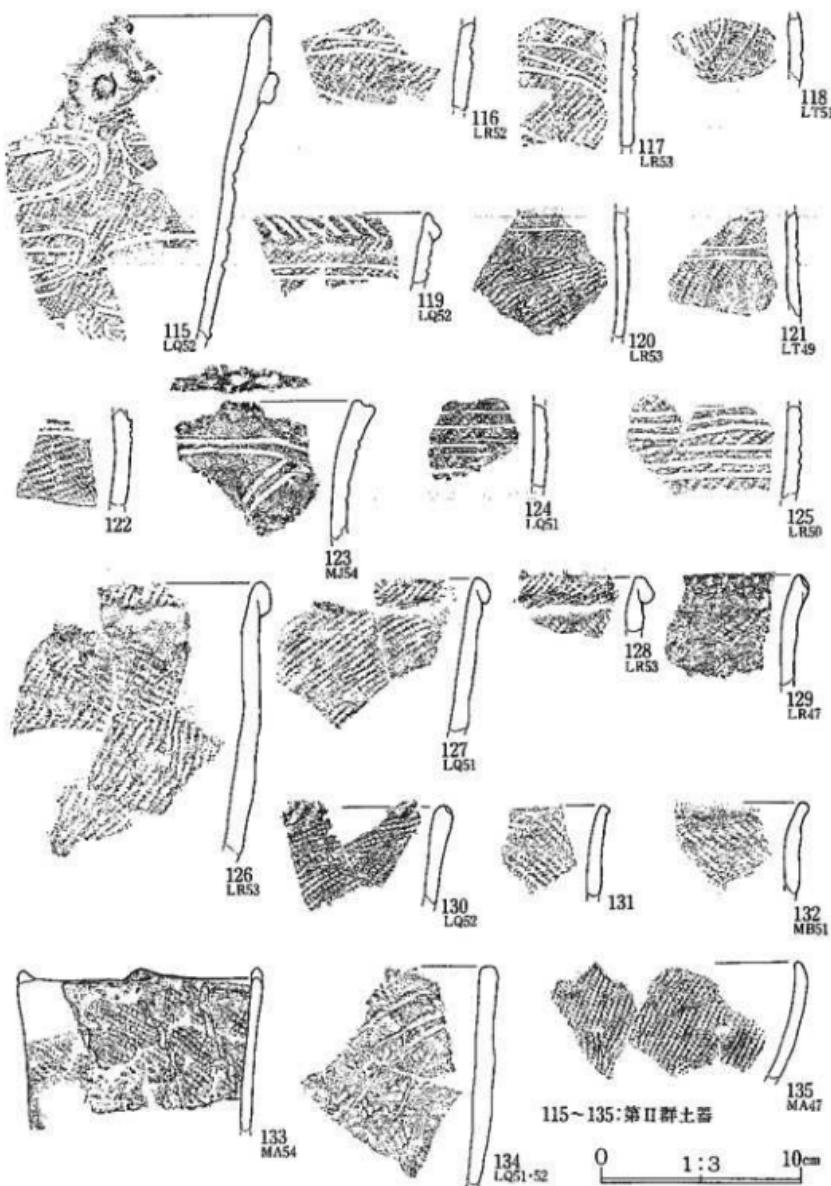




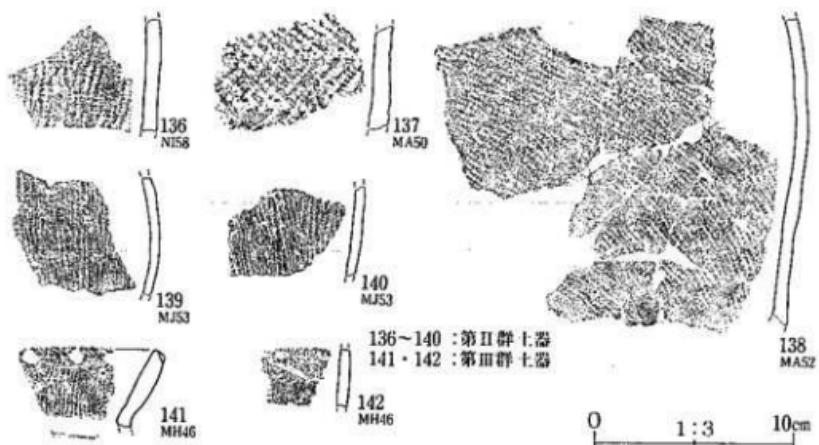
第56図 遺構外出土土器(1)

第57图 遗物外出土器(2)





第58図 遺構外出土土器(3)



第59図 遺構外出土土器(4)

## 2 石器

本遺跡で出土した遺構外の石器類は680点余りである。この内、剝片の占める割合が多く全体の約86%を占める。定形的な剝片石器、礫石器の出現率はそれぞれ約7%である。

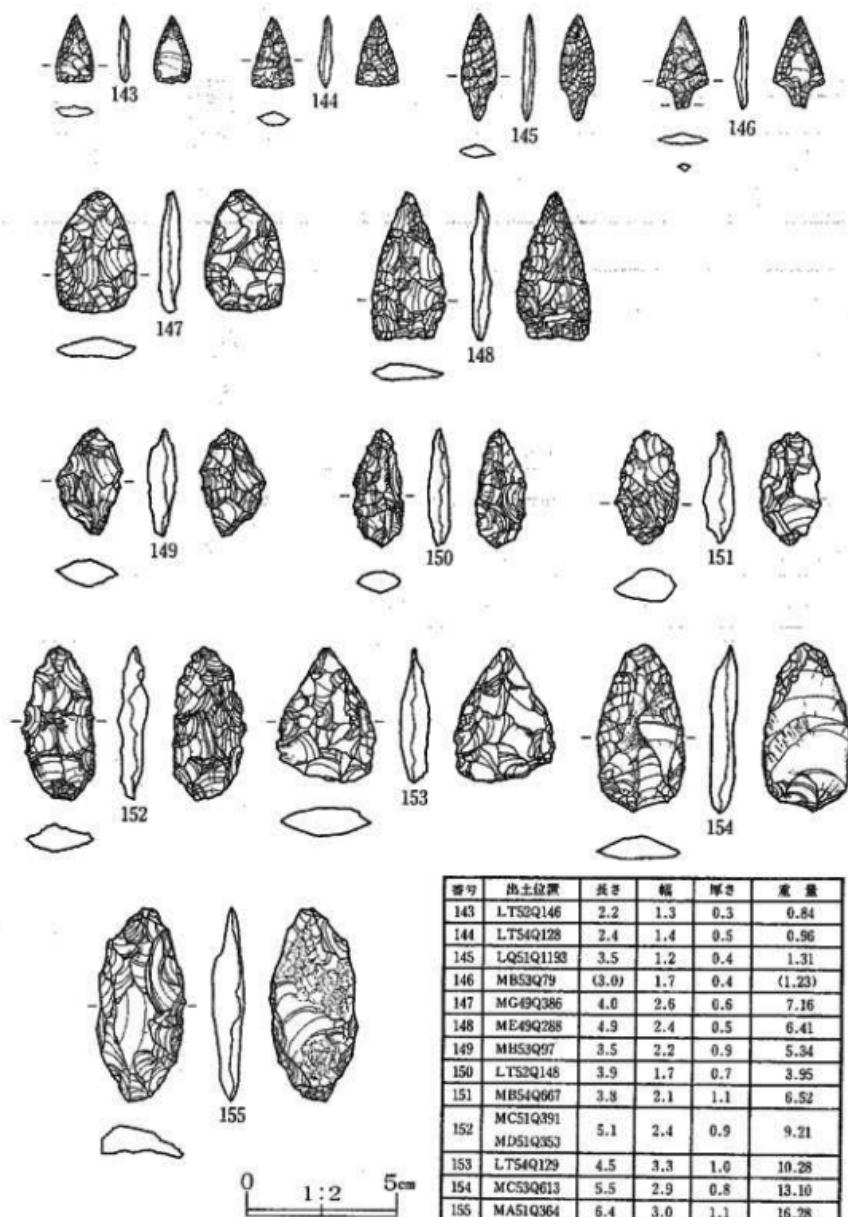
石器の分布は調査区東部に集中しており、中央部、西端部には極めて疎らに点在するのみである。

## (1) 剥片石器 (第60~64図、図版28)

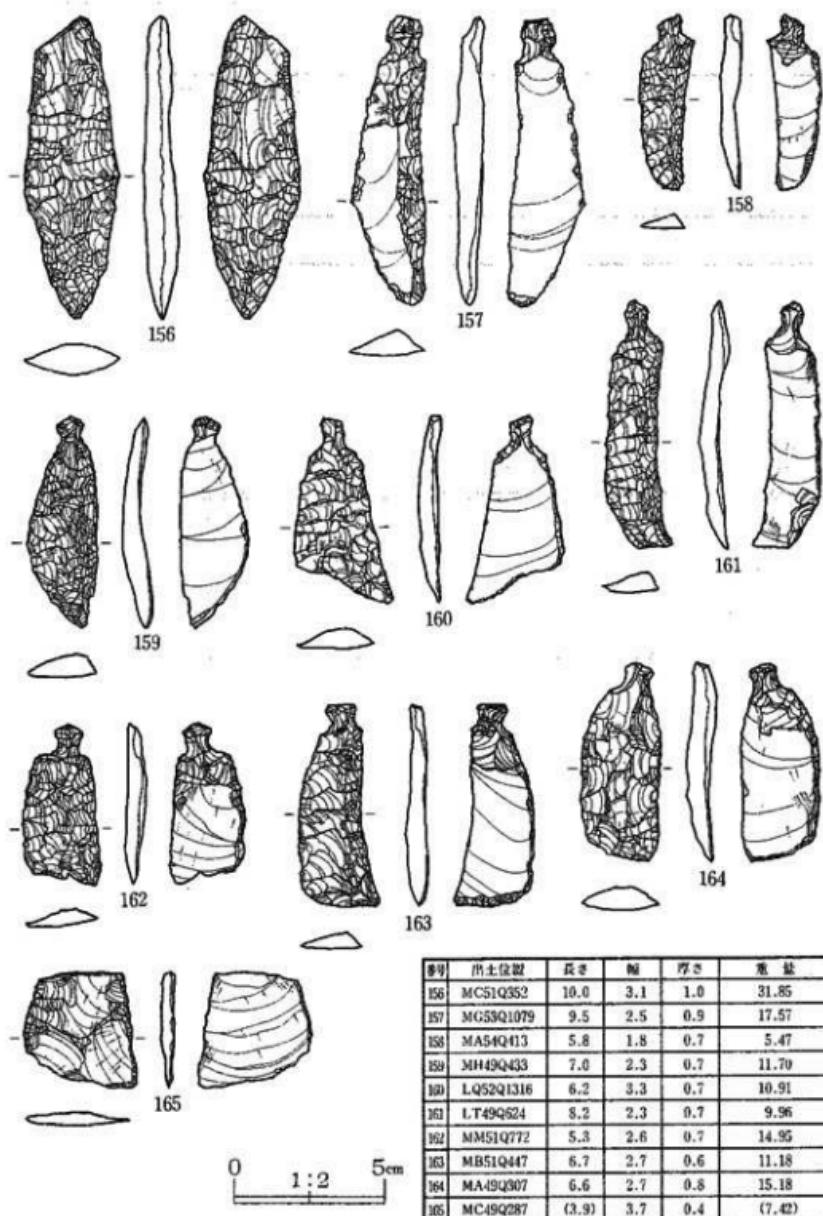
定形的と見られる剝片石器には、石鎌 (143~148)、尖頭器 (149~155)、石槍 (156)、石匙 (157~173)、石籠 (174~178)、搔器・削器など (179~185) がある。石質は、石鎌144、石匙165がチャート、石匙162が玉髓である以外は、頁岩である。175、179、183は緑色を呈する頁岩のようである。

石匙は、定形的な石器の中で最も検出点数が多い。17点出土している。形態的には全て縦形である。いずれも同様な調整剝離技法によって製作されたと見られる。正面の稜線は中央より右方に位置し、調整剝離の傾斜度が異なることを示している。また背面は素材面を大きく残していることも共通項として挙げることができる。

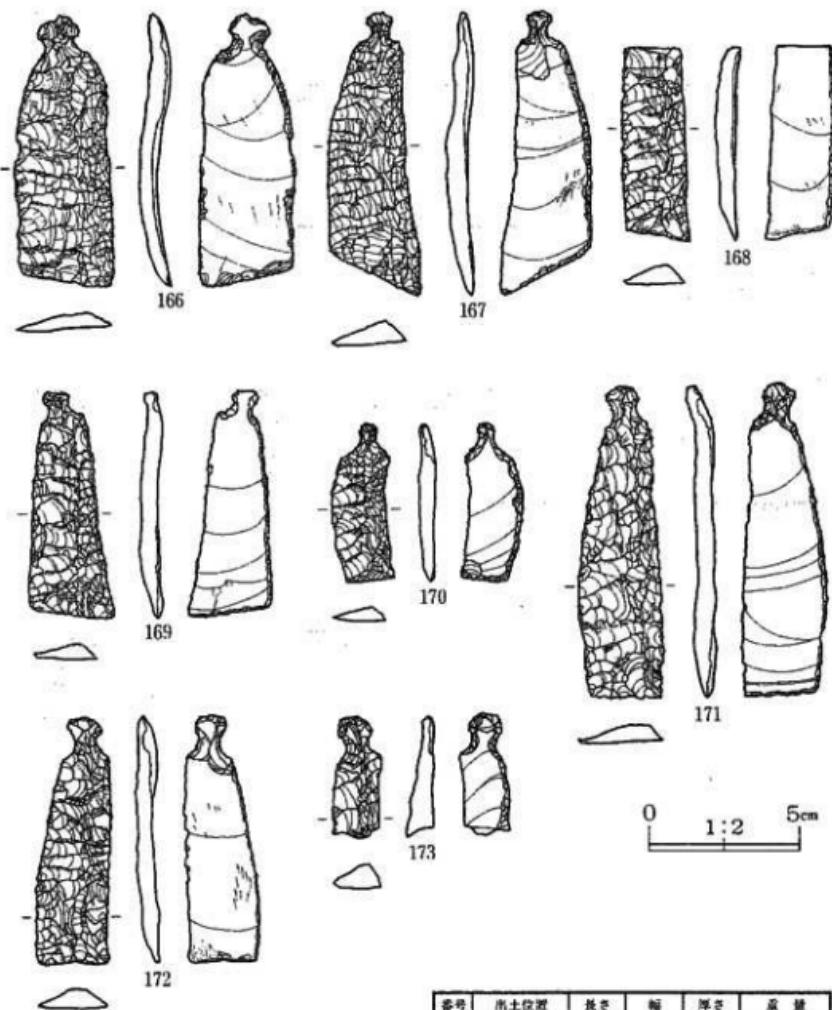
剝片石器の分布は、石鎌、尖頭器、石槍は、およそ調査区東部Bブロック内に限定されるのに対し、石匙はこれらより広く分布している。調査区東部 (Bブロック8点、Aブロック2点) を中心に置くものの、沢1内 (D・Eブロック5点)、中央部 (2点、第55図上162・166) にも分布が認められる。沢1出土の5点は、いずれも沢底面か直上 (III-c層) で検出されている。



第60図 遺構外出土石器(1)

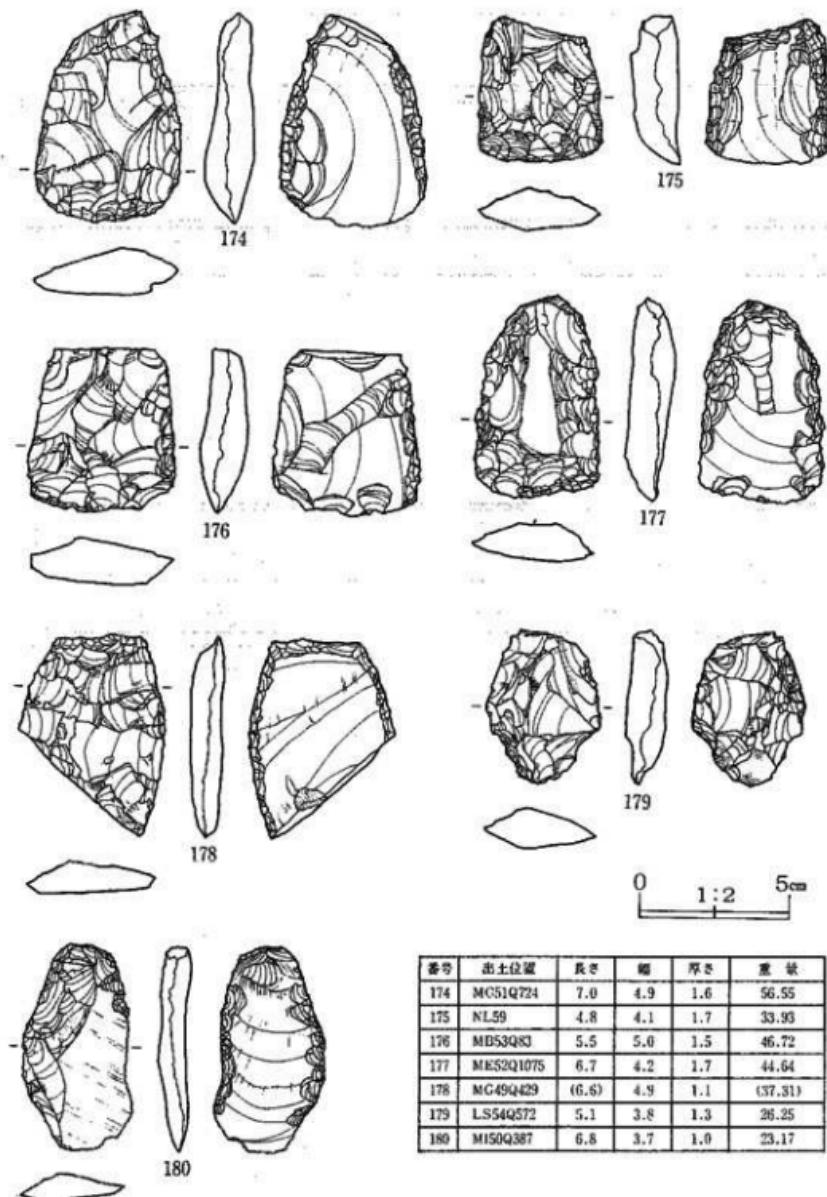


第61図 遺構外出土石器(2)

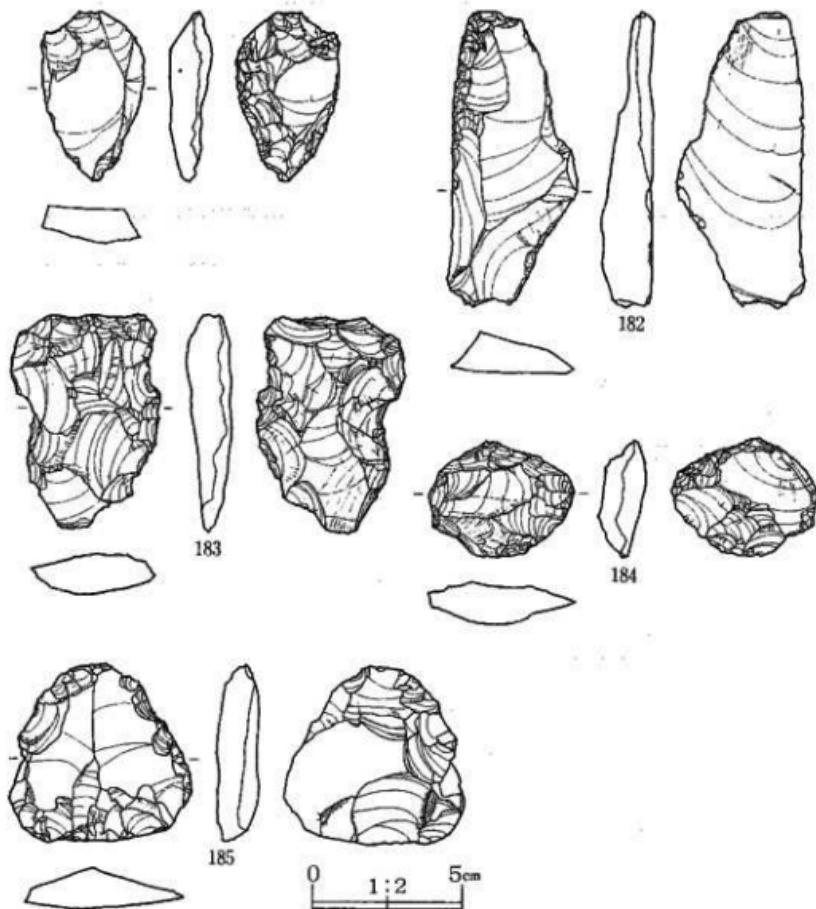


番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量
166	MO49Q239	9.0	3.3	0.7	21.14
167	MH50Q434	9.3	3.1	0.8	18.44
168	MA50Q297	(6.4)	2.3	0.6	(11.96)
169	MB53Q321	7.5	2.9	0.8	13.43
170	LQ52Q1318	5.2	2.1	0.5	6.02
171	ME53Q883	10.4	2.9	0.7	22.63
172	LS51Q1144	8.2	2.6	0.7	14.95
173	MG53Q1070	(4.0)	1.6	0.8	(4.65)

第62図 遺構外出土石器(3)



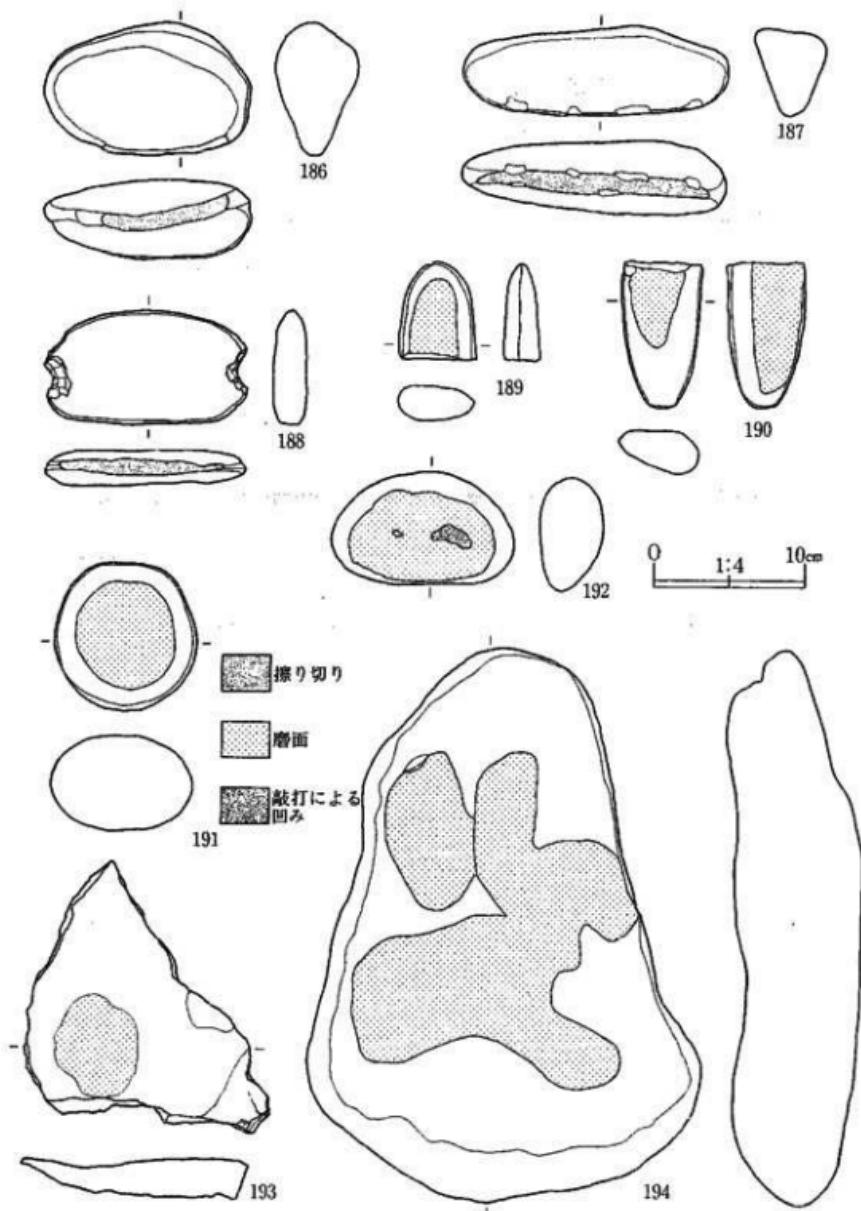
第63図 造構外出土石器(4)



番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重 量
181	MAS3Q9	5.6	3.4	1.4	25.75
182	MG54Q900	9.8	4.3	1.7	54.04
183	MAS2Q476	7.2	4.9	1.6	51.73
184	LS53Q199	4.8	3.9	1.4	26.30
185	MD53Q619	6.0	5.9	1.4	49.04

番号	出土位置	長さ	幅	厚さ	重 量
186	MA53Q497	13.7	8.7	5.8	855.21
187	MI51Q1254	17.5	5.7	4.9	632.28
188	NLS58II	13.3	7.7	2.3	338.86
189	MH50Q1341	(6.4)	5.2	2.3	(114.77)
190	MD48Q252	(9.8)	5.2	2.9	(226.02)
191	MB54Q912	9.7	9.5	6.4	864.49
192	MB54Q700	12.1	7.4	4.2	542.51
193	MC51Q522	17.9	16.3	2.5	619.75
194	LQ52Q1182	37.0	26.2	9.0	9450.00

第64図 遺構外出土石器(5)



第65図 遺構外出土石器(6)

## (2) 碓石器 (第65図)

出土した碓石器には、擦石 (186~188)、磨石 (189~191)、石皿・台石類 (193、194) がある。192は、磨石と凹石の両要素をもつ。

これら碓石器の分布は、188を除き調査区東部に限られる。186、187は沢1内 (Eブロック) 出土であり、187は底面直上から得られている。なお擦石、磨石の区別については、協和町上ノ山II遺跡の報告書における碓石器類の項 (下巻P293) を参照いただきたい。

## (3) 遺物の分布と遺構との関係

該期の遺物の分布範囲と遺構の配置を見ると、必ずしもそれが合致していないことに1つの特徴があろう。すなわち遺構は、調査区中央部から西端部に集中するのに対し、遺物は遺構分布の希薄な沢1を含む調査区東部にその中心を置いている。このことは、「縄文時代の上野」の性格を推定していく上で大きな意味をもつ反面、土坑等の構築時期を不明瞭にしている。

土器から見た時期は、大きくは前期前葉と中期後葉にピークをもつ。第55図の遺物出土地点図を見ると、前者は沢1及びそれ以東 (B・D・Eブロック) を中心として広く粗く分布し、一方後者は東端部 (Aブロック) に集中し、B・Cブロックにも点在しているが、沢1内には殆ど入り込んでいない。このように両者の分布の関係は一部、Bブロックでの重複が認められるが、大略的には時期的な分布の偏りと読み取ることができるかもしれない。

これに石器の分布範囲を重ねてみると、石鎌、尖頭器、石槍類は1点 (石鎌145) を除いてB・Eブロック内で出土し、石匙はBブロックに中心を置くものの沢1内、調査区中央部でも出土している。中期の土器が集中するAブロックでは、これらの石器が殆ど確認できないことから、礫石器 (特に擦石) を含めてその帰属は、前期前葉の可能性が高い。

定型的な石器の中で、点数の多い石匙については、その製作にあたって同じ調整剝離技法が採用されている。この様な技法をもつ石匙は「松原型石匙」とも呼ばれ、「早期最終末の一型式から前期前葉までの数型式の短期間に北海道から東北地域の広範囲にわたって分布している」とされている。先に述べた石匙等の帰属時期の可能性を高める裏付けとなろう。この技法をもつ石匙は上野遺跡の周辺でも、山王岱遺跡 (第3次) や上型遺跡で出土例がある。

またBブロックでは、500点以上の石器が確認されているが、その大半は剥片で占められている。一般的な考え方では、この場 (Bブロック、径約25m) で石器の製作がなされたと推定できよう。一方で明確な石核が存在しないことから、ここでの機能が停止した段階で石核を他所へ運び出したと思われる。

註1 秋田県教育委員会「七ノ山II遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II』1988  
(昭和63年)

註2 奏 昭繁「特殊な剝離技法をもつ東日本の石匙—松原型石匙の分布と製作時期について—」  
『考古学雑誌』第76巻第4号 P22 1991 (平成3年)

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 炭化材の樹種同定報告

#### 1. 試料

上野遺跡は、大館市池内字上野の沢の途中に舌状に張り出した平坦部に位置する。遺跡からは、平安時代に属する焼失した堅穴住居跡が1軒検出された。試料は、この堅穴住居跡から出土したNo.1 (2UN S I 40 RC 28 911031) とNo.2 (2UN S I 40 RC 44 91107) の炭化材2点である。出土状況から住居の構築材と考えられている。

#### 2. 方法

試料を乾燥させたのち木口・征目・板目の3断面を作製、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。

#### 3. 結果

試料はNo.1がイヌエンジ属の一種、No.2がカツラに同定された。試料のおもな解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は以下のようなものである。なお、一般的な性質などについては「木の辞典第1巻、第3巻」（平井、1979）を参考にした。

##### ・カツラ (*Ceridiphyllum japonicum*) カツラ科

散孔材で、管孔は単独または2~3個が複合、分布密度は高い。晚材部へ向かって管径を漸減させる。横断面では多角形、管壁は薄い。同管は階段穿孔を有し、段 (bar) 数は20以上、放射組織は異性II型、1~2細胞幅、1~30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

カツラは北海道から九州に自生する落葉高木である。カツラ属にはこのほか、本州北中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ (*C. magnificum*) がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径木が多く、欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる有用材の一つである。

##### ・イヌエンジ属の一種 (*Maackia sp.*) マメ科

環孔材で、孔圈部は1~4列、孔圈外でやや管径を減じた後、多数の道管が集まって接線方向、斜方向に複合し、木口面で帯状の模様をつくる。道管は單穿孔を有している。小道管は階

層状に配列し、内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は異性III型～同性、1～8細胞幅、1～80細胞高。軸方向柔組織は、周間状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

イヌエンジュ属には、シマエンジュ (*M. tashiroi*)・イヌエンジュ (*M. amurensis* var. *buergeri*)・ハネミイヌエンジュ (*M. floribunda*) の3種が含まれる。いずれも落葉低木～小高木で、シマエンジュは本州（和歌山）・四国・九州・琉球、イヌエンジュは北海道・本州（中部地方以北）、ハネミイヌエンジュは本州（中部地方以西）・四国・九州に分布する。このうち、イヌエンジュの材は、重硬で強度が大きく耐久性も高い。加工はやや困難であるが、床柱・農具等の柄・漆器・彫刻・薪炭材等幅広い用途がある。

#### 4. 考察

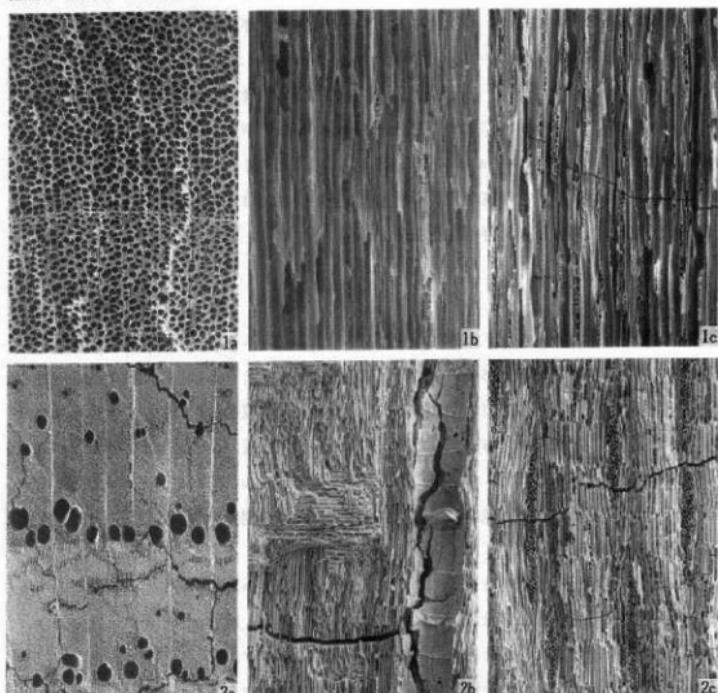
出土した建築材は、イヌエンジュ属とカツラであった。イヌエンジュ属の建築材としての報告は全国を見てもほとんど知られていないが、材の強度等を考えるととくに問題のある用材ではない。カツラは、県内からの出土例は知られていないが、本遺跡に比較的近い青森県黒石市の板留遺跡では一つの住居跡から出土した丸太材や角材の半数近くがカツラという報告がある（鳴倉、1980）。青森県内では多くの遺跡で建築材等の同定が行われているがカツラが多く出土しているのは板留遺跡だけで、他はクリやコナラ節、スギ等の樹種が多く用いられているようである。

本住居址で同定を行った試料は2点のみであり、今回の結果から本住居址の用材の傾向や他の遺跡の結果との比較を行うことはできない。また、イヌエンジュ属とカツラという強度に違いがある2種の材が出土していることは、材の強度による使い分けがあった可能性もあるが、今回の結果からはわからない。平面図を見ると、他にも炭化材が出土しているので、今後これらの炭化材についても同定を行いさらに資料を増やす必要がある。

#### 文献

- 平井信二（1979）木の辞典 第1巻、第3巻、かなえ書房  
 鳴倉巳三郎（1980）板留(2)遺跡から出土した炭化材の樹種、「板留遺跡 発掘調査報告書」  
 青森県埋蔵文化財調査報告書第59集、付録P. 1-2、青森県教育委員会。

図版1 炭化材の顕微鏡写真



1. カツラ(Na2) a(木口) x35, b(柾目)x70, c(板目) x70

2. イヌエンジュ属の一種(Na1) a x35, b x70, c x70

## 第6章 まとめ

上野遺跡の発掘調査で得られた資料は、遺構として、縄文時代の竪穴住居跡13軒、屋外が（焼土遺構）5基、土坑・フラスコ状土坑73基、溝状遺構1条、平安時代の竪穴住居跡1軒、焼土遺構1基、及び時期不明の焼土遺構1基、溝状遺構17条の計112遺構である。また遺物は、縄文時代前期～後期・弥生時代の土器・石器（剥片石器、砾石器、磨製石器）、平安時代の土師器（甕、壺、把手付土器）、須恵器（壺）、鉄製品（小刀、刀子、穂摘具様の手鎌など）、石製品（砥石）、上製品（フィゴ羽口）、及び擦文土器（甕）が出土している。本章では縄文時代と平安時代の遺構と遺物について若干のまとめを行い、本報告を終了することとした。

### 1. 縄文時代の遺構と遺物

#### （1）竪穴住居跡の時期と類例

竪穴住居跡は、床面あるいは床面上に出土土器からS I 01、S I 10、S I 18・19については、時期差は考えられるものの中期後葉～末葉の枠内に収めることができる。隆帯に沿って刺突文の施されるS I 18・19出土の第16図5は、小坂町はりま館遺跡E III区（中期末～後期前半）、二ツ井町龍毛沢館跡S I 04（後期初頭）などに類例がある。<sup>(註1)</sup> またS I 80は、破片資料のみであるが、中期後葉～後期前葉に位置すると思われる。一方S I 110は、埋土中に前期前葉、中期後葉～後期前葉の土器が混在する状況（第14図）にあり、構築時期の特定は困難である。住居の形態から見ると、2段構造をもつ竪穴住居跡は、小坂町はりま館遺跡A IV区S I 332（前期、円筒下層d式）<sup>(註2)</sup> や能代市杉沢台遺跡（円筒下層C・D式）<sup>(註3)</sup> で検出例がある。S I 43・55は、土器の出土がなく所属時期不明である。なお、竪穴住居跡の形態的特徴からすると、S I 43は、上野と同時期に調査が実施された山王岱遺跡（第3次）S I 189に規模、炉の形態など類似点が多い。

#### （2）土坑の分布・形態・類例

73基確認された土坑は、主に調査区西端部に集中する。しかも袋状・フラスコ状を呈する土坑は、ほぼ調査区中央部西側以西に限られる。構築時期については、出土遺物が極端に少なく、言及の材料に欠くが、土器ではS K 78確認面で後期前葉の深鉢形土器が、またS K 81、S K 82埋土中位より前期前葉の土器片が得られている。この点と、遺構外出土土器から調査区西端部では、土坑の下限時期を後期前葉に求められ、主として前期前葉あるいは中期後葉の構築と想定できる。

また、土坑の形態にはバラエティーがあり、坑底面からの掘り込みの有無とその形態で次の6タイプに類別できる。(第20図模式図参照)

- (a) =掘り込みなし。
- (b) =底面中央に1本の柱穴状の深いピットあり。1基。
- (c) =底面ほぼ中央に基本的に1本の浅いピットあり。10基。
- (d) =底面に(c)より小規模な浅いピットが複数あり、数字はその本数。2基。
- (e) =底面に小土坑様の深い掘り込みあり。2基。
- (f) =底面に小土坑様のごく浅い掘り込みあり。4基。

(b) タイプはSK117のみであり、断面形態と併せて「陥し穴」を想定できる。この種の円形の陥し穴は、米代川流域では、小坂町はりま館遺跡A I・II区、同E III区、鹿角市太田谷地  
(註6)館跡(2次)、鹿角市下乳牛遺跡などに類例がある。大館市内では1991年に調査された上聖遺跡で1基の類例がある。

(c) タイプは、断面形が袋状もしくはフラスコ状を呈する比較的大型の土坑底面ほぼ中央に浅いピットをもつ。(b) タイプの様に柱穴状の深い掘り込みは認められず、深さの平均8.5cmである。同種の類例は、大館市上ノ山I遺跡(2次)(前期後業)、比内町横沢遺跡(中期後業)  
(註7)、鹿角市大湯環状列石周辺遺跡(後期前葉)、鹿角市太田谷地館跡(1次)などに求めることができる。

(e) タイプは、土坑のなかに小さな土坑が掘り込まれている形態であり、「子持ち土坑」とも言える。類例は、小坂町白長根館I遺跡(後期)、小坂町横館遺跡、鹿角市猿ヶ平II遺跡、鹿角市北の林II遺跡、鹿角市天戸森遺跡(中期後葉)などにあり、中期後葉～後期の構築例が多いようである。

その他、(f) タイプは大館市上ノ山I(2次)SKF241で見られるが、(d) タイプを含めて類例は殆どないようである。

土坑、特にフラスコ状・袋状・筒状を呈する比較的大形の土坑は、その縦断面のプロポーションが比内町横沢遺跡の土坑に近似している。同遺跡では、(c) タイプの土坑も11基検出されていることと、地理的距離、時期(中期後葉)を考えれば、両遺跡間の交流、集団の移動等の想定ができる。

## 2. 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構と遺物については、それぞれに幾つかの点において特徴的と考えられる事項が存在する。

### (1) 遺構について

検出遺構は、竪穴住居跡と焼土遺構のみであるが、両遺構の立地に特異性が認められる。汎

内に立地している点である。豎穴住居跡については、その掘り込み面は必ずしも明確ではないが、火山灰（大湯浮石）が降下しその上に、黒色土（I-b層）が2~3cm堆積した後と考えられることから、当時の沢内部の地表面は、沢上部の地表面より1m前後下がっていたと思われる。従って台地の上から眺めた当時の住居の景観は、屋根の上半分が地面から顔を覗かせているような様を想像できる。

なぜこのような湿気が多く居住には適しているとは言い難い沢内に住居を構築するに至ったのであろうか。沢上部には幾らでも適地があると思われる所以であるが、現場での調査中に感じたのは次の2つのことであった。その1つは風の問題、他の1つは生業の問題である。

沢上部での調査中には、ほぼ毎日のように雨の沖積地から吹き上げる強風に悩まされていた。ところが沢内に入ると風は頭の上を通り過ぎる。この辺りに構築の経緯があったのかもしれない。また生業との係わりでは、すなわち豎穴住居跡の南東約3.5mに位置する焼土遺構（SN38）の性格である。本遺構精査時点では、豎穴住居跡及びその周辺部の遺物の存在が未確認であったため、「鉄」との係わりを考慮することなく調査を進めていた。その後、豎穴住居跡を検出し、その中から鉄製品の出土、更にカマド周辺からは鍛造剝片を確認したことから、SN38も鉄生産に係わりのある遺構ではないかと想定するに至ったが、その時には、本遺構は精査を終了し、この部分を下層に掘り下げていた。そのため、SN38での鍛造剝片の有無は不明であるが、掘り込み、焼土、白色粘土等の状況証拠から、鍛冶炉であった可能性を想定したい。これは周辺出土遺物の中に炉壁、鉄滓あるいは鉄塊が全く認められないことから、製鉄炉もしくは精練炉とは考えにくく、SN38の掘り込み規模（長さ62cm、幅40cm、深さ22cm）から小鍛冶に伴う炉と想定したのである。壁・底面は黒色土中にあるためか焼土化した面は観察できなかった。このように豎穴住居跡及び焼土遺構が鍛冶に関連ある施設とすれば、この豎穴住居跡は居住環境を重視するより、風対策を念頭において選地された結果とみることもできる。

## （2）遺物について

豎穴住居跡、焼土遺構及びその周辺出土の遺物は、その分布、出土層位からほぼ同時存在の資料と見て大過ないと考える。その年代については、遺物の出土した遺構が現在降下年代を10世紀前半と考えられている十和田a火山灰（大湯浮石層）を切り込んで構築されていることと、擦文土器・土師器甕の形態・調整、把手付土器の存在などから11世紀代と想定している。

ここでは、まとまった形では秋田県内初見の擦文土器を中心に、その類例と年代について探ってみたい。

上野遺跡で出土した擦文土器は、その分布の中心に位置する北海道の時期区分に従えば、およそ擦文化後期にあたると思われる。しかし上野の土器は、横走する沈線文あるいは鋸歯状の刻文という要素を取り除くと、土師器そのものである。鈴木克彦氏が、このような土器を

(土師器と擦文土器)「両者の要素を併わせ持つ、或いはいずれともつかぬ土器として」「第三の土器」、「第四の土器」と仮称したことがある。これに従うと「第三の土器」は横走する沈線文土器であり、「第四の土器」は横走する沈線と鋸歯状の刻文をもつ土器になる。一方土師器の要素の部分については、共伴する土師器とは、胎土、調整が明らかに異なる。この点については、擦文土器の発生との係わりからふれなければならない。

擦文土器の発生について菊池徹夫氏は、「擦文土器は器形や整形法において“父なる”土師器の伝統を示し、一方、独特の直線的な平行沈線や幾何学的刻線文には“母なる”続繩文土器、とりわけ江別式系土器の面影を色濃く留めている」といい、その時期は、現在では東北地方での土師器との併行関係から7世紀後半から8世紀初頭を見ている。この時期に土師器と続繩文土器（北大式）が接触して新たな土器が生まれた。擦文という名は、器面上に擦文＝刷毛目が施された土器からきているもので、まさに7・8世紀代の土師器に普遍的に認められる手法を取り入れている。

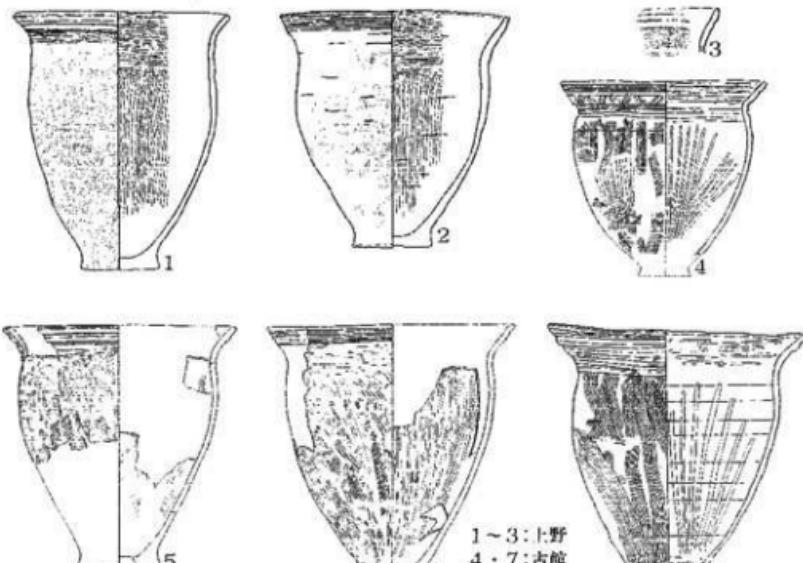
秋田県内では變形土器に対しては、8世紀後半以降刷毛目調整を施す例は激減し、代わってナデやケズリといった調整手法が一般的となる。11世紀に入ると粗いケズリ（ナタケズリ）のみの變も現れる。一方の擦文土器は、本例に認められるように伝統的な器形、調整手法（刷毛目）を保守しているのである。土器の胴部のみを見せられると8世紀代の土師器と見誤る程である。唯一の違いと言えば、8世紀代には認められないわゆる砂底を呈する底部だけであろう。



第66図 擦文文化後期の主要遺跡分布図

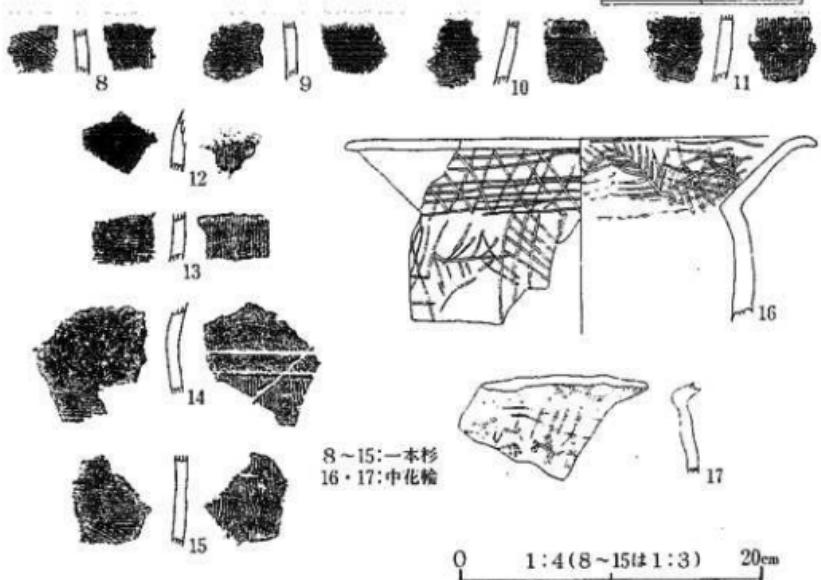
第66図は、擦文文化後期の主要な遺跡の分布図である。これを基に、本擦文土器の類例を調べると、青森県碇ヶ関村古館遺跡（第67図4、7）、北海道松前町札前遺跡（同5、6）などの遺跡名を挙げができる。両遺跡とも、口縁部に横走する沈線文のみの文様を持つものが主体を占め、札前遺跡では刻文・鋸歯状の沈線文などの文様をもつ個体の出現率は「4%強でしかない」という。古館遺跡も数字（比率）としてのデータはないが、札前例に近似するであろう。

一方この2遺跡は、擦文土器以外でも本遺跡との類似点を抽出できる。それは把手付土器と鉄製品である。特に古館遺跡では、把手付土器と刀子、穂摘具様の手鏡（同報告書では「目釘式手鏡」）に類例がある。また札前遺跡でも形態はやや異なるものの北海道で唯一の把手付土器が出土している。



上野の擦文土器と古館・札前の擦文土器の比較

0 1:6 20cm



第67図　県内外の擦文土器もしくは擦文の影響を受けた土器

なお穂摘具様の鉄製品は、秋田県内では、上野遺跡に近い大館市山上古遺跡第4号竪穴住居跡出土に類例がある。「現長8.7cm、幅1.25cm、両端部に紐通し孔があげられ」とある。本例の釘式とは異なるようである。<sup>(註21)</sup> 時期的には9世紀後半～10世紀初頭を想定しており、上野遺跡とは100年（以上）の開きがある。また鹿角市太田谷地跡・中の崎遺跡・案内田遺跡・歌内遺跡でも「手錠」あるいは「穂摘具」として報告されている。

上野遺跡で出土した擦文土器は、擦文化後期の分布圏の南縁にあたる。前述の駒ヶ関村古館遺跡のわずか南西約26kmに本遺跡が位置しているのである。地理的にも擦文土器の分布圏に入ると想定されていた米代川流域でようやく擦文土器が確認できたことになる。秋田県では、雄物川河口部、日本海に程近い秋田市後城遺跡で擦文土器片が1点出土したことを見一例（第68図4）としていた。<sup>(註22)</sup> 時期的には、擦文化前期にあたり、土師器のなかに擦文土器の鋸歯状沈線を取り入れたものである。上野遺跡出土の擦文土器の観察の結果から、既に調査済の資料を再点検してみると、「刷毛目を持つ土師器」と報告されているものの中に擦文土器と目される土器が混在しているようである。<sup>(註23)</sup>

鹿角市--本杉遺跡（第67図8～15）では、S I 001・002で2片、S I 010で4片、S I 012で2片のいずれも竪穴住居跡出土の「土師器」として図示報告されている。10と15は外面に整形跡と見られる段が認められる以外は、外面に刷毛目、内面にヘラナデの調整痕をもつ。共伴する土師器から10～11世紀と考えられる。同遺跡報告書作成にあたって内部では「擦文土器ではないか」との声も上がっていたが、当時（1981年調査）の状況では、小破片のみであることと、米代川流域での未検出等を理由に拓影図の提示のみに留めた経緯がある。

また、鹿角市中花輪遺跡出土の「刻文繪画土器」（第67図16、17）も格子目状の沈線文などは明らかに擦文土器の影響下にあるものとして認知できよう。<sup>(註24)</sup>

このように7・8世紀に発生した擦文土器は、土師器の美しい形と刷毛目による調整手法を手本に、刻文等の文様を附加して独自に発達を見せる。手本にされた土師器は、8世紀後半ないしは9世紀前半を境に伝統的な刷毛目あるいはミガキといった手法を切り捨てていく。簡略化というより手抜き、変質、退化と言えよう。それが國寶となるのが11世紀である。器形は8世紀当時の面影すらなくなる。まさにこの11世紀に「上野」の地で進む方向を変えた両者が<sup>(註25)</sup>「土師器より土師器らしい擦文土器」と「土師器のなれの果て」という顔で再会したのである。

註1 秋田県教育委員会『はりま館遺跡発掘調査報告書』（下巻）P654 1990（平成2年）

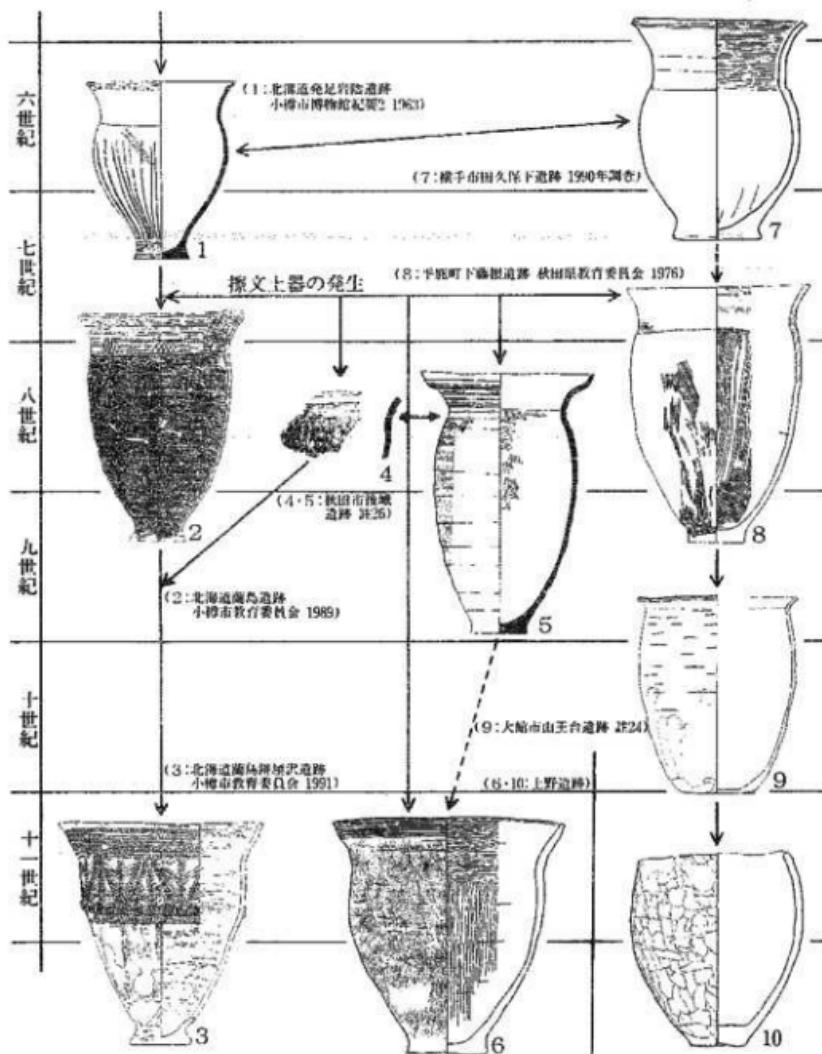
註2 秋田県教育委員会『毫毛館跡発掘調査報告書』P32 1990（平成2年）

註3 註1文献（上巻）P263～268

註4 秋田県教育委員会『杉沢古遺跡発掘調査報告書』1981（昭和56年）

- 註5 許文獻（上巻）P64、（下巻）P649
- 註6 秋田県教育委員会「太田谷地跡第2次調査」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V』P52 1989（平成元年）
- 註7 秋田県教育委員会「下乳牛遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書III』P264～265 1984（昭和59年）
- 註8 秋田県教育委員会「上ノ山I遺跡第2次調査」『国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財調査報告書IV』P41～43 1991（平成3年）
- 註9 秋田県教育委員会「横沢遺跡」『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』P33～47 1988（昭和63年）
- 註10 魚角市教育委員会「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』P34～38 1989（平成元年）  
鹿角市教育委員会「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(6)』P48 1990（平成2年）
- 註11 秋田県教育委員会「太田谷地跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』付図3 1988（昭和63年）
- 註12 秋田県教育委員会「白瓦根前I遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書II』P60 1984（昭和59年）
- 註13 秋田県教育委員会「南船塚跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』P206 1984（昭和59年）
- 註14 秋田県教育委員会「猪ヶ平II遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI』P41～42、60  
1983（昭和58年）
- 註15 秋田県教育委員会「北の林II遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV』P27 1982（昭和57年）
- 註16 魚角市教育委員会「天戸森遺跡』P347～348 1984（昭和59年）
- 註17 許文獻 P42
- 註18 鈴木克彦「青森県の擦文化—擦文化の外縁圏における一様相」『どるめん』22 1979（昭和54年）
- 註19 萩池徹夫「擦文化研究の現状と課題」『考古学ジャーナル』213 1983（昭和58年）
- 註20 横山英介「擦文化」P24～26 1990（平成2年）
- 註21 分布図は、三浦圭介「古代における東北地方北部の生業」『北からの視点—日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集』P149 1991（平成3年）、及び註20文獻 P33を参照。
- 註22 青森県教育委員会「碇ヶ関村古館遺跡」1980（昭和55年）
- 註23 札前町教育委員会「札前・国道228号線改良拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書ー」1985（昭和60年）
- 註24 大館市教育委員会「大館市山王台遺跡発掘調査報告書」1990（平成2年）
- 註25 太田谷地跡は註11文獻 P63～68、中の崎遺跡は秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII」1984（昭和59年）、案内田遺跡は、同「東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI」1983（昭和58年）、歌内遺跡は、同「東北縦貫自動車道発掘調査報告書II」1982（昭和57年）。秋田県内では複数異様の鉄製品は半代川上流域の大館・鹿角地方でのみ検出されている。

- 註26 秋田市教育委員会「後城遺跡発掘調査報告書」1981（昭和56年）  
 註27 秋田県教育委員会「一本杉遺跡」東北縱貫自動車道発掘調査報告書VI、1983（昭和58年）  
 註28 藤井安正「鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器」『考古風土記』第8号、1983（昭和58年）  
 註29 土師器と擦文土器の歩んできた道筋を模式的に表したのが、下の第68図である。

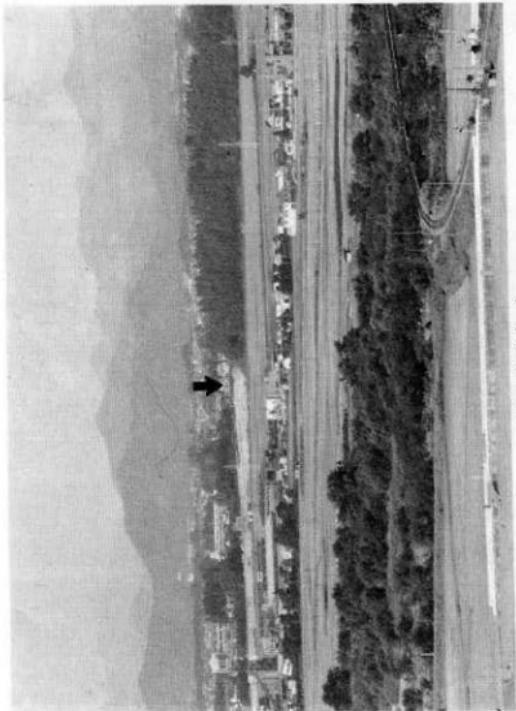


第68図 土師器の流れと擦文土器の流れ(概念図)

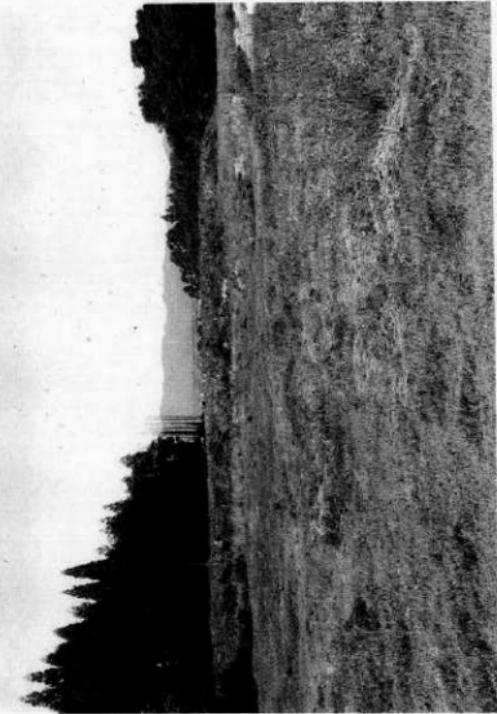


上野遺跡周辺航空写真

圖版 2



道路遠景(南→)



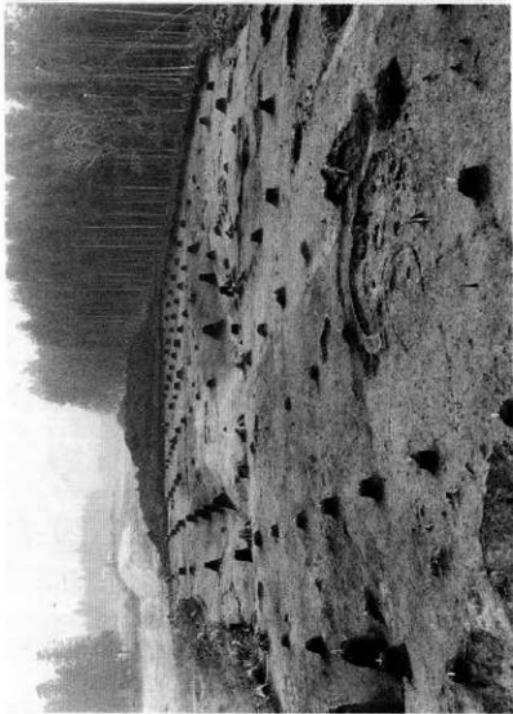
道路近景(北東→)

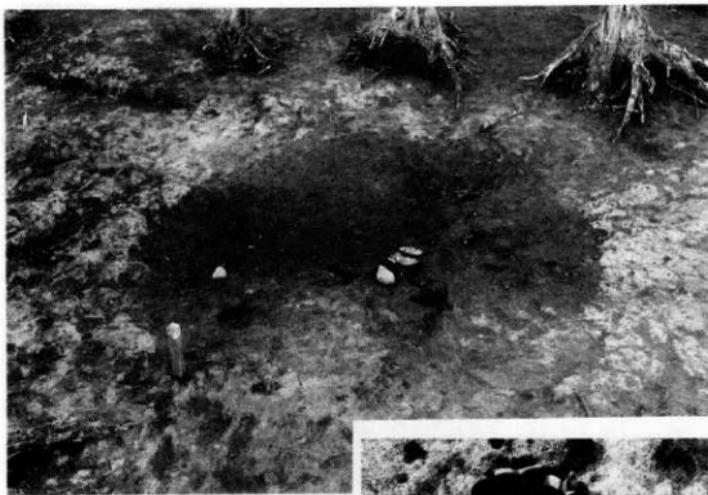


調査区西端部 調査前近景(東→)

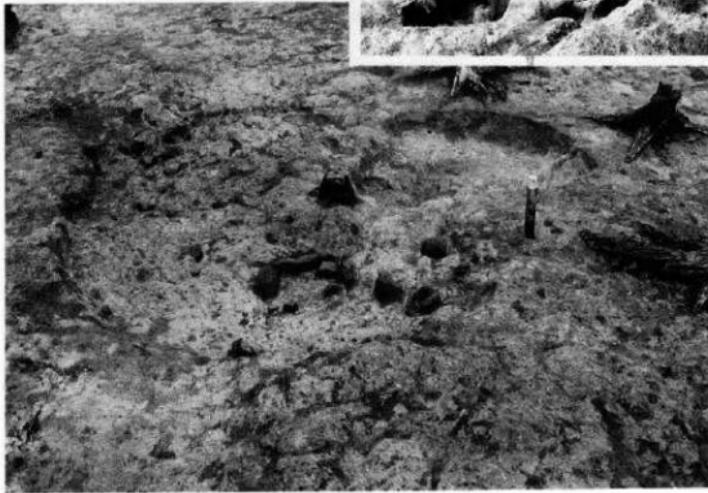
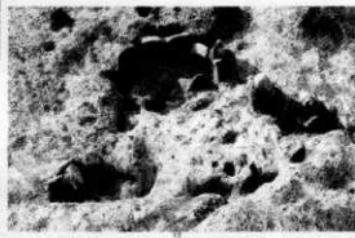


同上 調査後全景(東→)

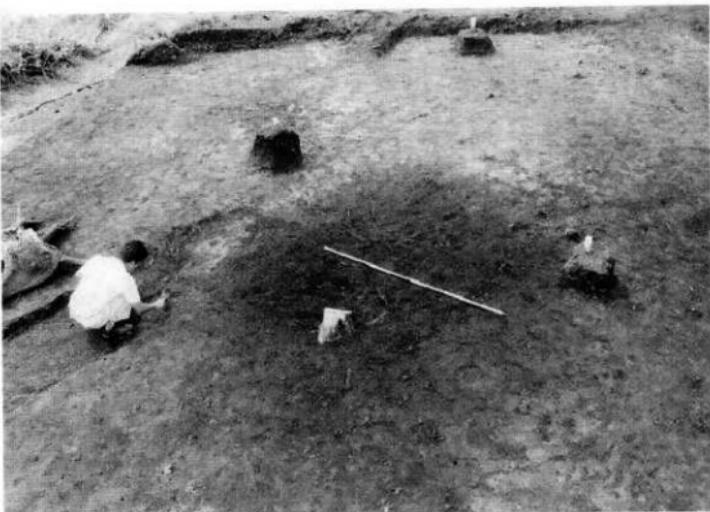




SI01 確認状況(上、南→)  
同 完掘(下、東→)  
同 炉 (右、東→)



図版  
6



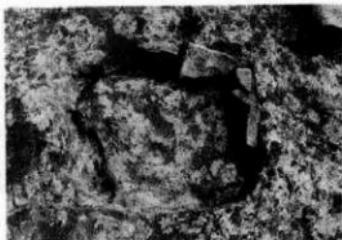
SI10 確認状況(東→)



SI10-60 完掘(西→)



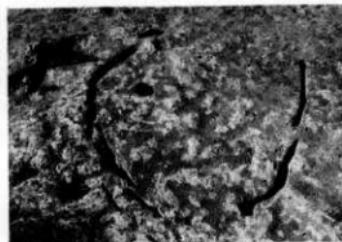
SI10 土層(西→)



SI10 炉(北西→)



SI10 炉と立石(北西→)



SI60 完掘(南→)



SI18・19, SK17・20・22 確認状況(東→)



SI18-19 炉確認(東→)



SI18 炉土層(北→)



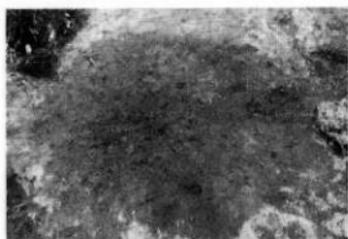
SI18 炉完掘(北→)



SI19 炉土層(東→)



SI43-55, SK51-52 完掘(東→)



SI43-55 確認(東→)



同左 土層(北→)



同上 土層(東→)



SI43 灰(西→)

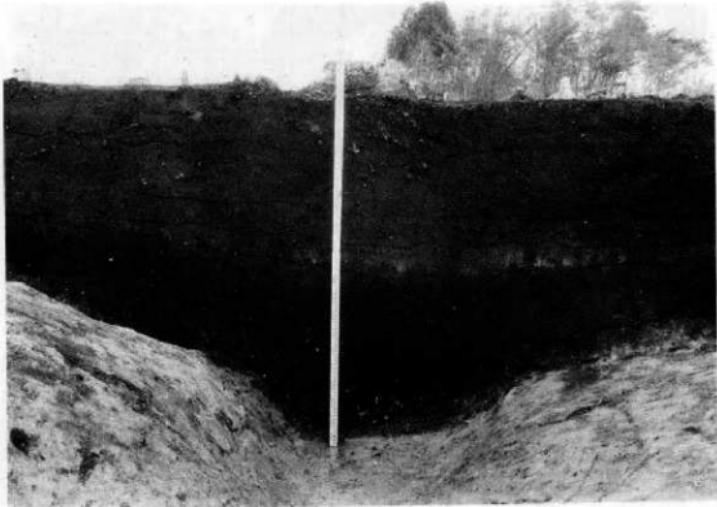


SI80-87、土坑群 完掘(東→)

図版  
10



S180 土層(南→)



基本土層(沢1B、南北方向、東→)



SI110-122(北半、南→)



SI110-112(南半、南→)



SN65 石圈爐(西→)



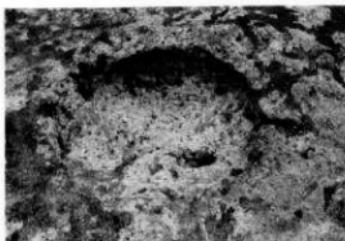
SN112 石圈爐(東→)



SN66 土層(東→)



遺物出土狀況(MA52)



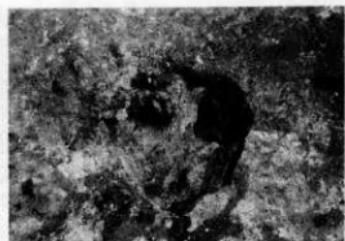
SK07 完掘(南→)



SK09 完掘(北→)



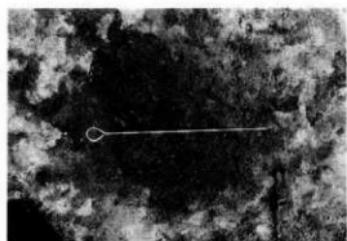
SK20 土層(南→)



SK29 完掘(西→)



SK33 完掘(北→)



SK35 確認(西→)



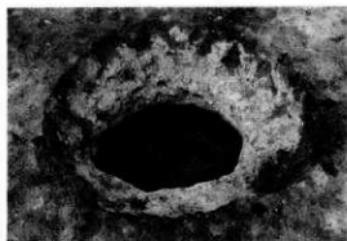
SK41 土層(北→)



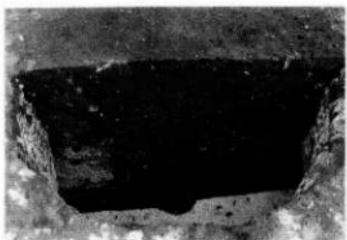
同左 完掘(北東→)



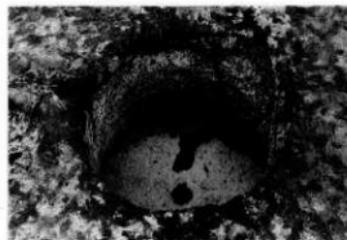
SK42 土層(南→)



同左 完掘(東→)



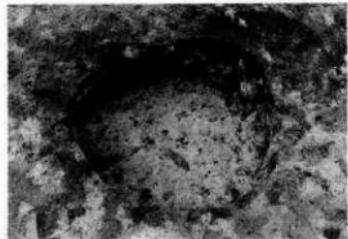
SK50 土層(南→)



同左 完掘(南→)



SK51-52 土層(東→)



SK56 完掘(南→)



SK61 土層(東→)



SK63 完掘(西→)



SK64 完掘(北→)



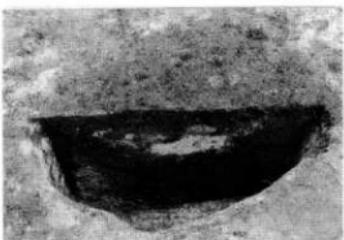
SK70 完掘(南→)



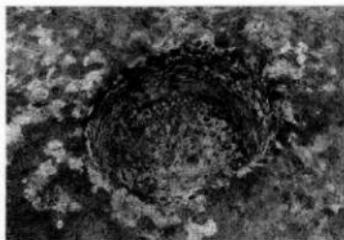
SK72 土層(東→)



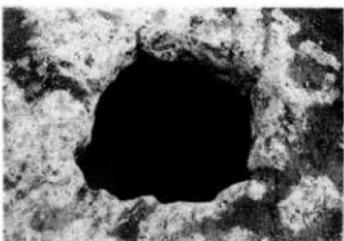
同左 完掘(東→)



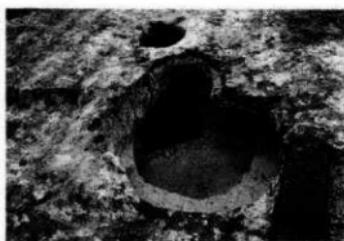
SK73 土層(東→)



SK73 完掘(東→)



SK74 完掘(東→)



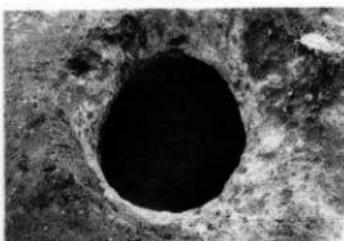
SK74-85 完掘(北→)



SK76 完掘(南→)



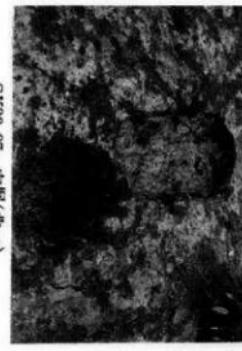
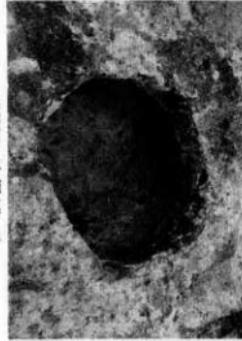
SK78 土層(東→)



SK79 完掘(西→)

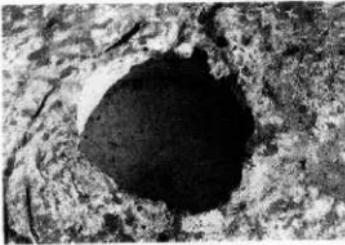


同上 遺物出土状況

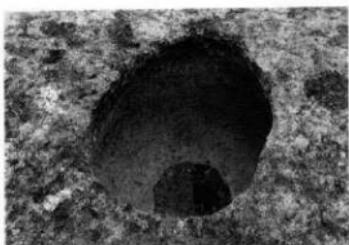




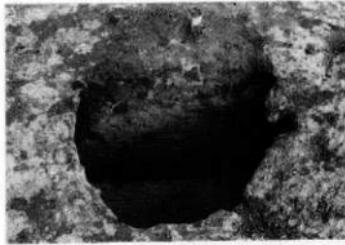
SK105 土層(南→)



同左 完掘(南→)



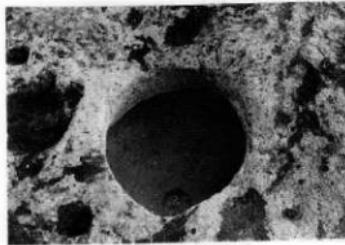
SK106 完掘(南→)



SK107 土層(南→)



SK111 土層(東→)



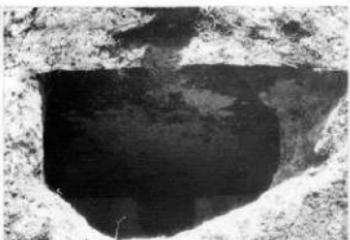
同左 完掘(西→)



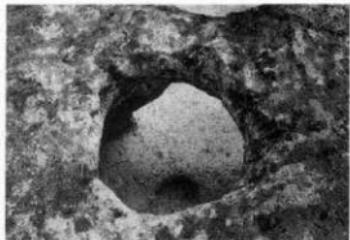
SK114 土層(東→)



同左 完掘(東→)



SK116 土層(西→)



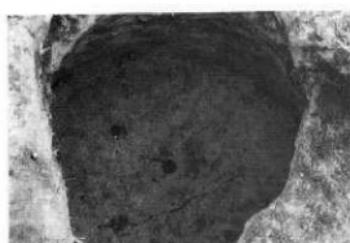
同左 完掘(北→)



SK117 土層・完掘(南→)



SK118・121 完掘(南→)



SK120 完掘(西→)



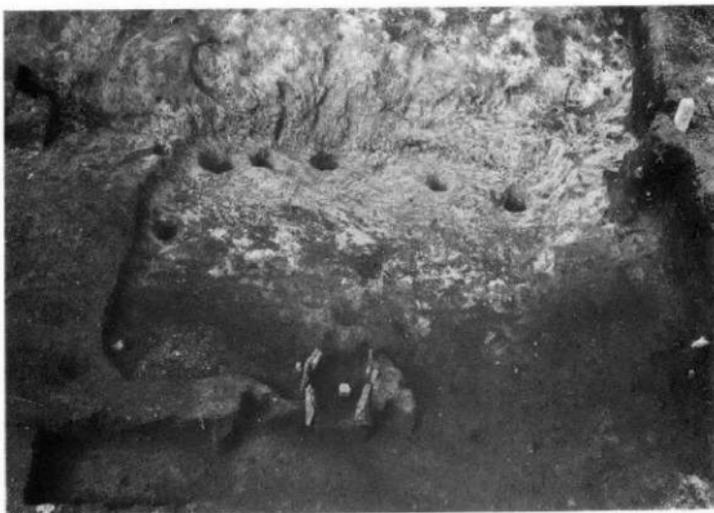
SK123 土層(西→)



SK124 完掘(南→)



SD02-34 確認(南→)



SI40 完掘(東→)



SI40 カマド及び遺物出土状況(東→)



SI40 土層(南→)



同上 カマド(南→)



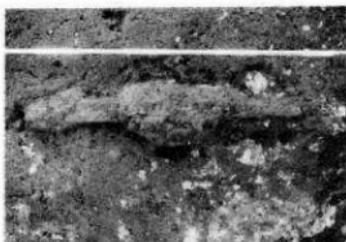
同上 カマド完掘(西→)



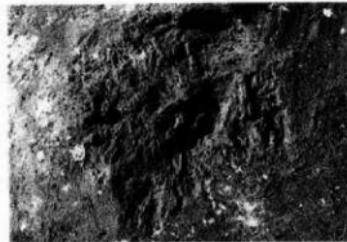
同上 遺物出土状況



同上 遺物出土状況



SI40 小刀出土状況



同左 炭化物出土状況



SI40 調査風景

この年は、天候不順の日が多く  
左のように倒木の根をかけて調  
査を行っていた。



SN38

撲文土器出土状況  
撲文土器発見のきっかけと  
なった資料。撮影段階では  
「撲文」との認識はなかった。



SN38 土層(南→)



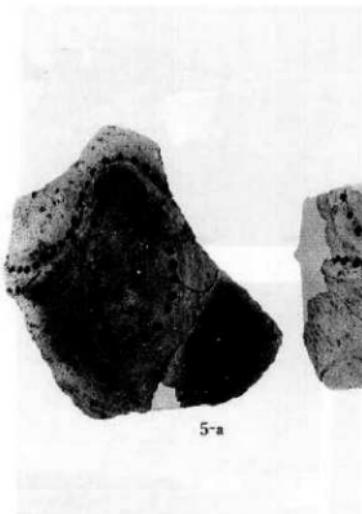
同左 土層



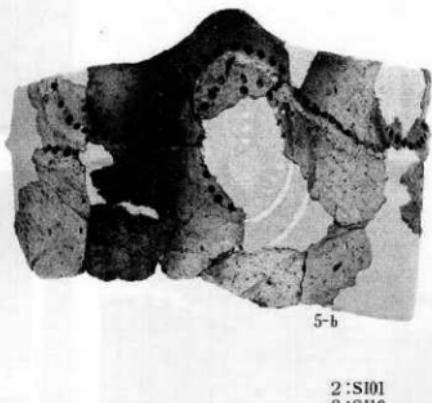
2



3



5-a



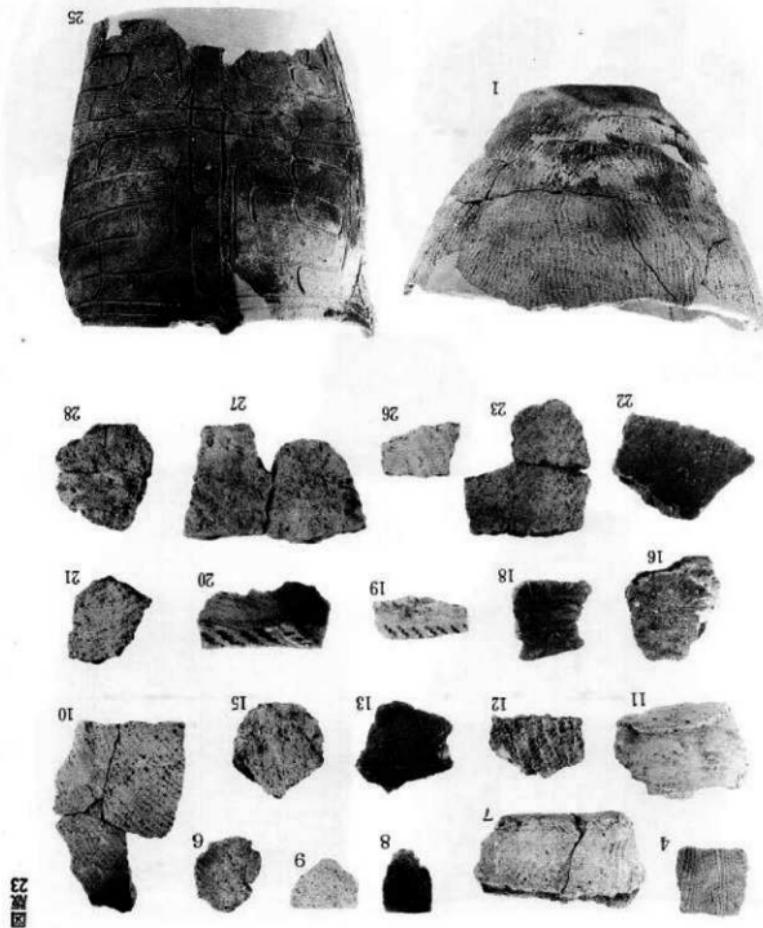
5-b

整穴住居跡出土土器

2 : SI01  
3 : SI10  
5 : SI18·19

雞頭內出土土器

11: SI80  
28: SK99  
6-8-10: SI8-19  
27: SK81  
4-7: SI10  
26: SK81  
1: SN65  
12-23: SI10





50



51



52

50-51-52:SI40  
65:SN38  
71:追査外



53



71

平安時代の遺物(1)

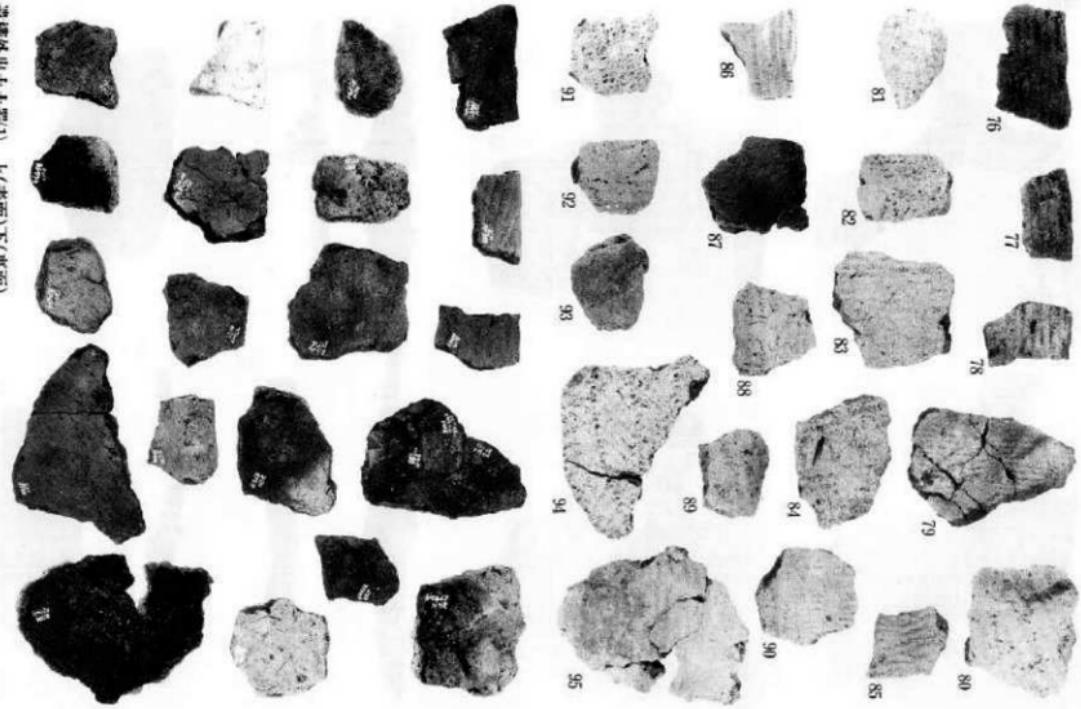


54-63:S140

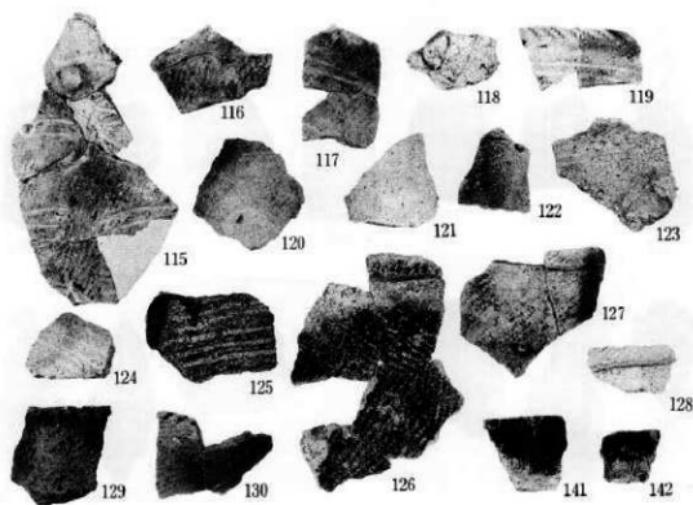
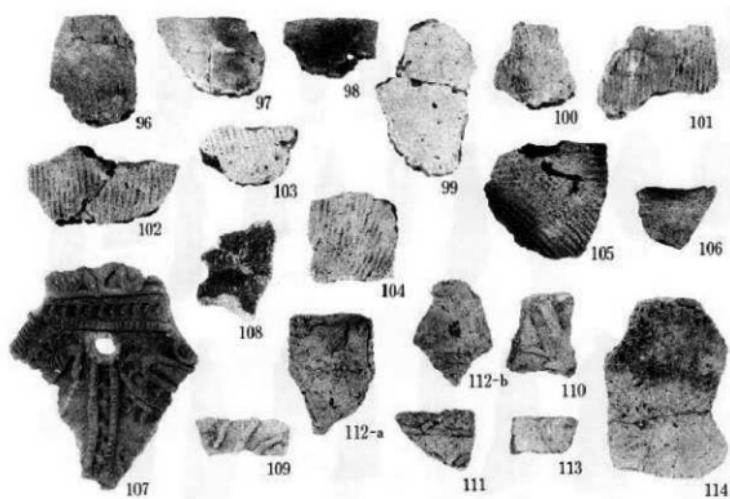
平安時代の遺物(2)

圖版

26

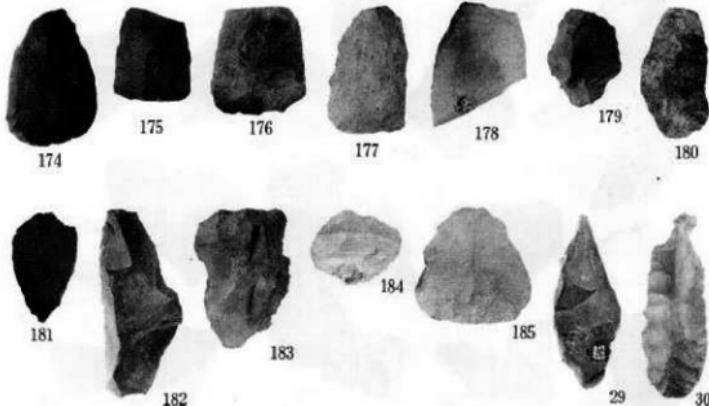
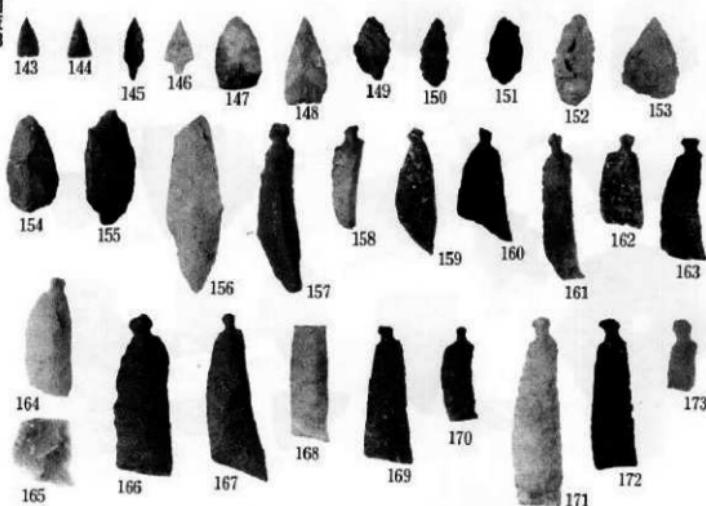


遺構外出土器物  
上(表面)下(底面)



造構出土土器(2)

圖版  
28



29:S101  
30:S110

造構内外出土石器

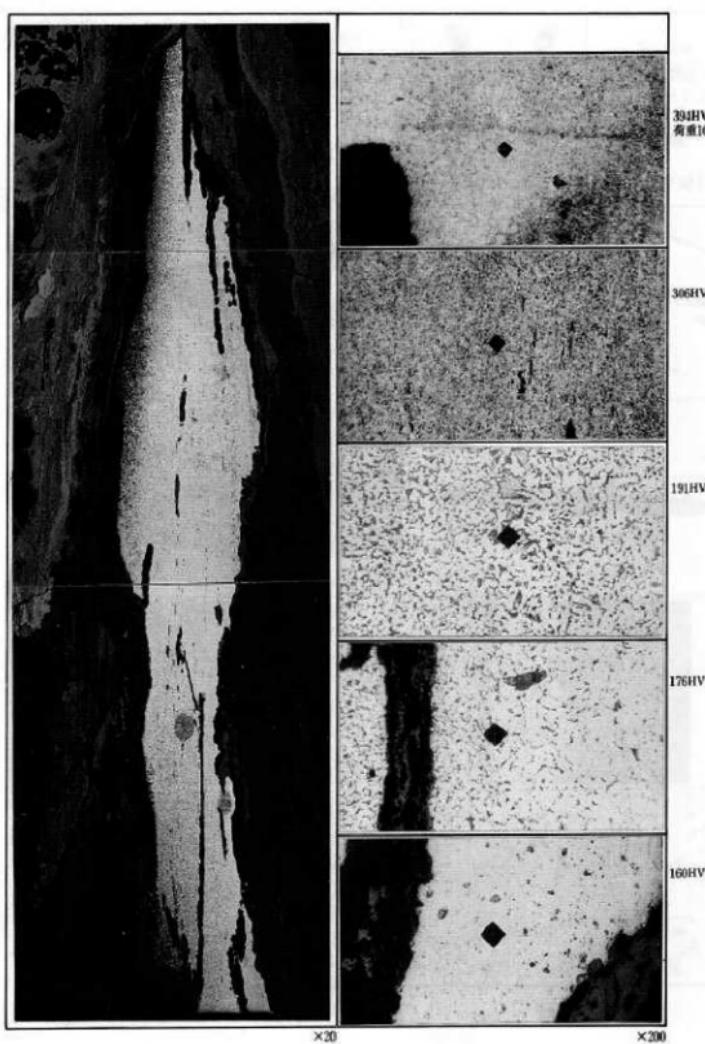


photo.1 上野遺跡出土鉄器(RM-33)のマクロ組織とピッカース断面硬度圧痕

RM-33  
上野遺跡  
(2UN S140  
RM33出土)  
鉄器  
外観写真1/2.3



①	$\times 100$ 非金属介在物 (ウルボスピネル: Feo-TiO <sub>3</sub> 系)
②	$\times 400$ 非金属介在物 (ウルボスピネル: Feo-TiO <sub>3</sub> 系)
③	$\times 100$ 非金属介在物 (ヴェスサイト: Feo系)
④	$\times 400$ 非金属介在物 (ヴェスサイト: Feo系)
⑤	$\times 100$ ピクラルetch炭化物(ペーライト) 左側C量0.01% 右側0.3%
⑥	$\times 400$ ピクラルetch 低炭素側C量0.01% 高炭素側C量0.3%
⑦	$\times 400$ ピクラルetch

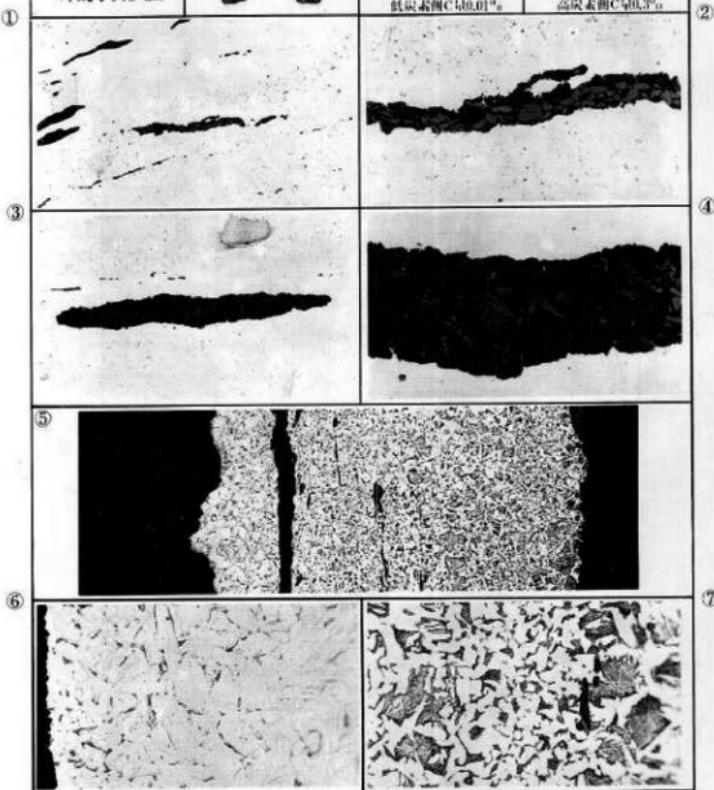


photo. 2 上野遺跡出土鉄器(RM-33)の顕微鏡組織